

(参考資料)

資料2

福島県の教育の現状分析

—SWOT分析のバックデータ集—

【本データ集の3原則】

- ✓ 論より証拠(エビデンスベースで分析)
- ✓ 簡潔明瞭(複雑な事柄をシンプルに整理)
- ✓ 課題の可視化(何が論点か見える、共有できる)

平成28年11月
福島県教育庁

目次 1

データ	頁
◇ 課題(Weakness)	5
科目別のレーダーチャート(1)	6
科目別のレーダーチャート(2)	7
標準化得点の推移	8
学校ごとの平均得点の分散	9
都道府県ごとの平均正答数の分散	10
得点分布からの分析(1)	11
得点分布からの分析(2)	12
生活圏別平均正答率の状況	13
難関大学合格者の推移	14
勉強が「好き」と答える子ども	15
教員間の学び合いの状況(1)	16
教員間の学び合いの状況(2)	17
教員間の年齢構成	18
学校管理職のマネジメントと学力の関係(1)	19

データ	頁
学校管理職のマネジメントと学力の関係(2)	20
校内研修の効用	21
教職員の多忙化の状況(1)	22
教職員の多忙化の状況(2)	23
教員のメンタルヘルス	24
家族形態の変容	25
家庭の教育力	26
地域の教育力の課題(1)	27
地域の教育力の課題(2)	28
地域の教育力の課題(3)	29
学校支援等の地域と学校が連携・協働した取組の効果	30
学校支援地域本部の設置状況	31
コミュニティスクールの設置状況	32
校舎の耐震化率・耐震性がない建物の残棟数	33

データ	頁
◇ 強み(Strength)	1
無解答率が少ない(1)	2
無解答率が少ない(2)	3
チャレンジする福島の子ども	4
アクティブ・ラーニングの効用	5
「つなぐ教育」の成果	6
白河市の取組	7
家庭での学習習慣の確立	8
家庭での学習時間と学力のクロス分析	9
少人数学級の成果	10
規範意識・礼儀正しさの高まり	11
学校内外の暴力行為の件数	12
中途退学率	13
少年犯罪の件数	14

目次 2

データ	頁
◇ 恐れ(Threat)	48
不登校の児童生徒数の推移	49
不登校傾向の児童生徒の状況	50
子どもの心の健康度	51
肥満児童生徒の推移(男子)	52
全国体力調査の結果(1)	53
全国体力調査の結果(2)	54
全国体力調査の結果(3)	55
避難している子ども	56
年少人口等の減少・人口流出	57
避難地域12市町村の小・中学校の避難等の状況	58
避難地域12市町村の小・中学校の状況	59
避難指示区域等内における県立高校の状況(1)	60
避難指示区域等内における県立高校の状況(2)	61
地域コミュニティの再生の課題	62

データ	頁
職業別雇用情勢	63
高校卒業者の離職率の推移	64
民間企業における教育訓練費	65
少子化の一因(教育費負担)	66
家庭の経済状況等と学力の関係	67
就学援助・奨学金等の状況(1)	68
就学援助・奨学金等の状況(2)	69
特別支援が必要な子どもの状況	70
特別支援が必要な子どもの増加	71
スマートフォン・ネットモラル(1)	72
スマートフォン・ネットモラル(2)	73

データ	頁
◇ 機会(Opportunity)	74
ふたば未来学園高校での実践(1)	75
ふたば未来学園高校での実践(2)	76
富岡高校バドミントン部の栄光	77
小高産業技術高校 開校へ	78
双葉郡教育復興ビジョンと、ふるさと創造学	79
学校再開と学校魅力化	80
たくましく育つ子どもたち(小学生) ～将来の夢に立ち向かう～	81
たくましく育つ子どもたち(中学生) ～自然災害に立ち向かう～	82
たくましく育つ子どもたち(中学生) ～風評被害に立ち向かう～	83
たくましく育つ子どもたち(高校生) ～人生に立ち向かう～	84
たくましく育つ子どもたち(高校生) ～将来を描く～	85
人のために生きていたいと思っている子ども	86
「自分には良いところがある」と思う子ども	87
国際的な研究開発環境の整備	88

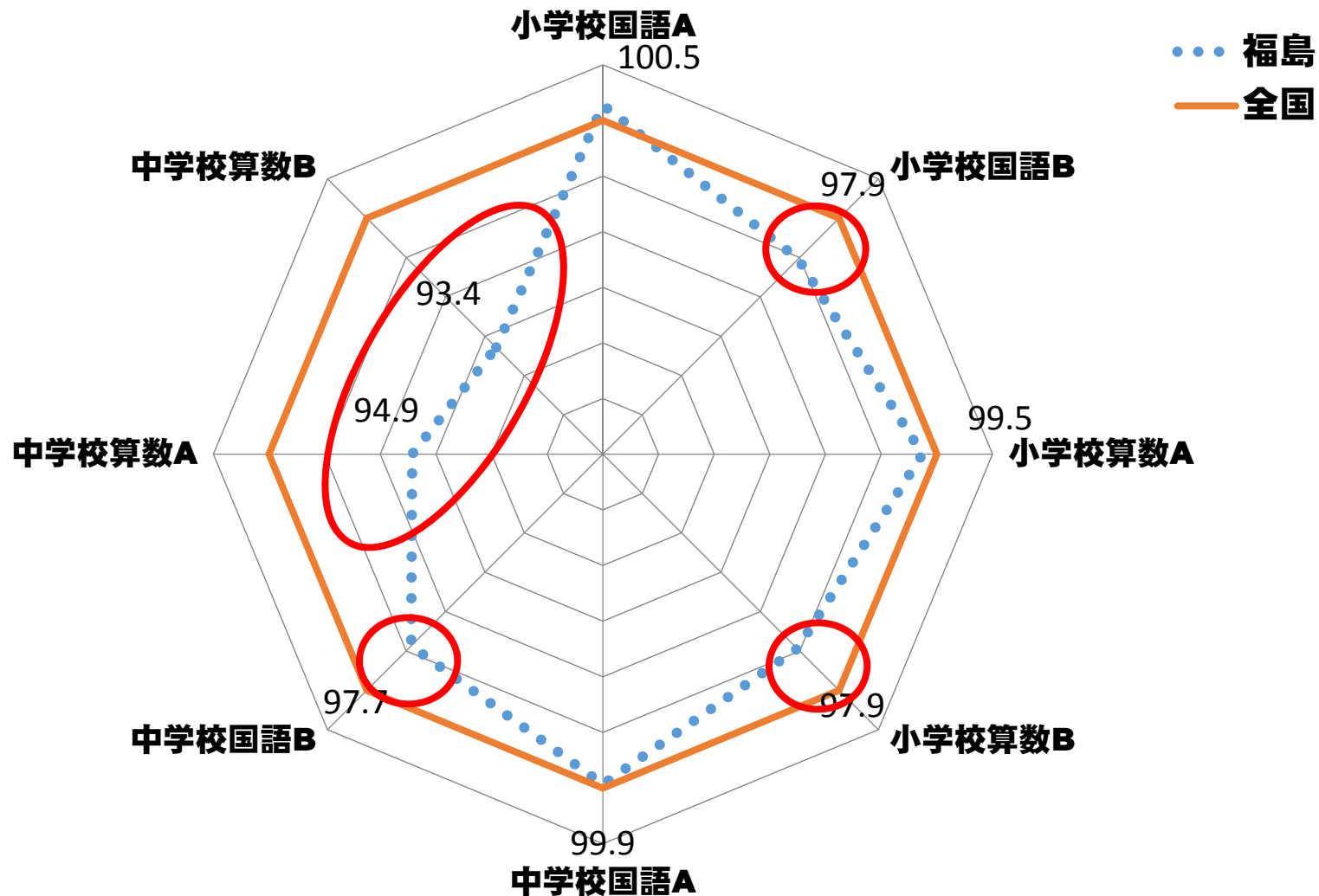
課題 (*Weakness*)

科目別のレーダーチャート(1)

課題(Weakness)

- 算数・数学や、知識・技能を活用すること(B問題)が苦手である傾向。(赤丸部分)
- 国語や、知識・技能の定着(A問題)は全国平均並み。

(平成28年度全国学力・学習状況調査結果)

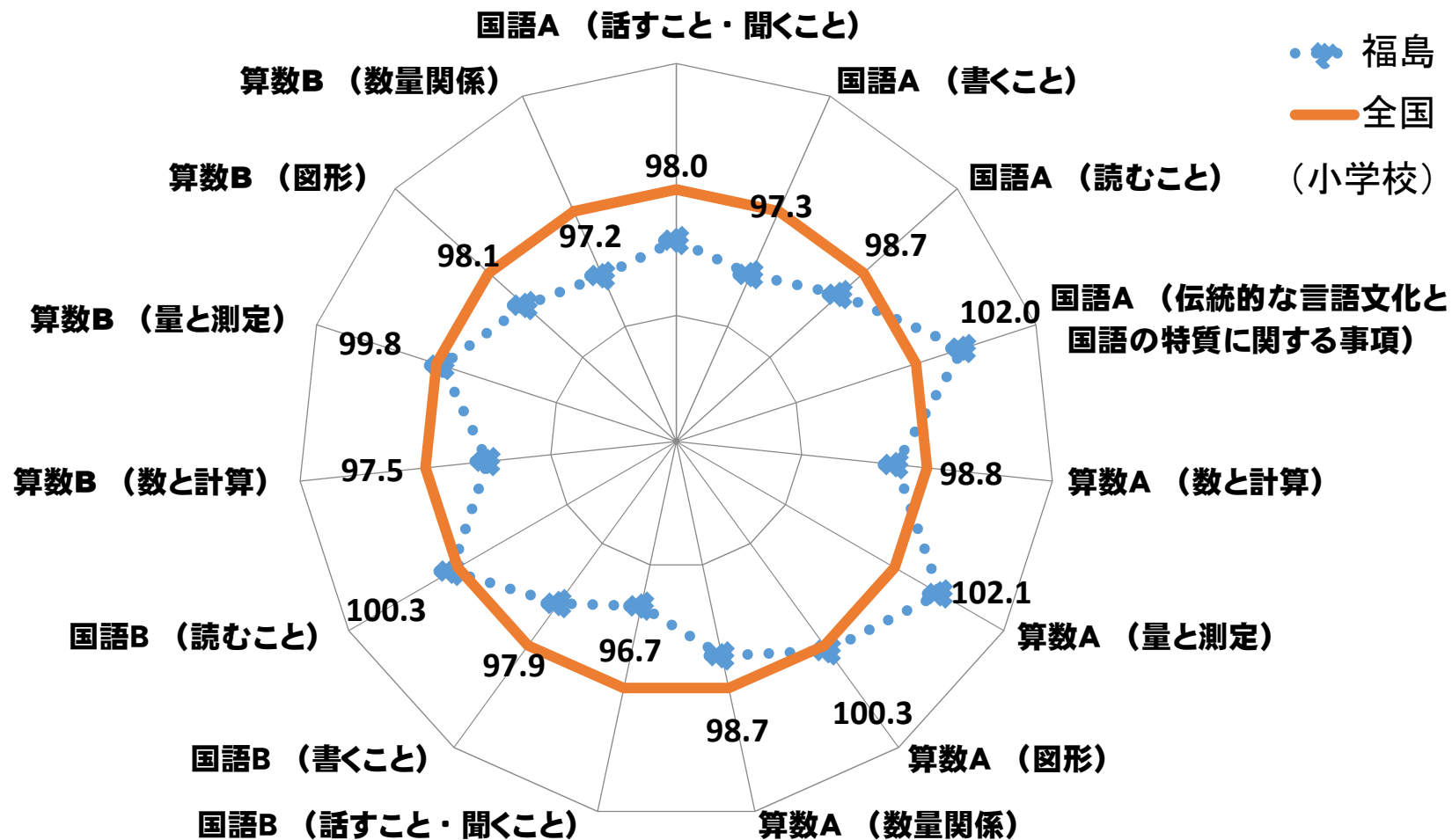


科目別のレーダーチャート(2)

課題(Weakness)

○ 領域等による差が大きく、国語科においては、小・中ともに「話すこと・聞くこと」「書くこと」が全国平均を下回っており、算数・数学においては、特に「数量関係」が課題である。

(平成28年度全国学力・学習状況調査結果から作成)

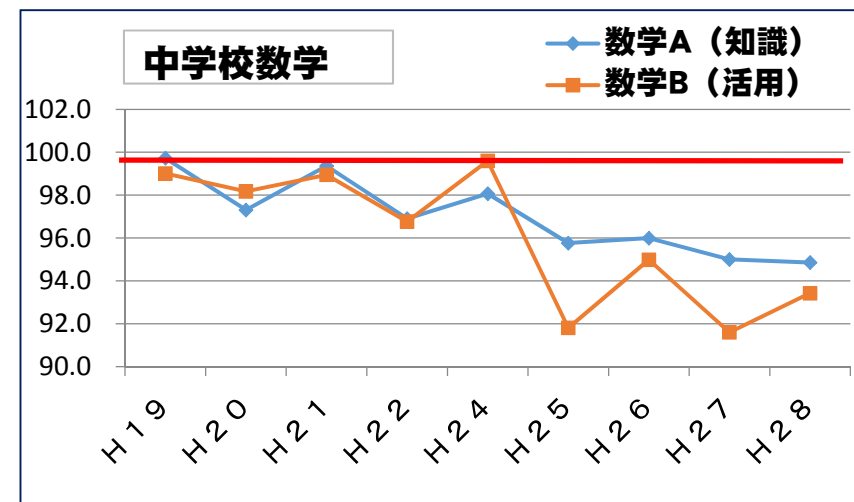
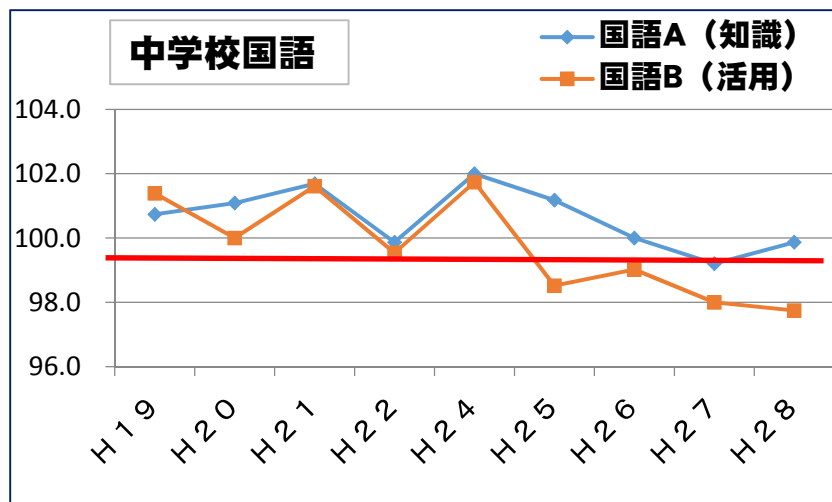
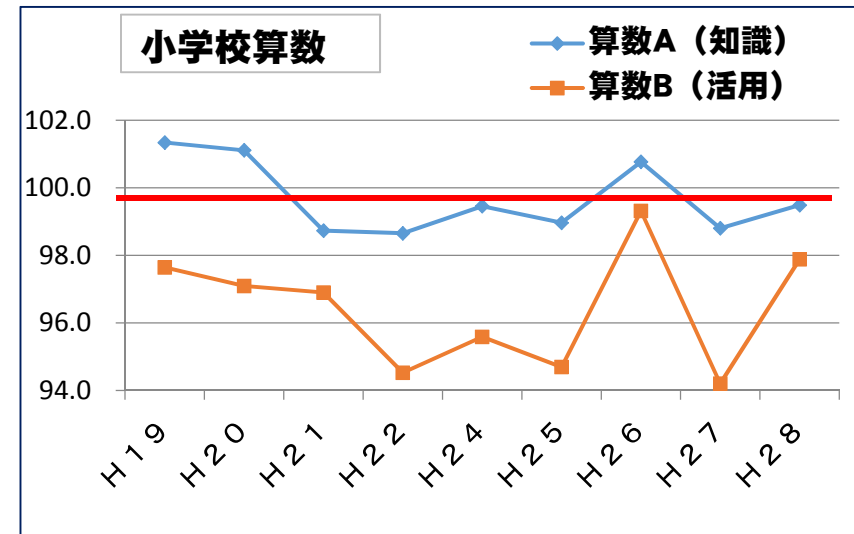
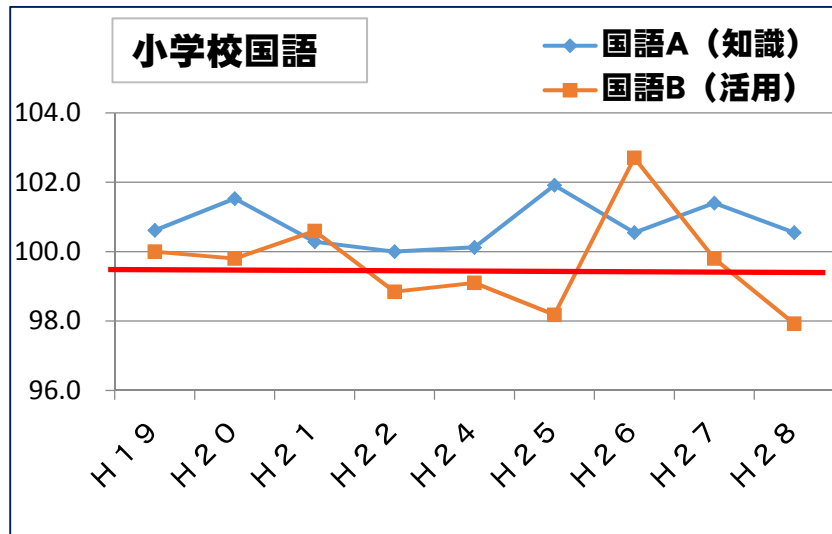


※小学校国語Bの「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、対象設問なし

標準化得点の推移

- 母数である児童生徒が毎年異なるため単純な経年比較はできないが、全国平均と比較すると総じて横ばいか下降傾向。
- 中学校数学は緩やかな下降傾向。

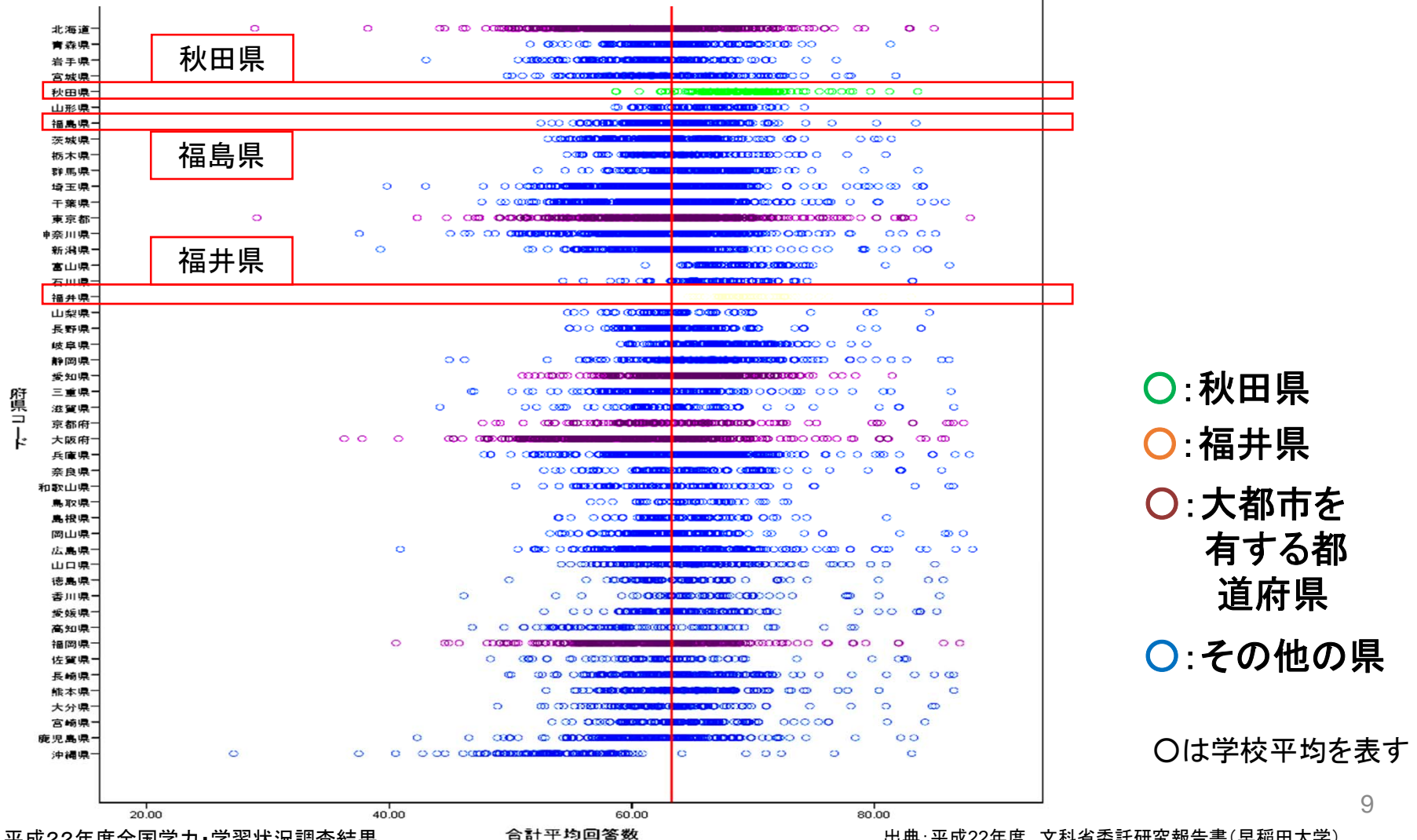
(平成28年度全国学力・学習状況調査結果)



学校ごとの平均得点の分散

○ 先進県(秋田県、福井県)と比較して、学校ごとの平均得点の分散が大きく、学力が平準化されていない。

都道府県別合計平均正答数の分布(中学校ごと)

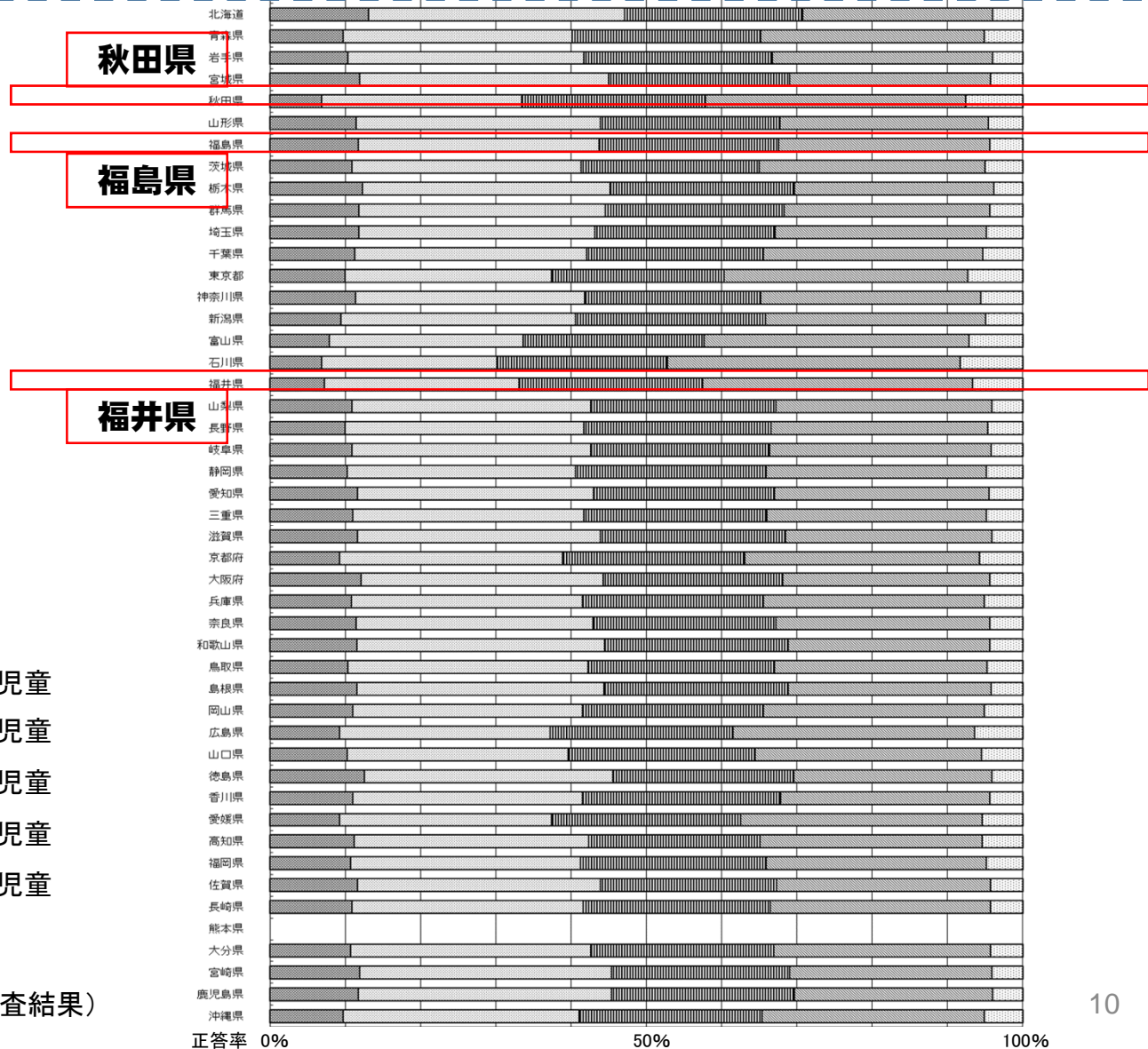


都道府県ごとの平均正答数の分散

○ 先進県(秋田県、福井県)と比較して、正答率が80%を超えた児童の割合が小さく、正答率が40%未満の児童の割合が大きい。

都道府県別合計平均正答数の分布(中学校数学B)

- 正答率20%未満の児童
- 正答率40%未満の児童
- 正答率60%未満の児童
- 正答率80%未満の児童
- 正答率80%以上の児童



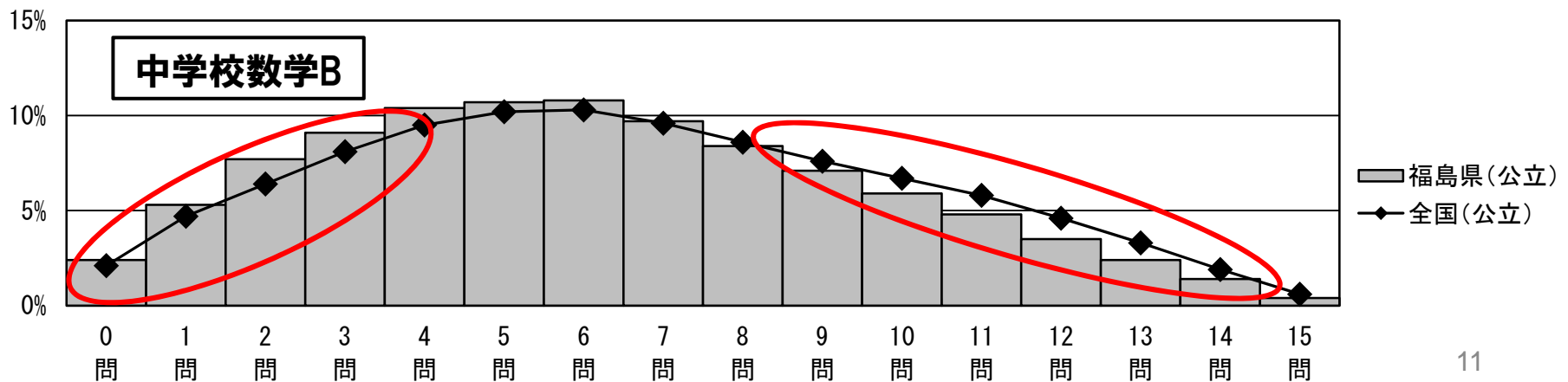
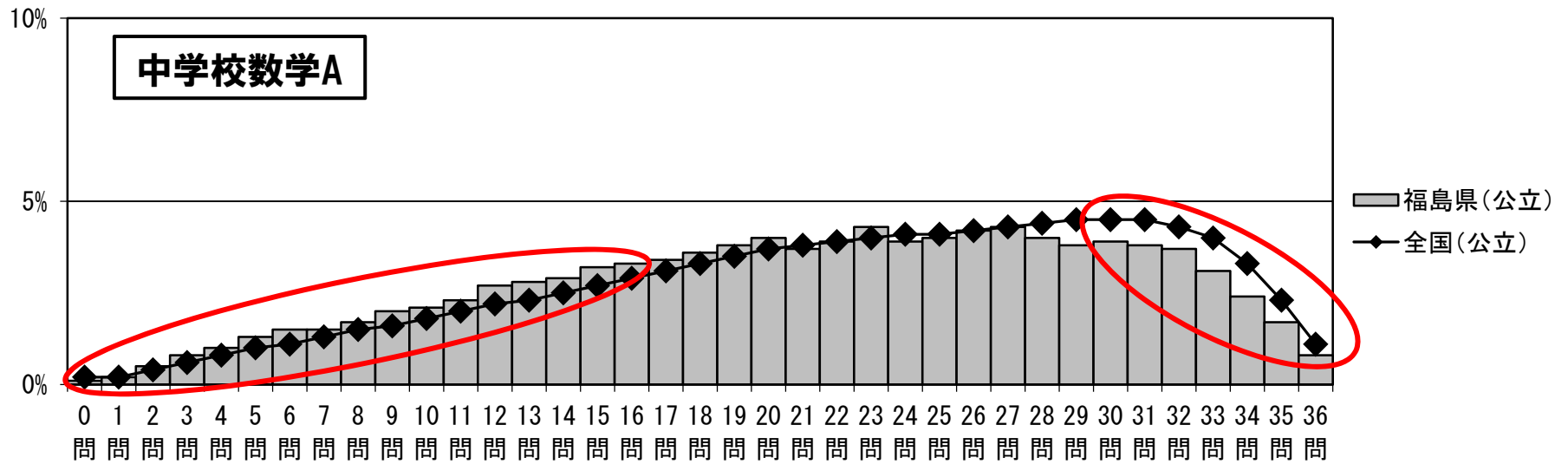
(平成28年度全国学力・学習状況調査結果)

得点分布からの分析(1)

- 全国平均と比較して、学力が低い層(下位25%)が多く、高い層(上位25%)が少ない。
- 学力の底上げとともに、トップ層を伸ばすことが大きな課題。

平成28年度全国学力・学習状況調査

正答数分布グラフ(横軸: 正答数, 縦軸: 割合)



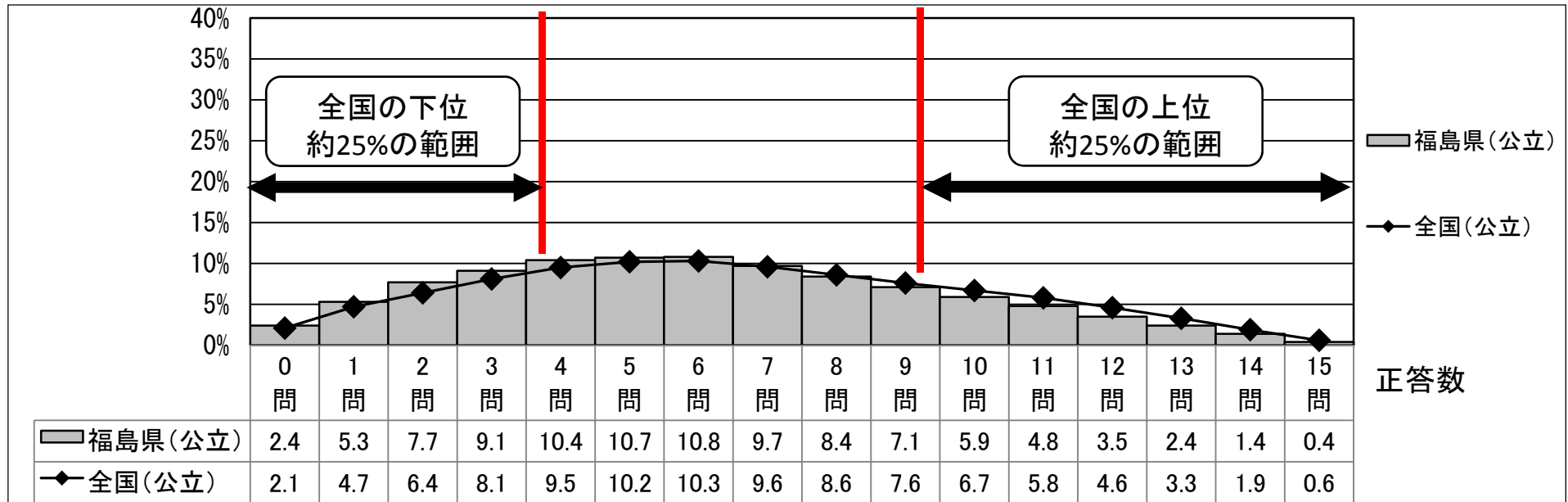
得点分布からの分析(2)

○全国平均と比較して、正答数が多い割合が小さく、正答数が少ない割合が大きい。

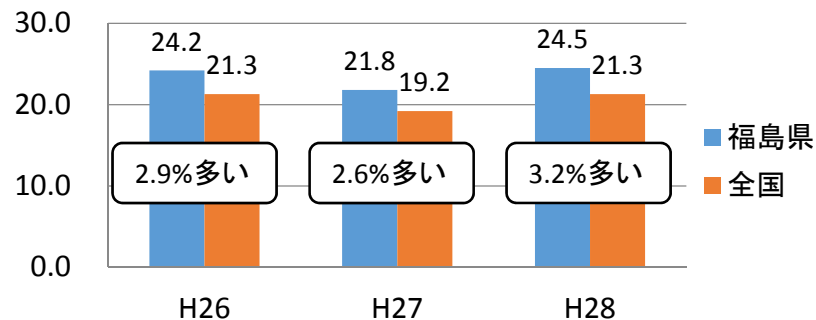
平成28年度全国学力・学習状況調査

調査結果概況 [数学B:主として活用]

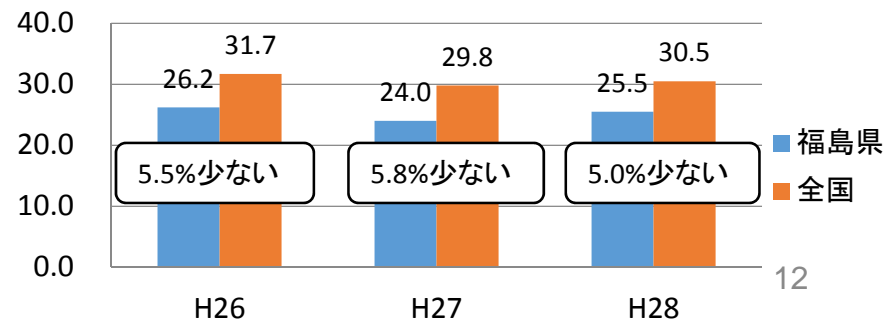
	生徒数	平均正答数	平均正答率 (%)	中央値	標準偏差
福島県(公立)	16,903	6.2 / 15	41.2	6.0	3.4
全国(公立)	996,578	6.6 / 15	44.1	6.0	3.5



数学B<下位層の割合>



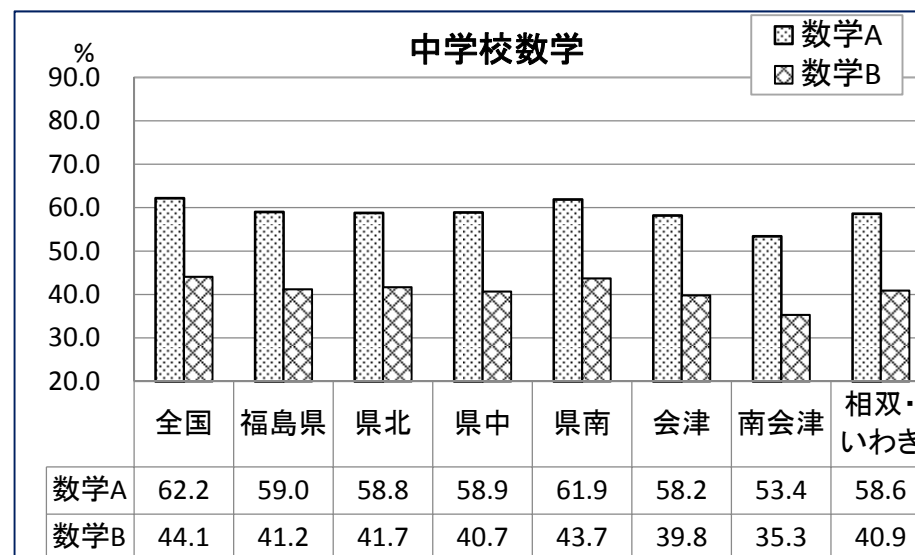
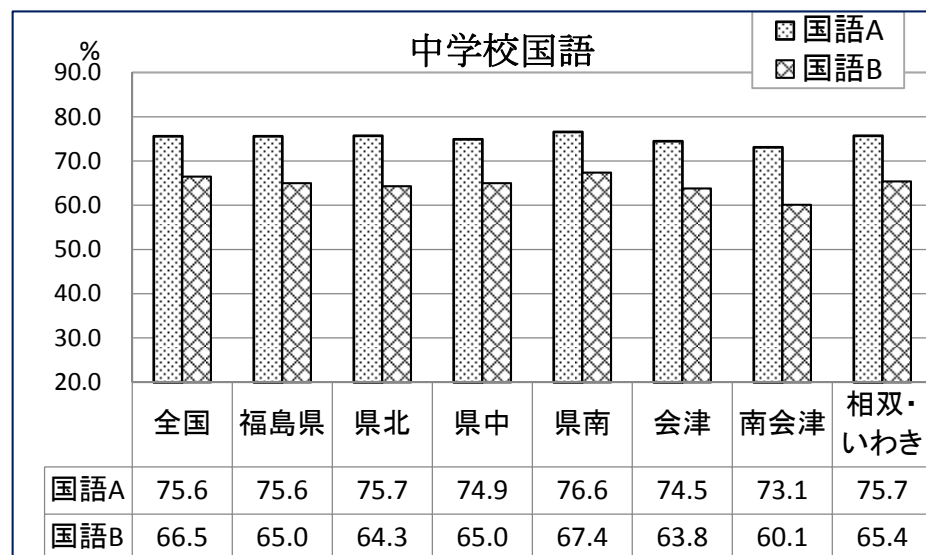
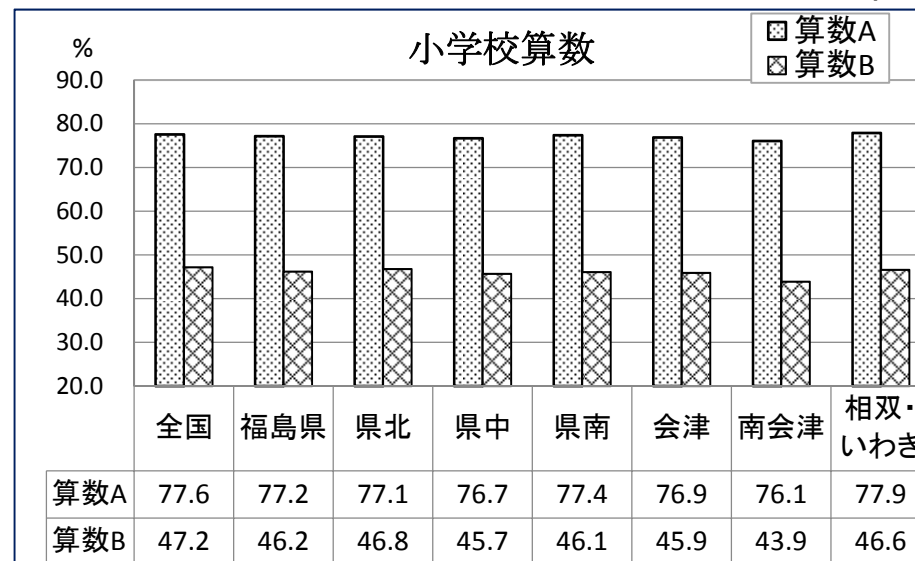
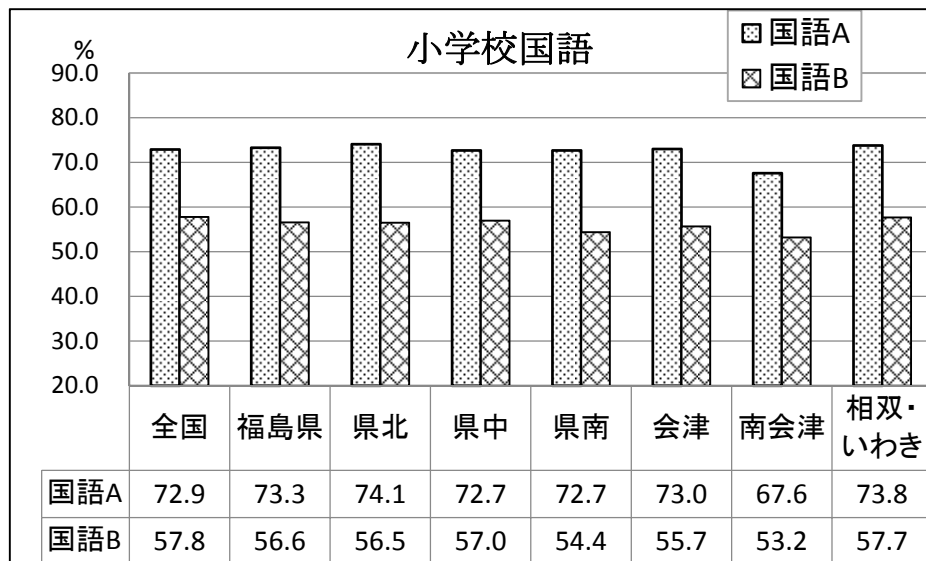
数学B<上位層の割合>



生活圏別平均正答率の状況

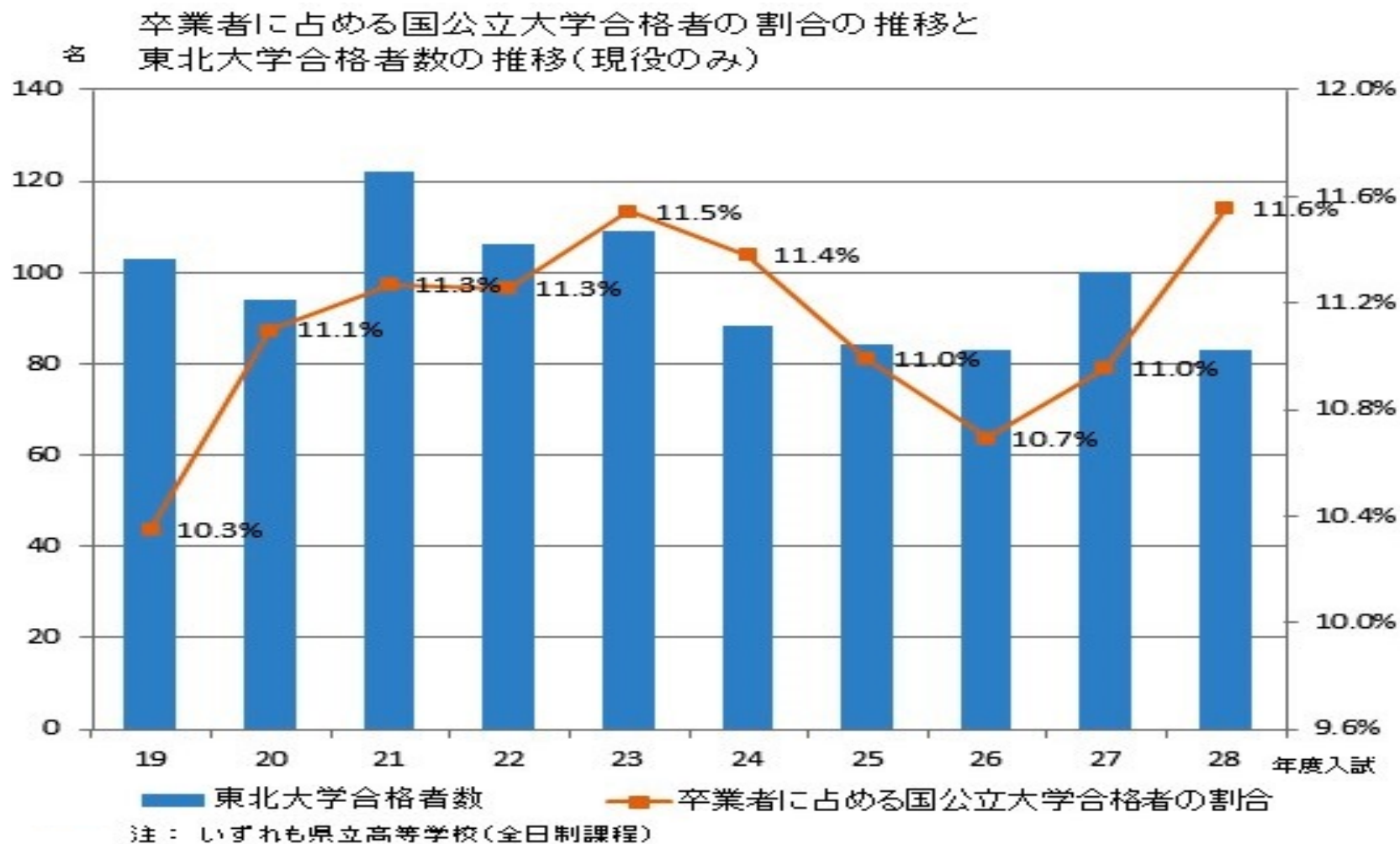
○ 生活圏ごとに学力の課題が異なる。地域の実態を踏まえた授業改善等の取組が必要。

(平成28年度全国学力・学習状況調査結果)



難関大学合格者の推移

○ 近年、国公立大学進学者数の割合は増加していることは評価できる一方で、東北大学への合格者数は微減傾向。

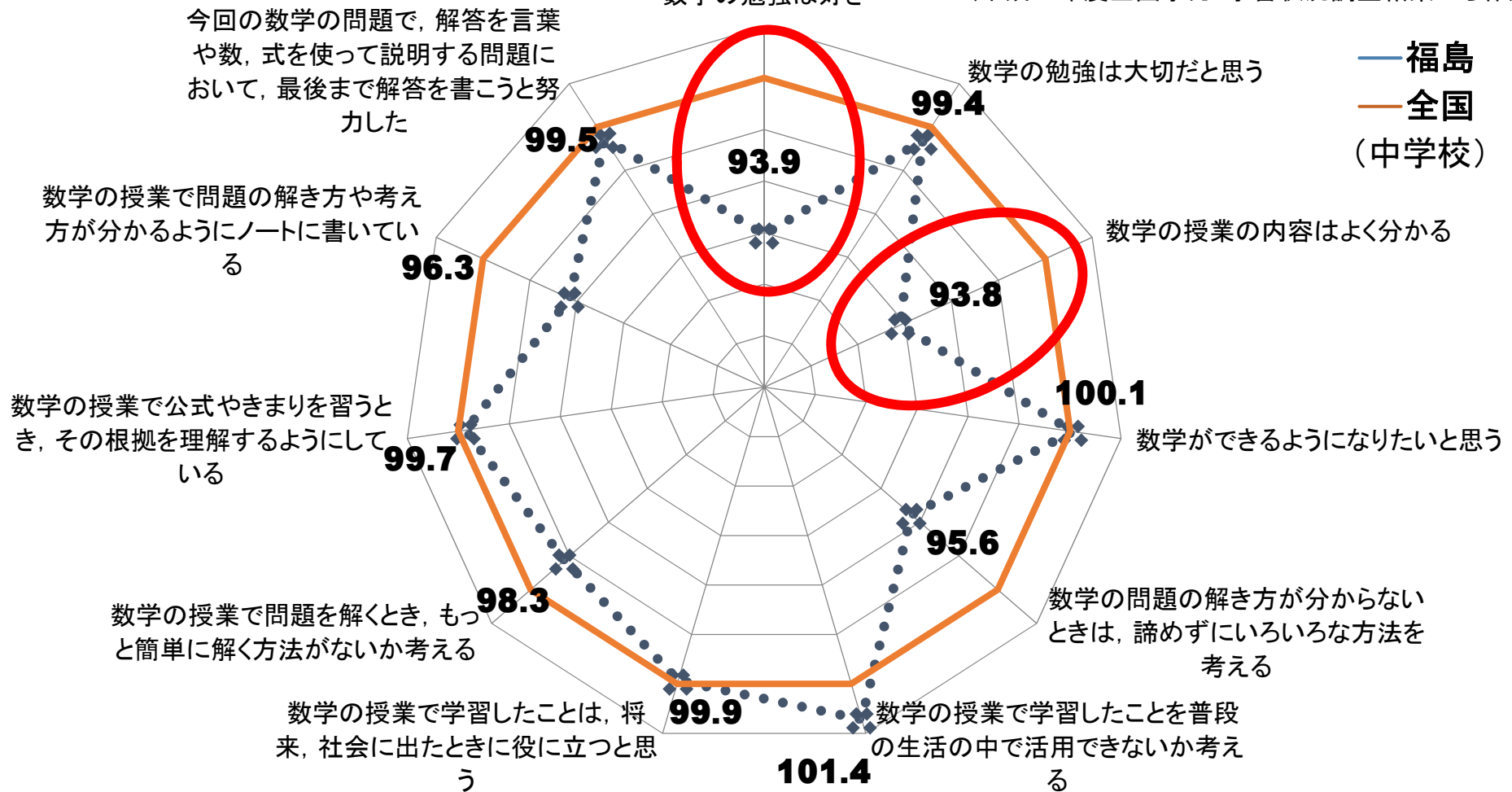


県教委調べ

勉強が「好き」と答える子ども

- 数学の勉強は好きと回答した子どもの割合が全国平均よりも少ない。また、数学の授業がよく分かると答えている子どもが少ない。
- 国語の勉強は好きと回答した子どもの割合は、全国平均よりも多い。(中学校全国比104)

数学の勉強は好き (平成28年度全国学力・学習状況調査結果から作成)



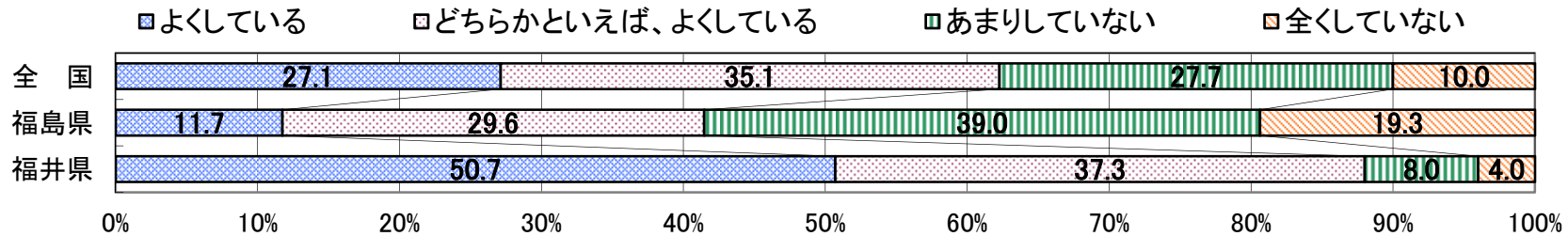
教員間の学び合いの状況(1)

- 校内外の研修の回数が他県に劣るわけではないため、研修の質を高め、学び合う研修へと実質化していく必要性あり。
- 指導主事や専門家によるアドバイスを得る機会が必ずしも多くない。

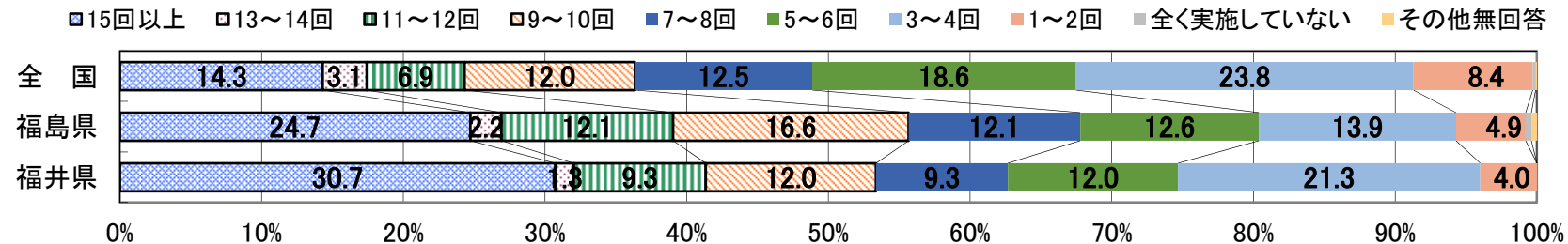
【中学校】

(平成28年度全国学力・学習状況調査 学校質問紙)

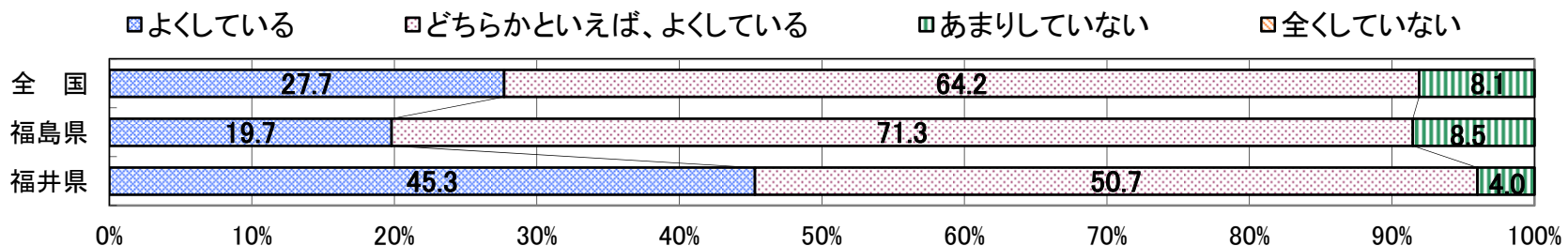
都道府県や市町村の指導主事や大学教員等の専門家が、校内研修の指導のために定期的に来校していますか。



授業研究を伴う校内研修を前年度に何回実施しましたか。



教職員は、校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させていますか。



教員間の学び合いの状況(2)

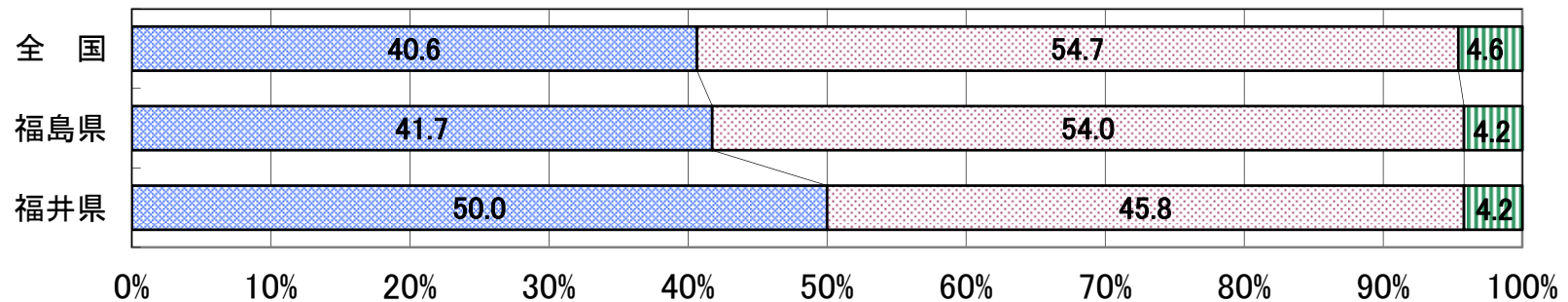
○ 学習指導と学習評価の計画の作成を教職員同士が協力して行っている学校の割合は、小学校は全国に比べて大きい、中学校は全国に比べて小さい状況にある。

(平成28年度全国学力・学習状況調査 学校質問紙)

学習指導と学習評価の計画の作成に当たっては、教職員同士が協力している

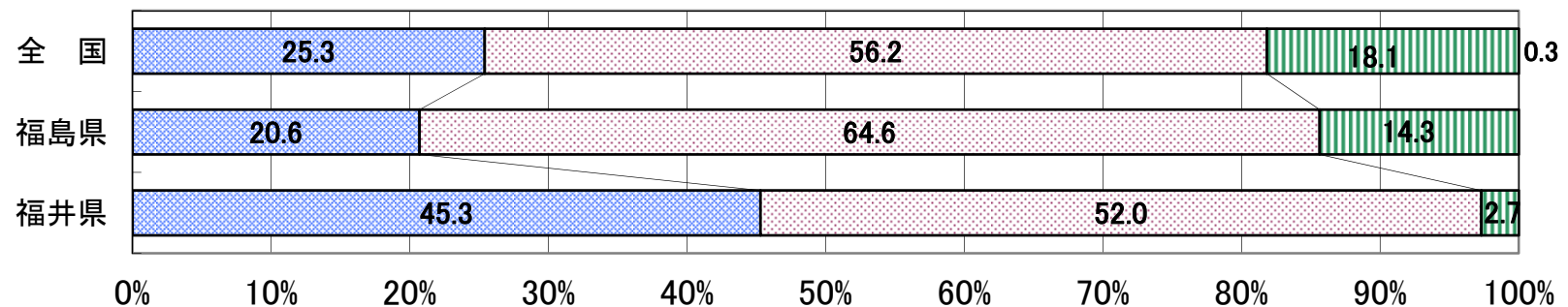
【小学校】

■よくしている □どちらかといえば、よくしている ■あまりしていない ■全くしていない



【中学校】

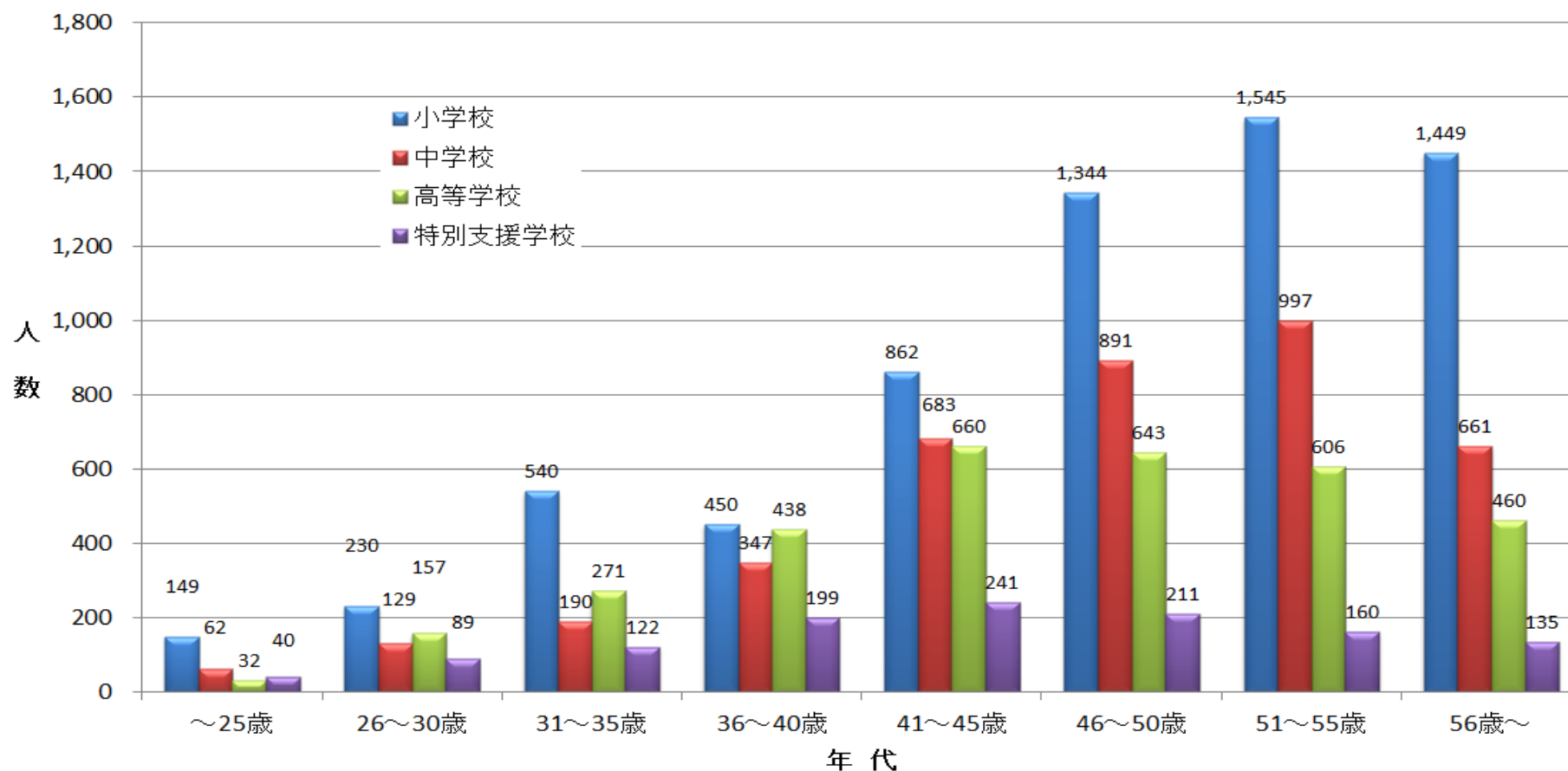
■よくしている □どちらかといえば、よくしている ■あまりしていない ■全くしていない



教員間の年齢構成

- 教員の平均年齢は40代後半であり、若手教員を指導する中堅教員が今後より不足していくことが予測される。
- 学校のミドルリーダーを意識的に育成していく必要あり。

本県教員年齢別構成比(平成27年度)



学校管理職のマネジメントと学力の関係(1)

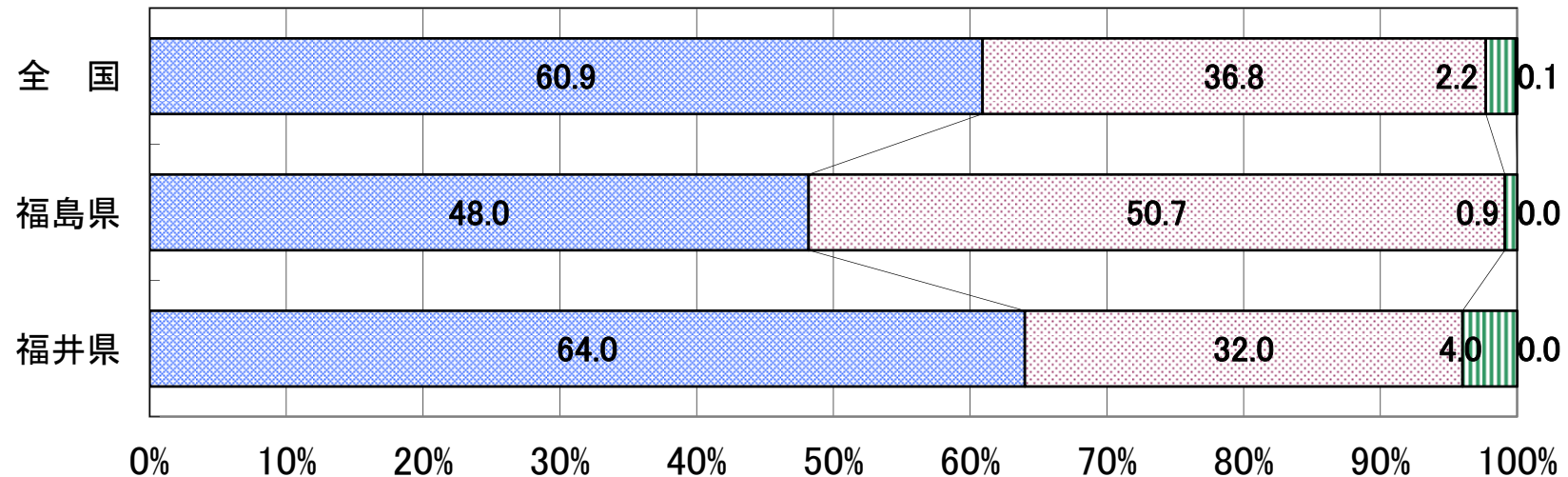
○ 校長のリーダーシップのもと組織的、継続的な研修を行っている学校の割合が全国、福井県に比べ低い状況にある。

校長のリーダーシップのもと、研修リーダー等を校内に設け、校内研修の実施計画を整備するなど、組織的、継続的な研修を行っていますか。

【中学校】

(平成28年度全国学力・学習状況調査 学校質問紙)

■よくしている □どちらかといえば、よくしている □あまりしていない □全くしていない



学校管理職のマネジメントと学力の関係(2)

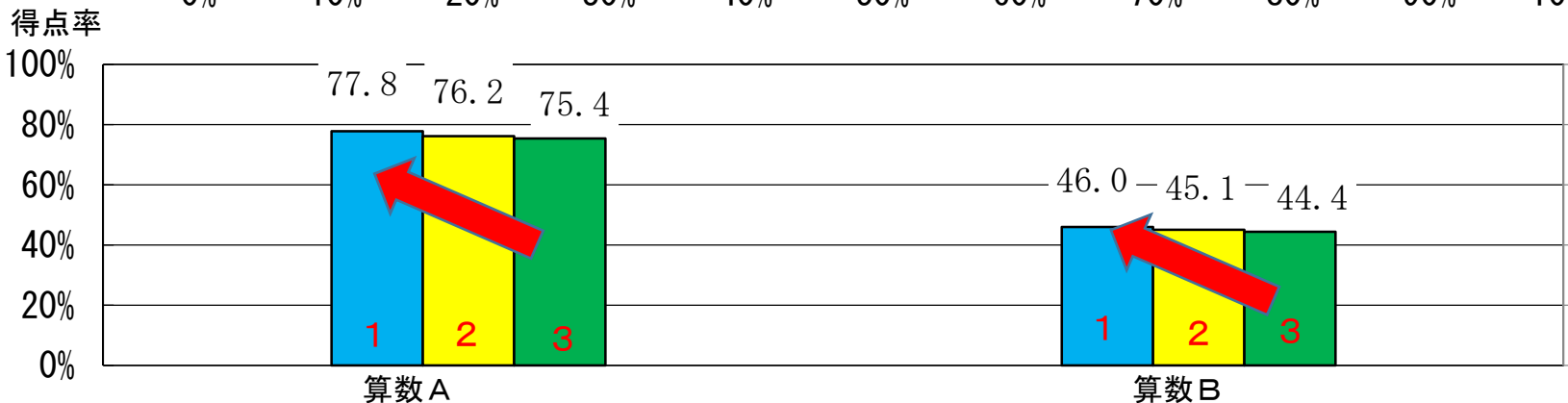
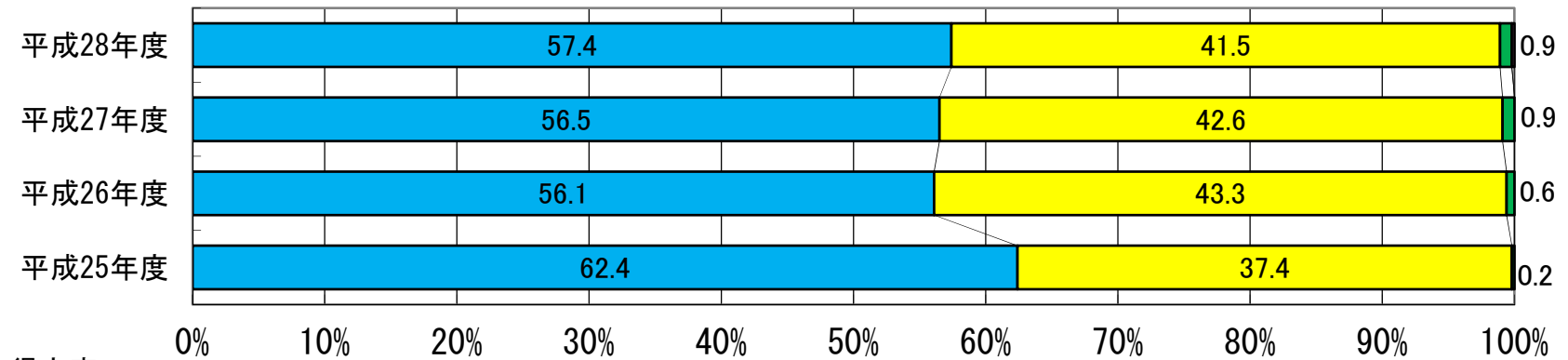
- 学力調査の課題等について全教職員の間で共有をよくしている学校の割合は、小学校で約6割、中学校では約5割である。
- クロス集計※に現れているように、学力調査の課題等について全教職員の間で共有している学校の方が学力が高い傾向にある。 ※クロス集計…質問項目を2つ以上かけ合わせて集計する手法

学校全体の学力傾向や課題について、全教職員の間で共有していますか

【小学校(福島県)】

(平成28年度全国学力・学習状況調査 学校質問紙)

■1. よくしている ■2. どちらかといえば、している ■3. あまりしていない ■4. 全くしていない □その他、無回答



校内研修の効用

○ 実践的な研修を行っている学校ほど、学力が高い傾向にある。

模擬授業や事例研究など、実践的な研修を行っていますか

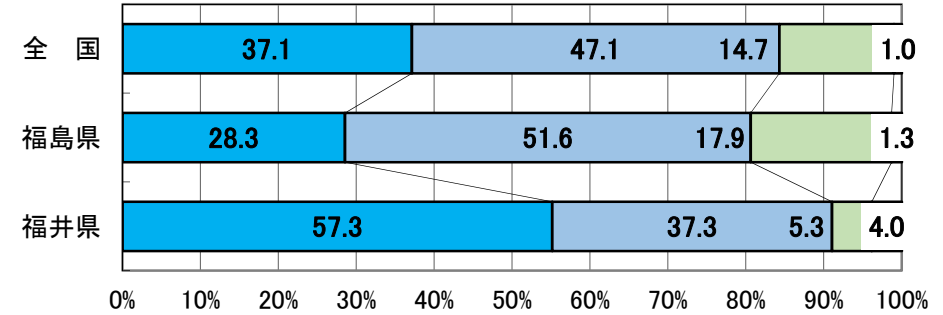
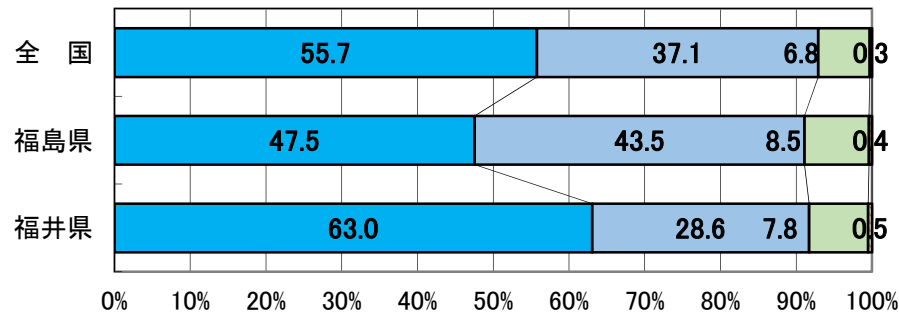
(平成28年度全国学力・
学習状況調査 学校質問紙)

【小学校】

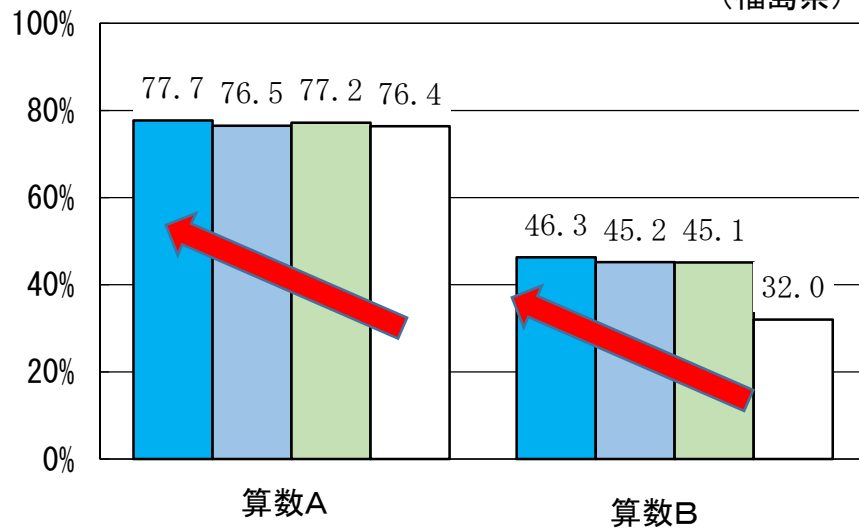
【中学校】

■よくしている
□どちらかといえば、よくしている
□あまりしていない
□全くしていない

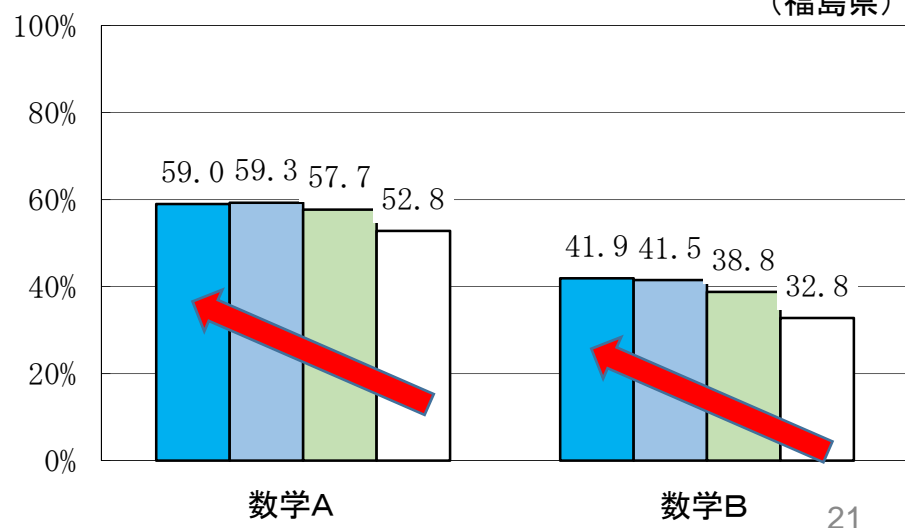
■よくしている
□どちらかといえば、よくしている
□あまりしていない
□全くしていない



得点率 (福島県)



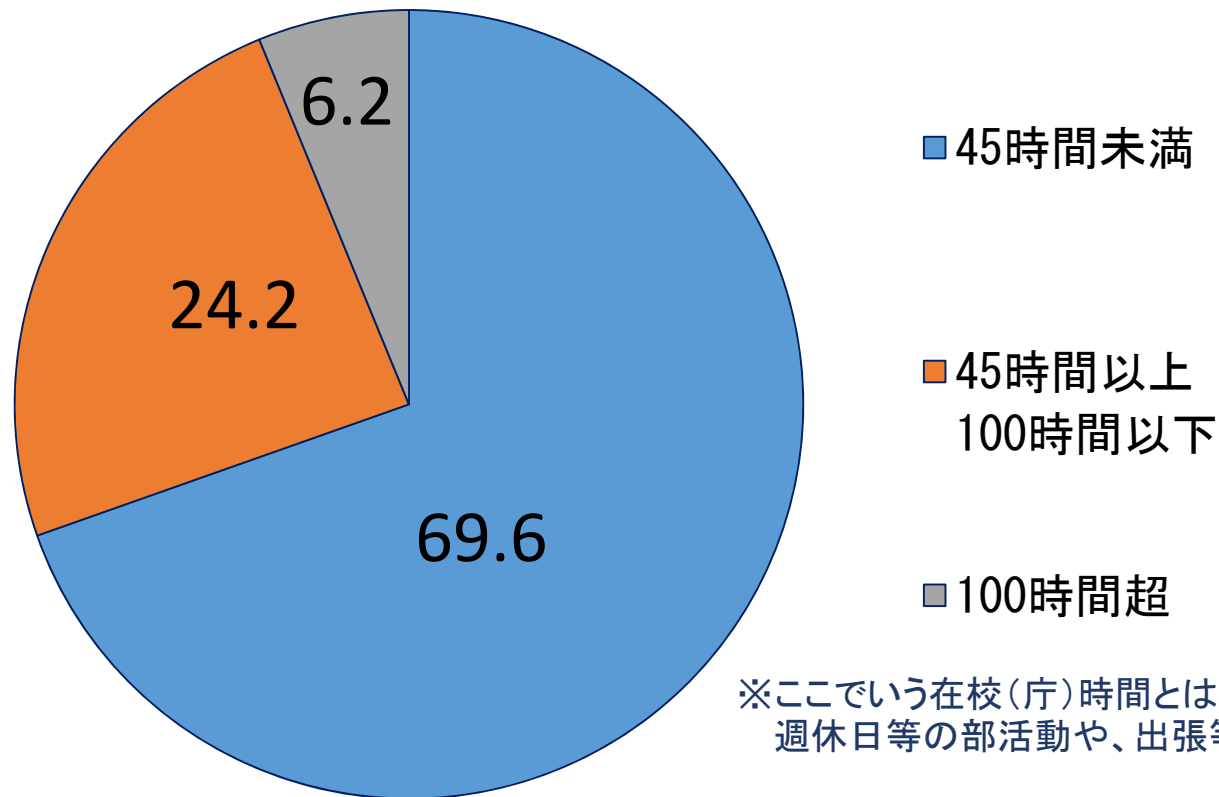
得点率 (福島県)



教職員の多忙化の状況(1)

○正規の勤務時間外の在校(庁)時間数が月に100時間を超える職員が1年間の平均で6%程度存在している。

【正規の勤務時間外の在校(庁)時間数別の県立学校等の教職員の割合】



※ここでいう在校(庁)時間とは、校内外で行われる
週休日等の部活動や、出張等も含まれている。

平成27年7月～平成28年6月の1年間の平均

県教委調べ

教職員の多忙化の状況(2)

○ 限られた教職員数で、期待される学校教育の役割を果たすことに限界が生じている。

● 昭和41年度調査(全国)



● 平成18年度調査(全国)



- 児童・生徒の指導に直接的にかかわる業務
- 児童・生徒の指導に間接的にかわる業務
- 学校の運営にかかわる業務及びその他の校務
- 外部対応

教員が多忙に感じていることや負担に感じている業務(赤枠)

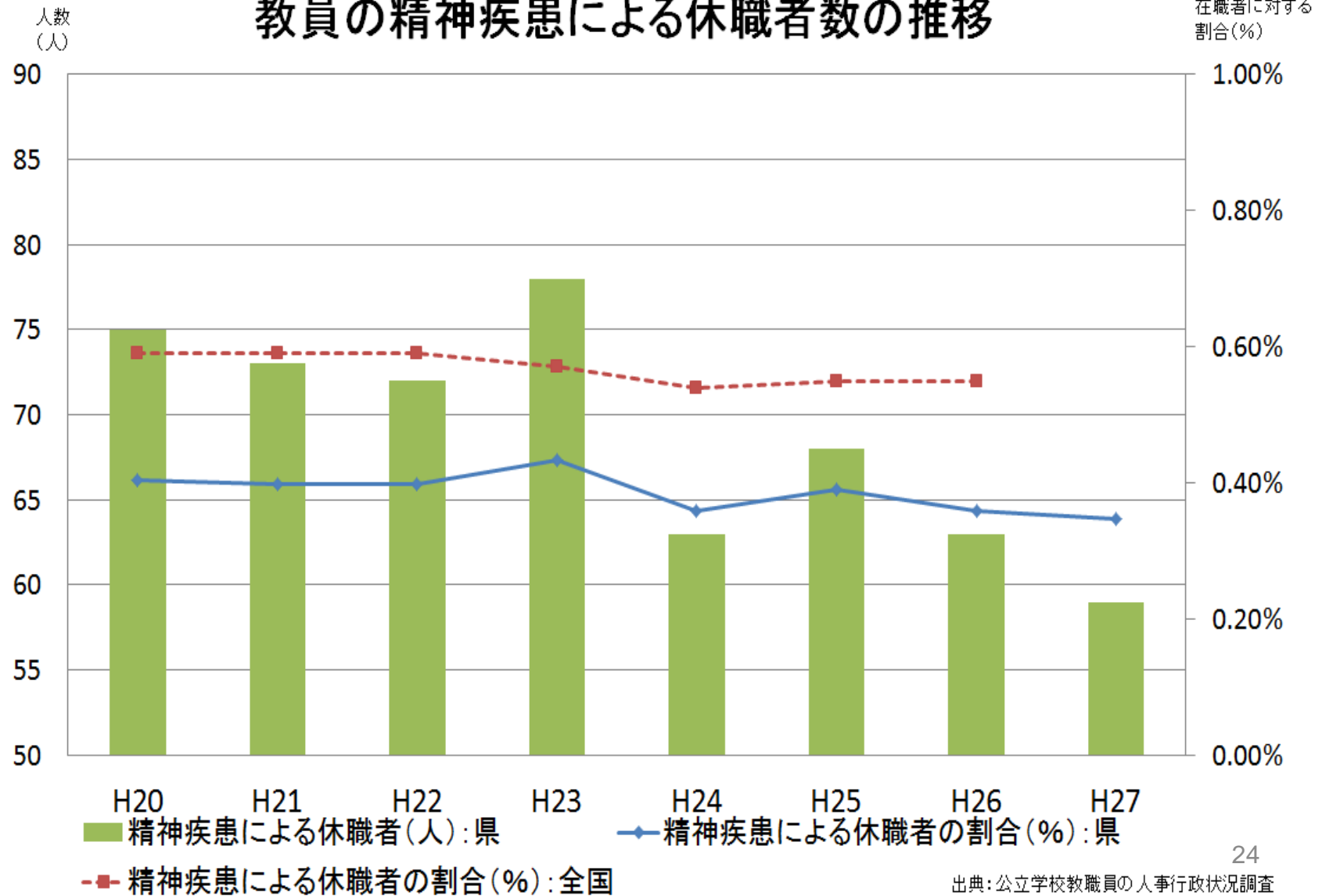
アンケート調査結果の上位の業務(平成18年度教員意識調査)

教員のメンタルヘルス

課題(Weakness)

○ 教員の精神疾患による休職者数は、減少傾向にはあるが依然として多い。

教員の精神疾患による休職者数の推移

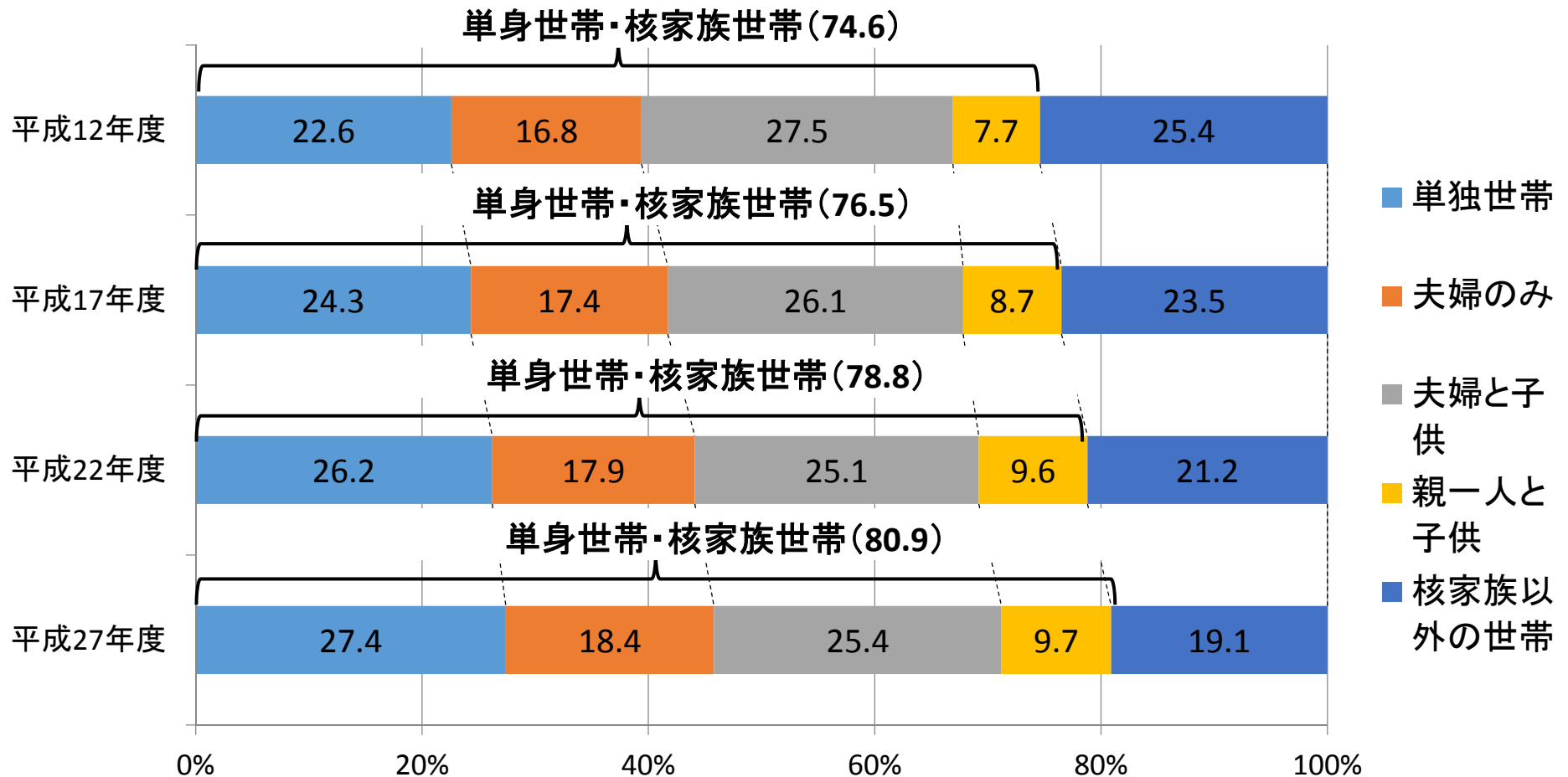


家族形態の変容

課題(Weakness)

- 単独世帯と核家族世帯が増加。1世帯あたりの人数が減少。
- 子どもにとって祖父母などからの学びの機会が減少。

本県一般世帯の家族累計割合

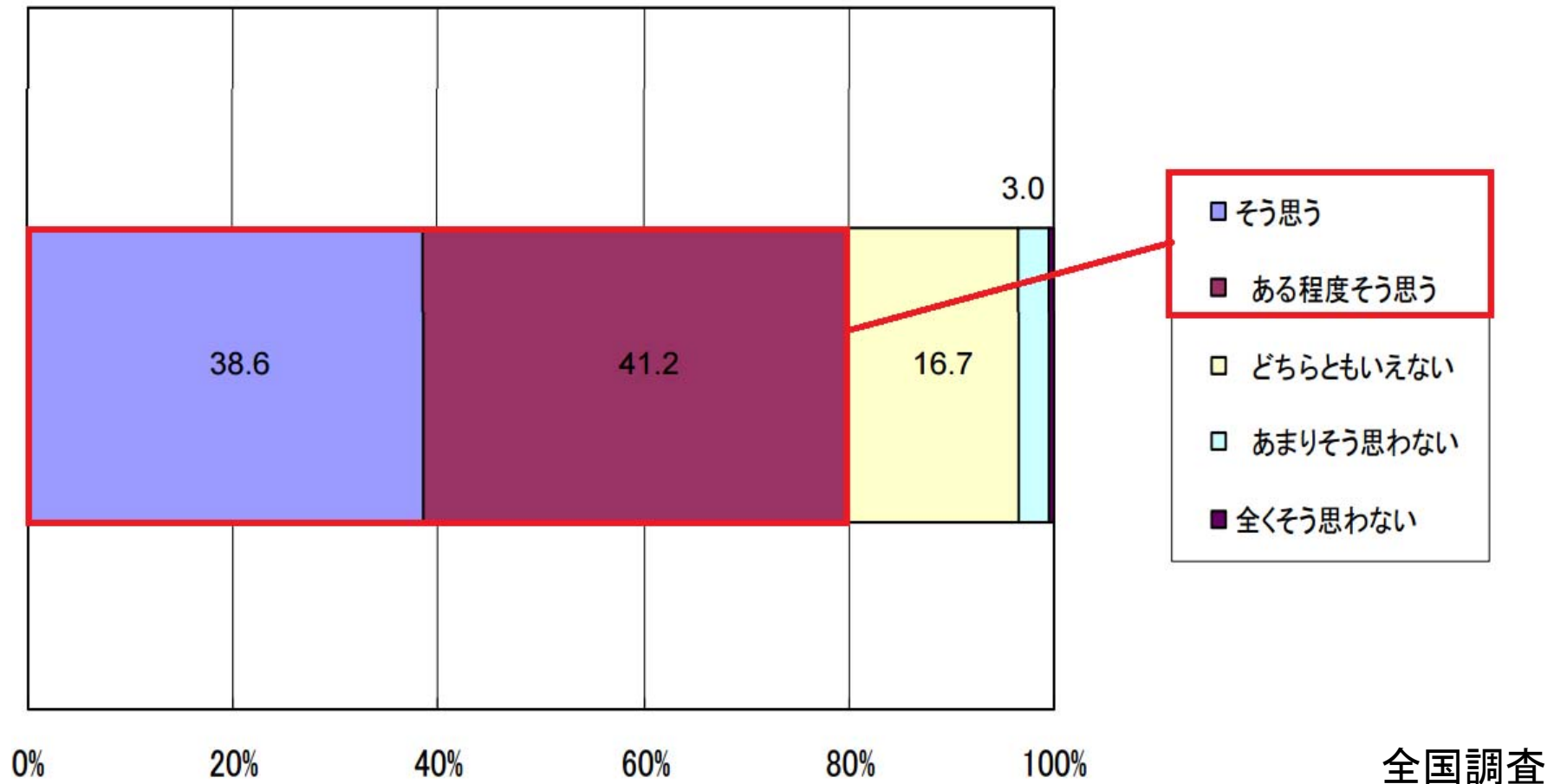


出典:福島県勢要覧、国勢調査(平成27年度)

家庭の教育力

○ 約8割の親が家庭の教育力が低下していると実感

問 あなたは、世の中全般に家庭の教育力が低下していると思いますか。



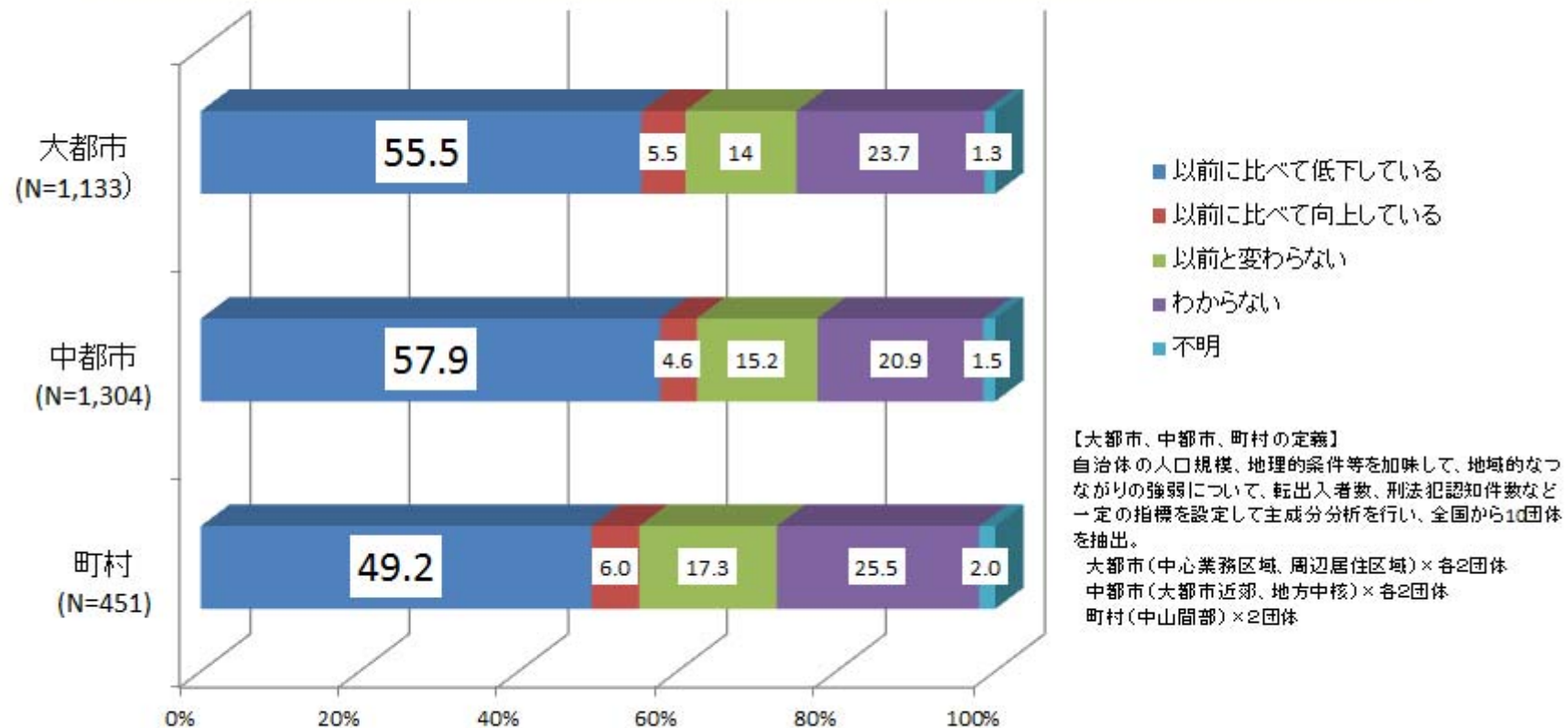
出典 文部科学省委託調査「家庭教育の活性化支援等に関する特別調査研究」(平成20年度)
調査対象:0歳~18歳の子どもを持つ20歳~54歳の父母3,000人

地域の教育力の課題(1)

課題(Weakness)

○ 5割の人が地域の教育力低下を指摘

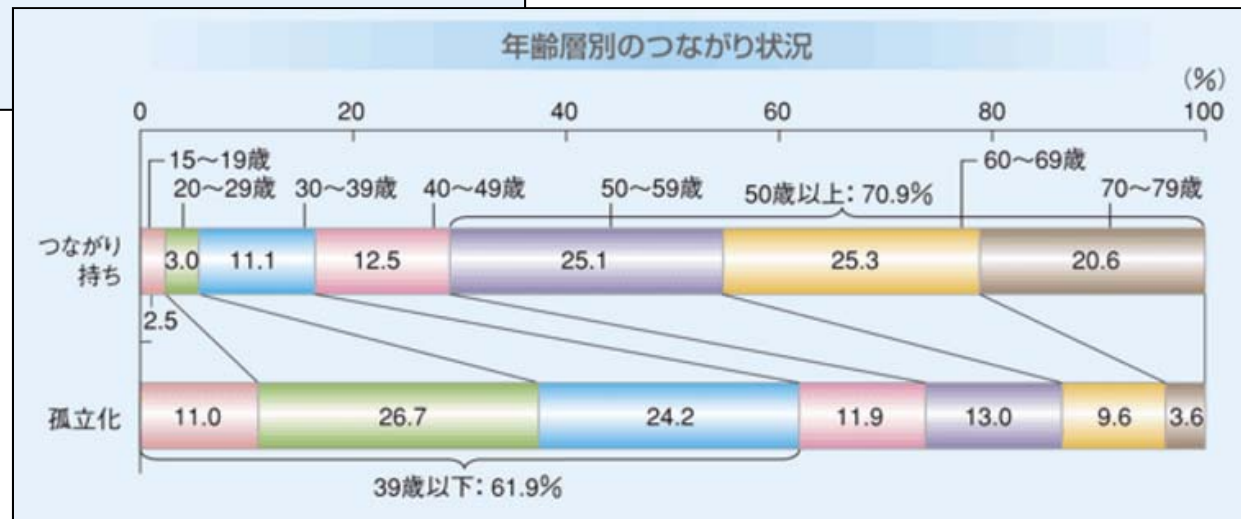
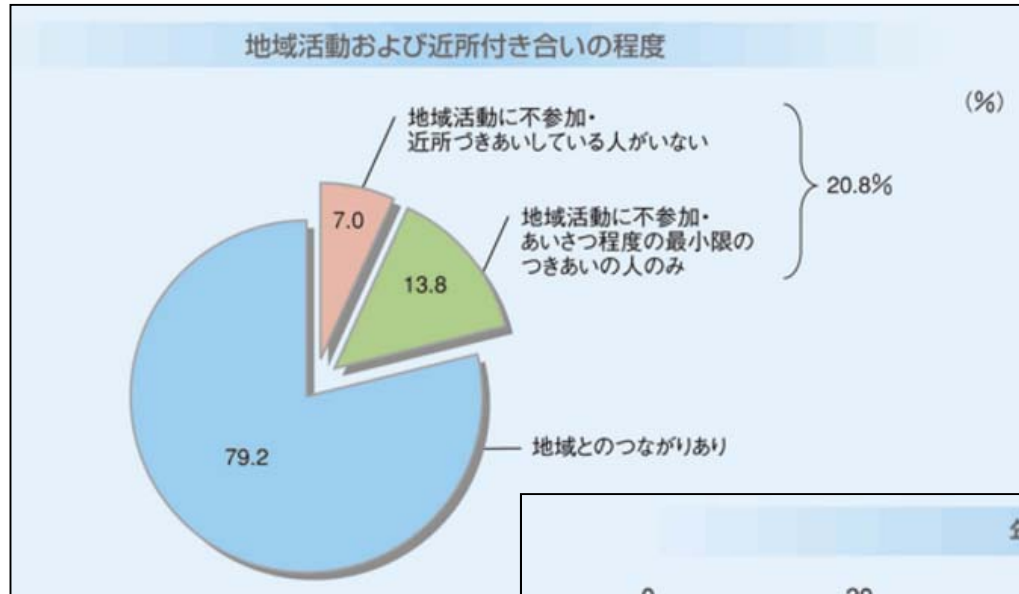
自身の子ども時代と比較した「地域の教育力」



出典:「地域の教育力に関する実態調査」 文部科学省(平成18年3月)

地域の教育力の課題(2)

- 地域社会から孤立している人は全体の2割。
- つながりは高齢者に偏在し、若年者は孤立傾向。

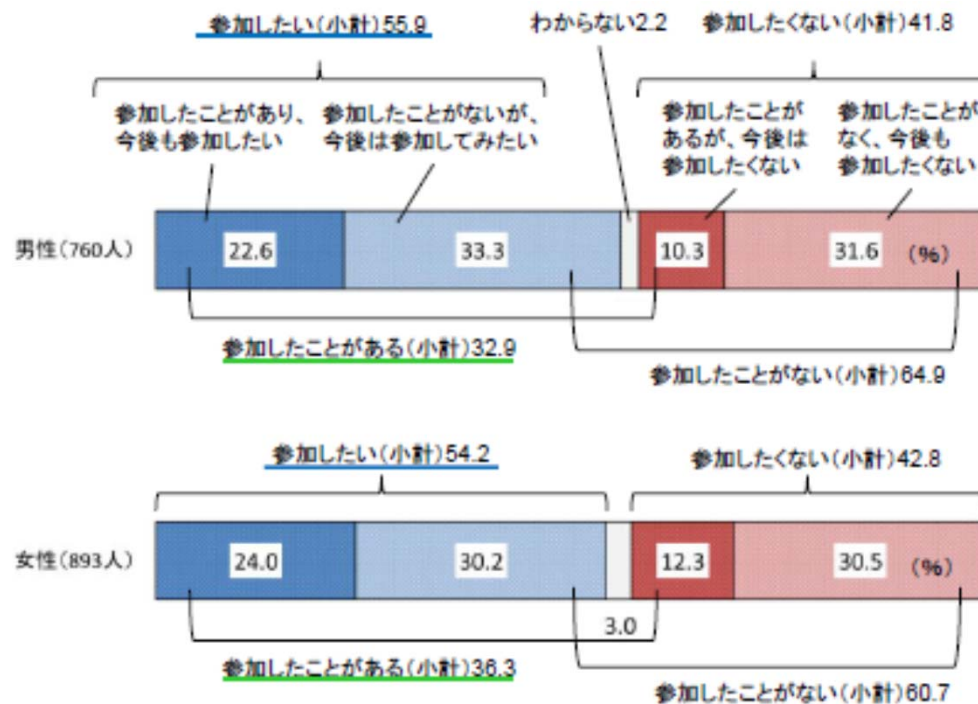


出典：平成19年版国民生活白書 つながりが築く豊かな国民生活

地域の教育力の課題 (3)

- 地域にある学校を支援する活動に参加したことがある人の割合は女性の方が高いが今後参加したいと考える割合は男性の方が若干高い。
- 学校を支援する活動に参加しやすくするための環境整備について、参加経験のある人は「積極的な広報や勧誘を行うこと」「経費の支援を行うこと」を挙げる割合が高く、参加した経験のない人は、「土日祝日にも参加できる活動を行うこと」を挙げる割合が高い。

■ 学校を支援する活動への参加の意向



■ 学校を支援する活動に参加しやすくするための環境整備

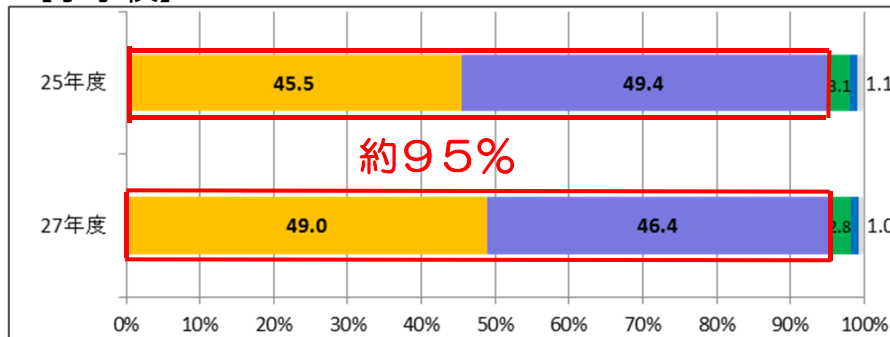
	地域住民等と協力した積極的な広報や勧誘	土日祝日にも参加できる活動	事前説明会や研修会などの定期的な開催	活動の参加に要した経費への支援	参加したことに対しての何らかの公的な評価
参加したことがある、今後も参加したい	58.5	42.5	35.8	33.2	17.9
参加したことがない、今後は参加してみたい	49.9	44.2	35.2	25.0	14.9
参加したことがあるが、今後は参加したくない	35.6	26.1	19.7	23.4	20.2
参加したことがなく、今後も参加したくない	24.6	26.6	16.8	13.9	10.5

学校支援等の地域と学校が連携・協働した取組の効果

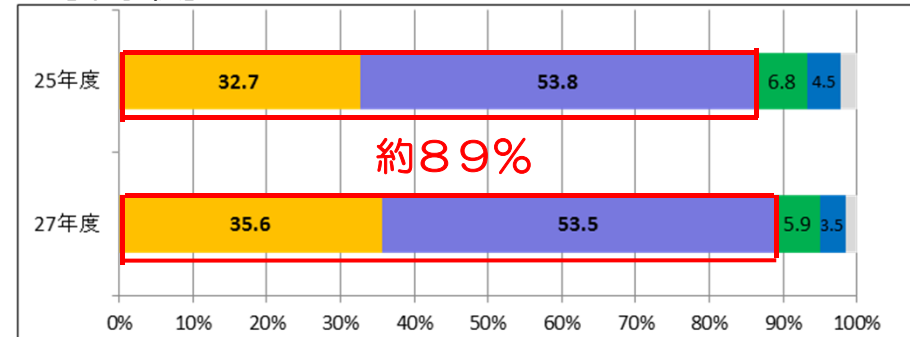
◆ 保護者や地域住民の学校支援ボランティア活動は、学校の教育水準の向上に効果があると思う学校は約9割にのぼる。

■ そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思わない
 ■ そう思わない
 ■ その他、無回答

【小学校】



【中学校】



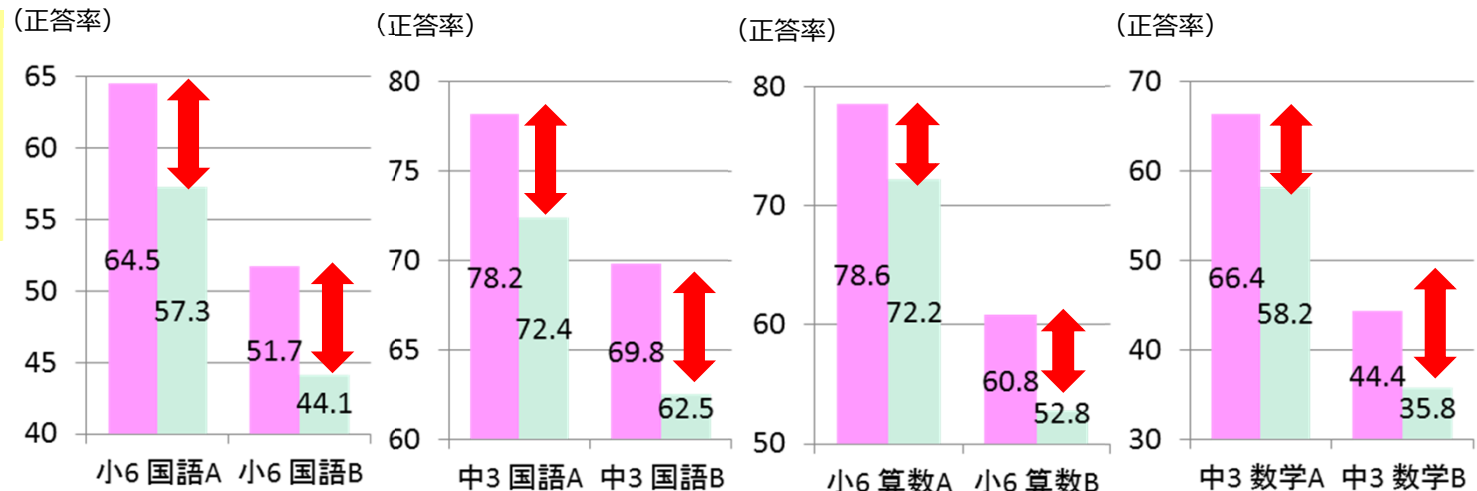
(平成27年度全国学力・学習状況調査 学校質問紙調査)

◆ 保護者や地域住民の学校支援ボランティア活動が進んでいる学校ほど学力が高い。

「地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子供たちの教育に関わってくれる人が多いと思うか」への回答と学力テストの正答率

■ そう思う
 ■ そう思わない

(平成27年度全国学力・学習状況調査(きめ細かい調査)の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究 国立大学お茶の水女子大学 平成26年3月)



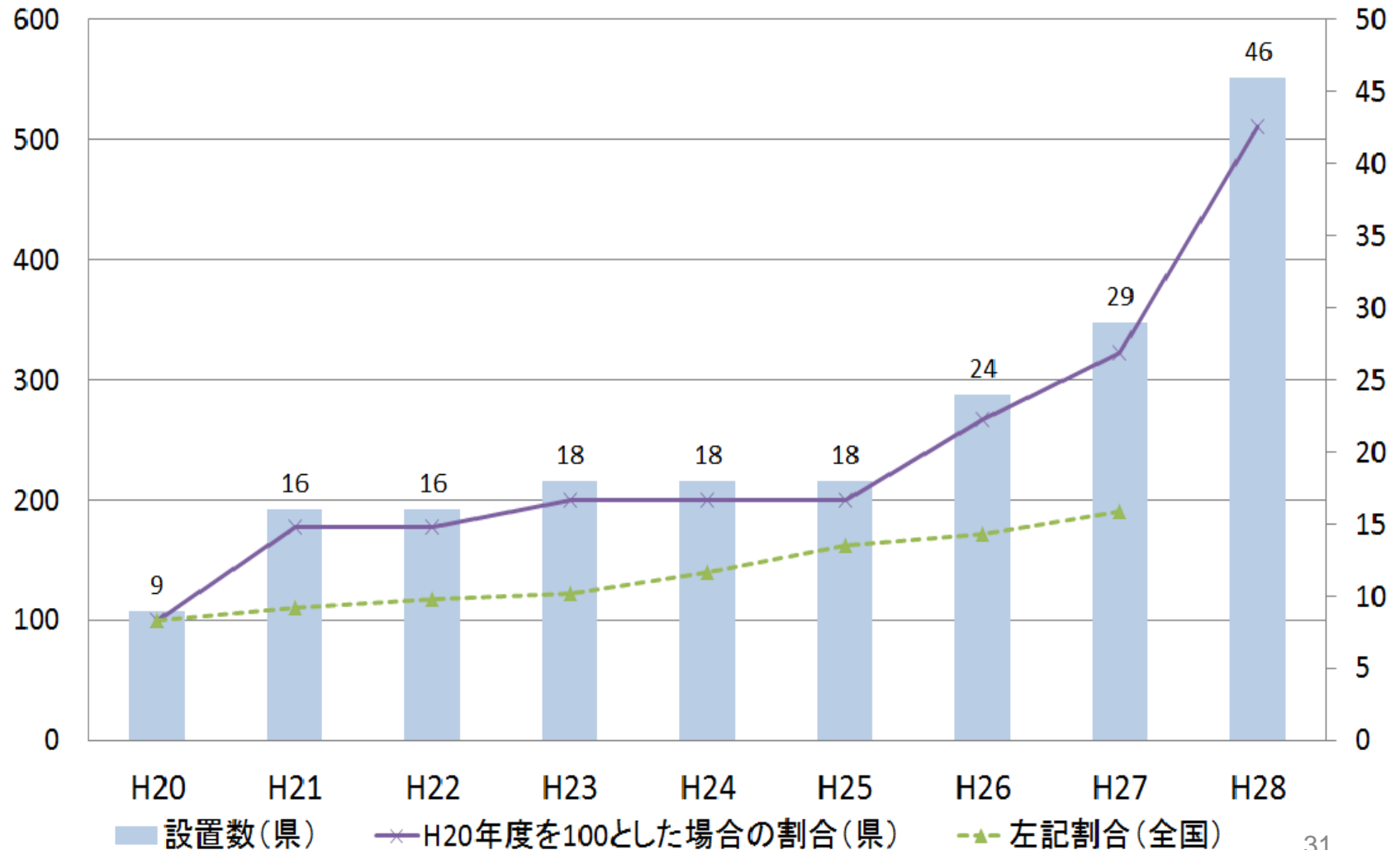
学校支援地域本部の設置状況

○ 学校支援地域本部は増加傾向。

H20を100とした
場合の割合

学校支援地域本部の設置状況の推移

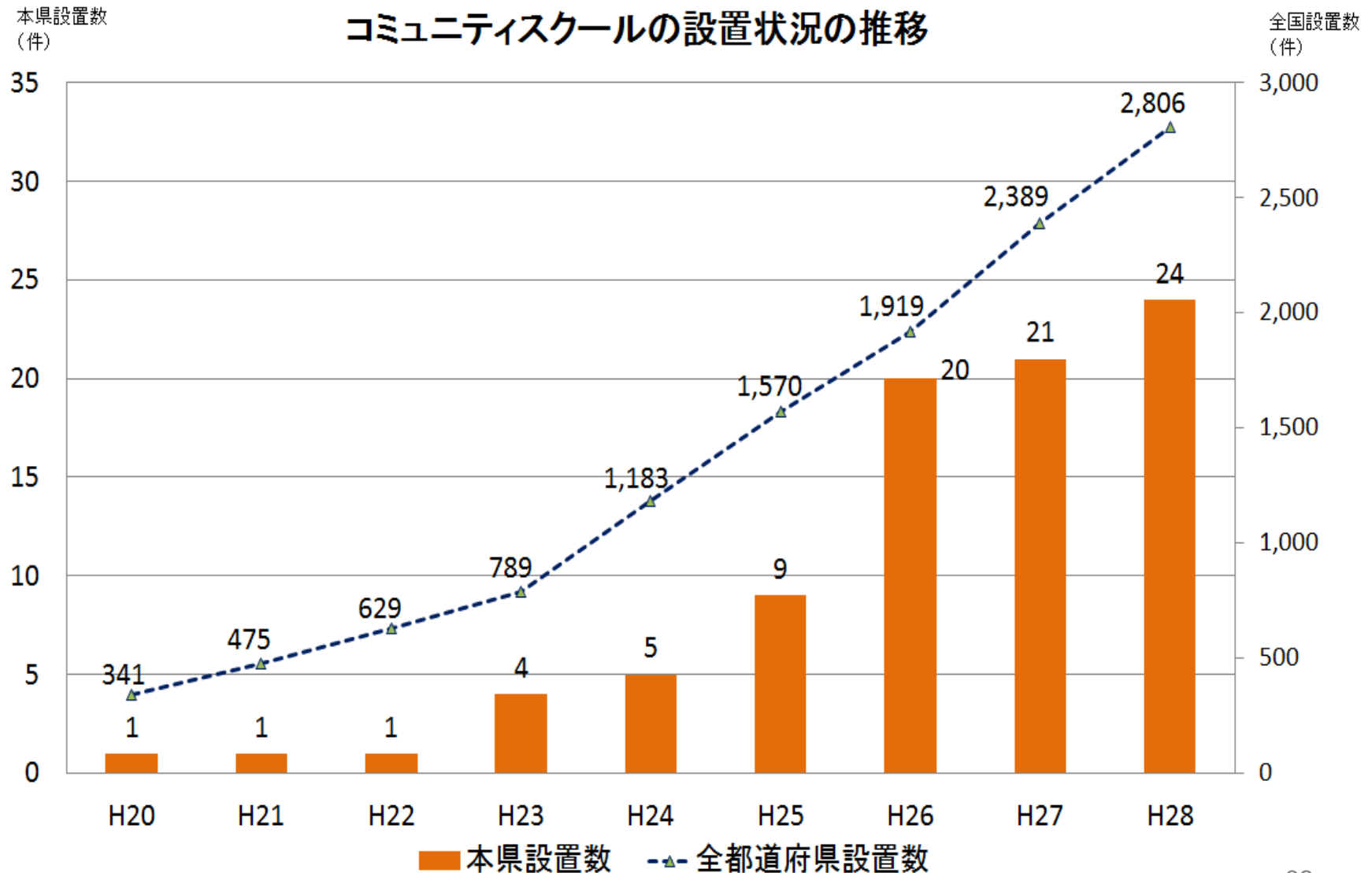
設置数
(箇所)



コミュニティスクールの設置状況

課題(Weakness)

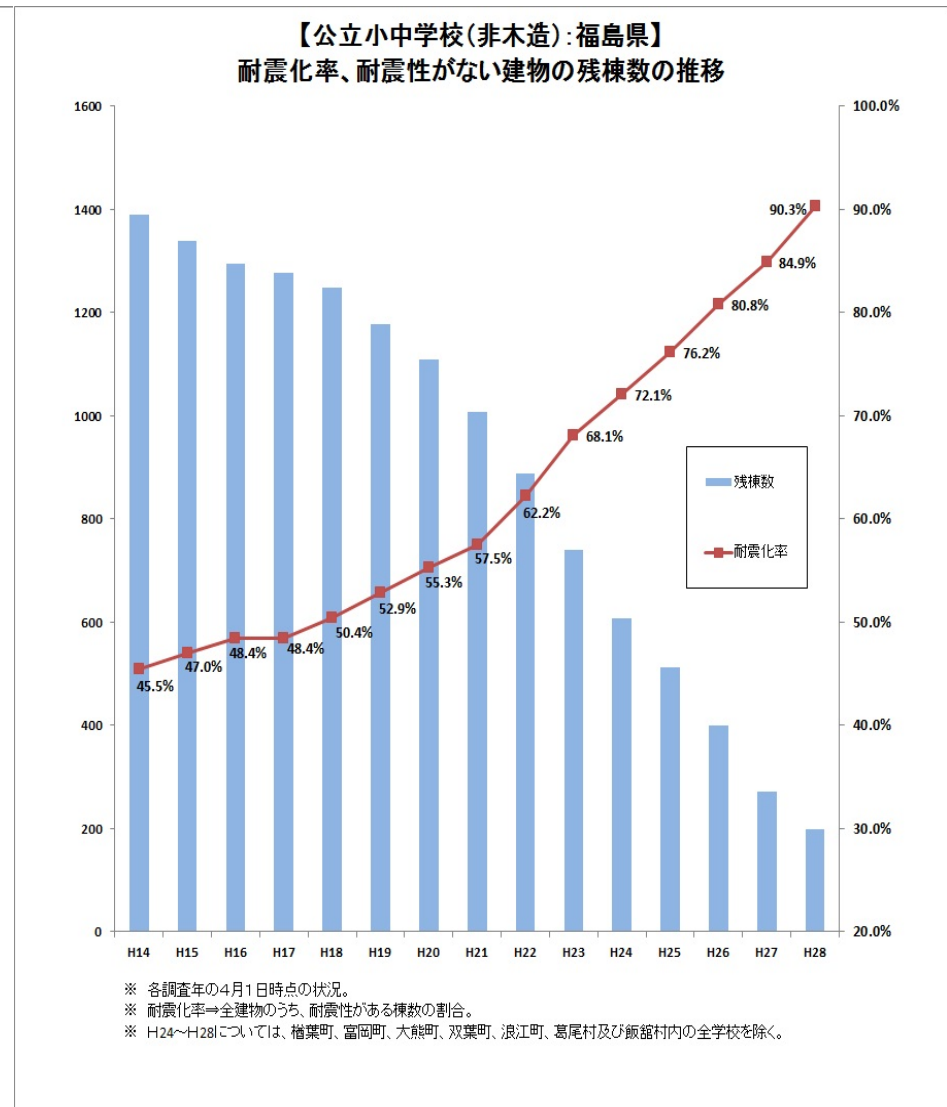
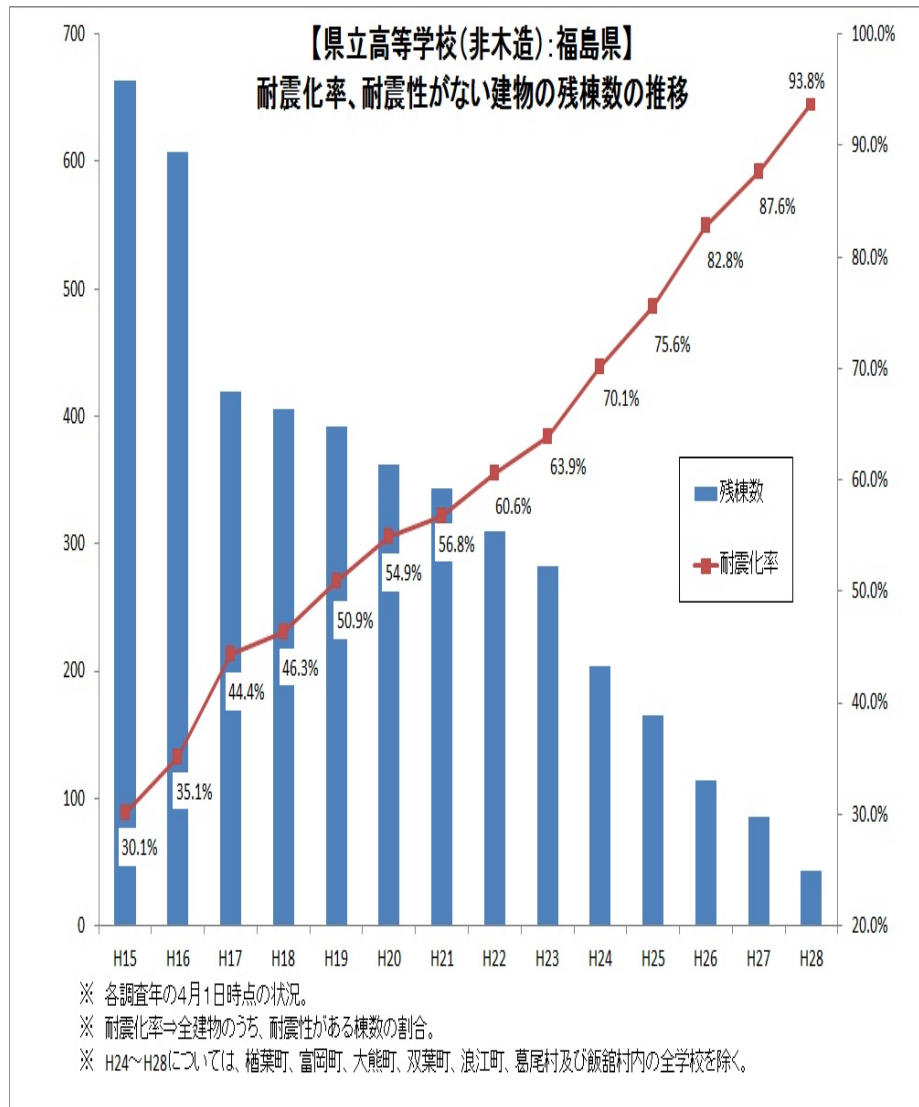
○ コミュニティスクールも増加傾向。



校舎の耐震化率・耐震性がない建物の残棟数

課題 (Weakness)

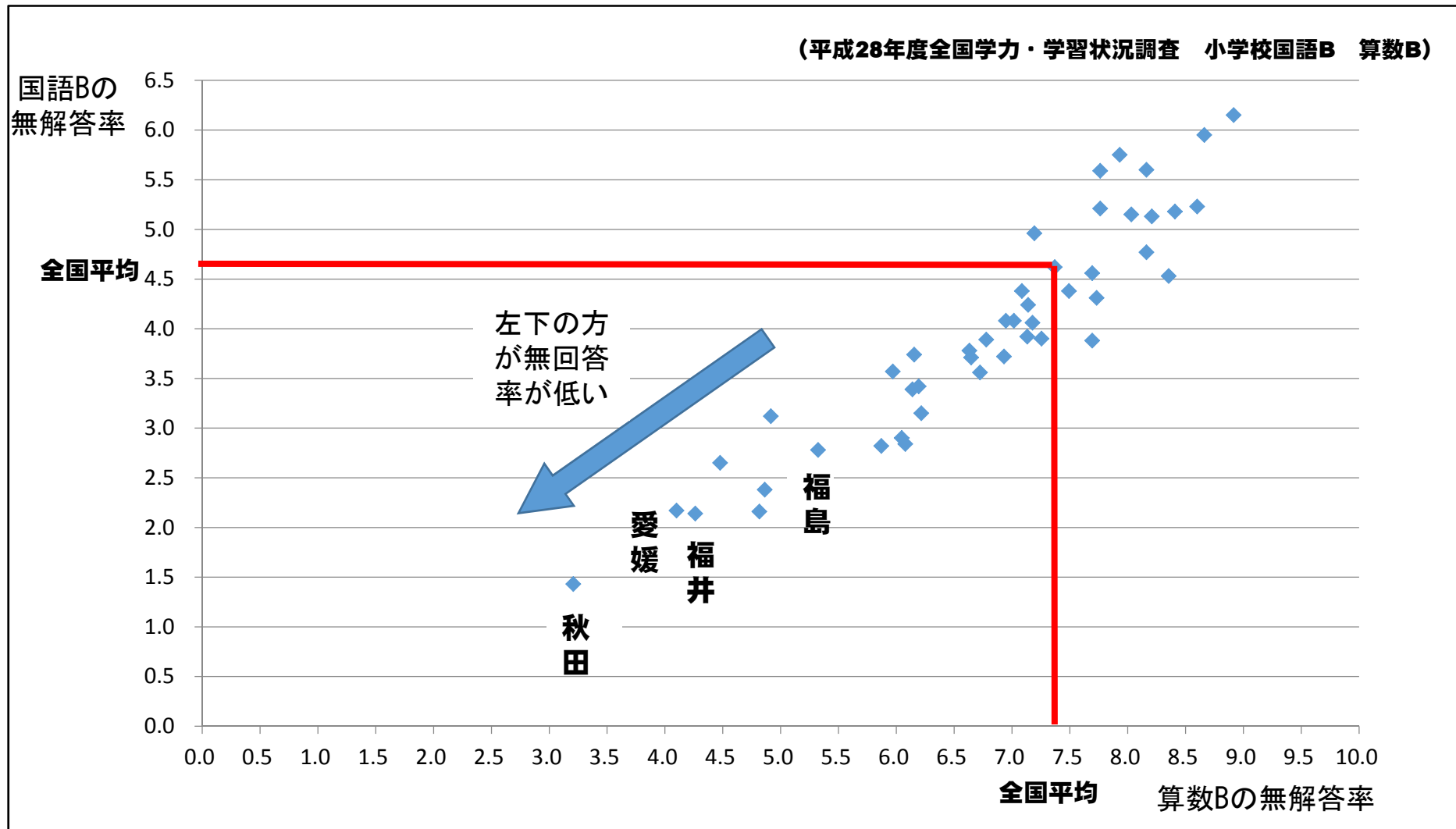
○校舎の耐震化工事は着実に進んでいるが、まだ100%になっていない。



強み (*Strength*)

無解答率が少ない(1)

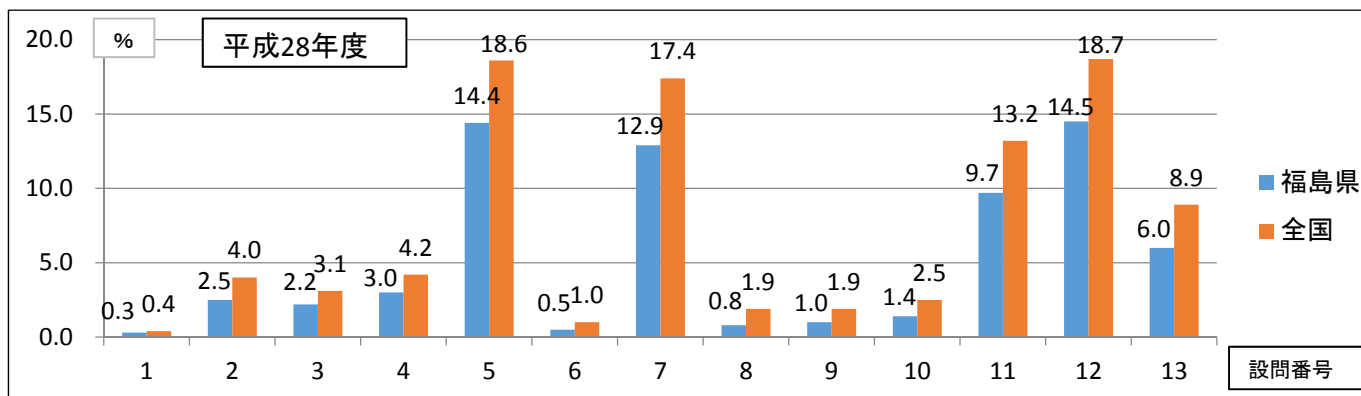
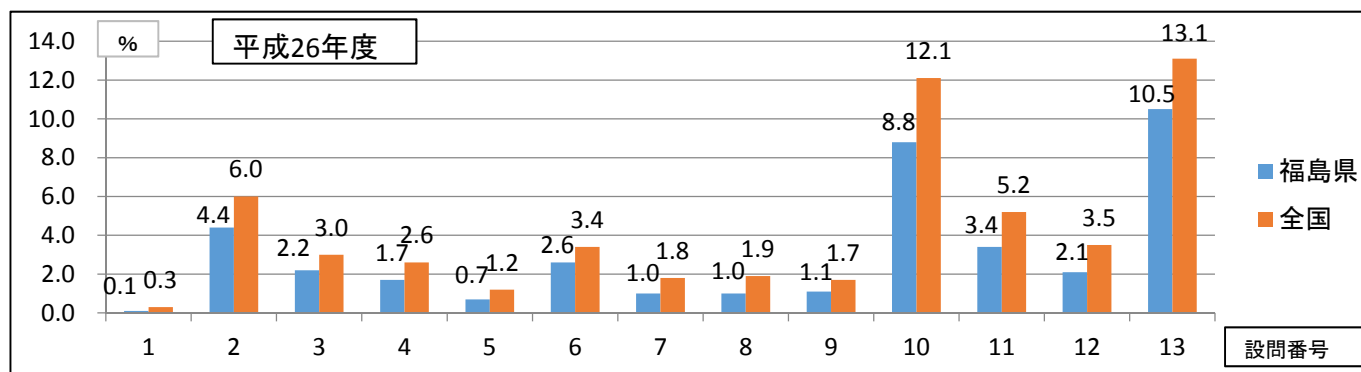
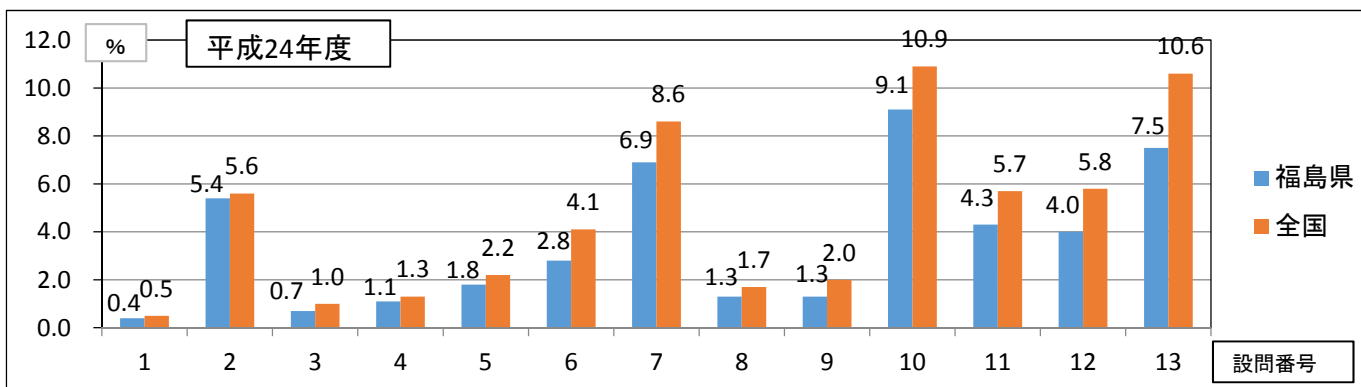
○本県は全国平均や他県と比較して、記述式の問題での「無解答」(白紙答案)の率が低い。意欲や粘り強さを持った児童生徒であると評価できる。福島県は10位以内に位置する。



無解答率が少ない (2)

○ 全国に比べ無回答率は少ない。他の科目も同様の傾向にある。(全国学力・学習状況調査経年変化)

小学校 国語B



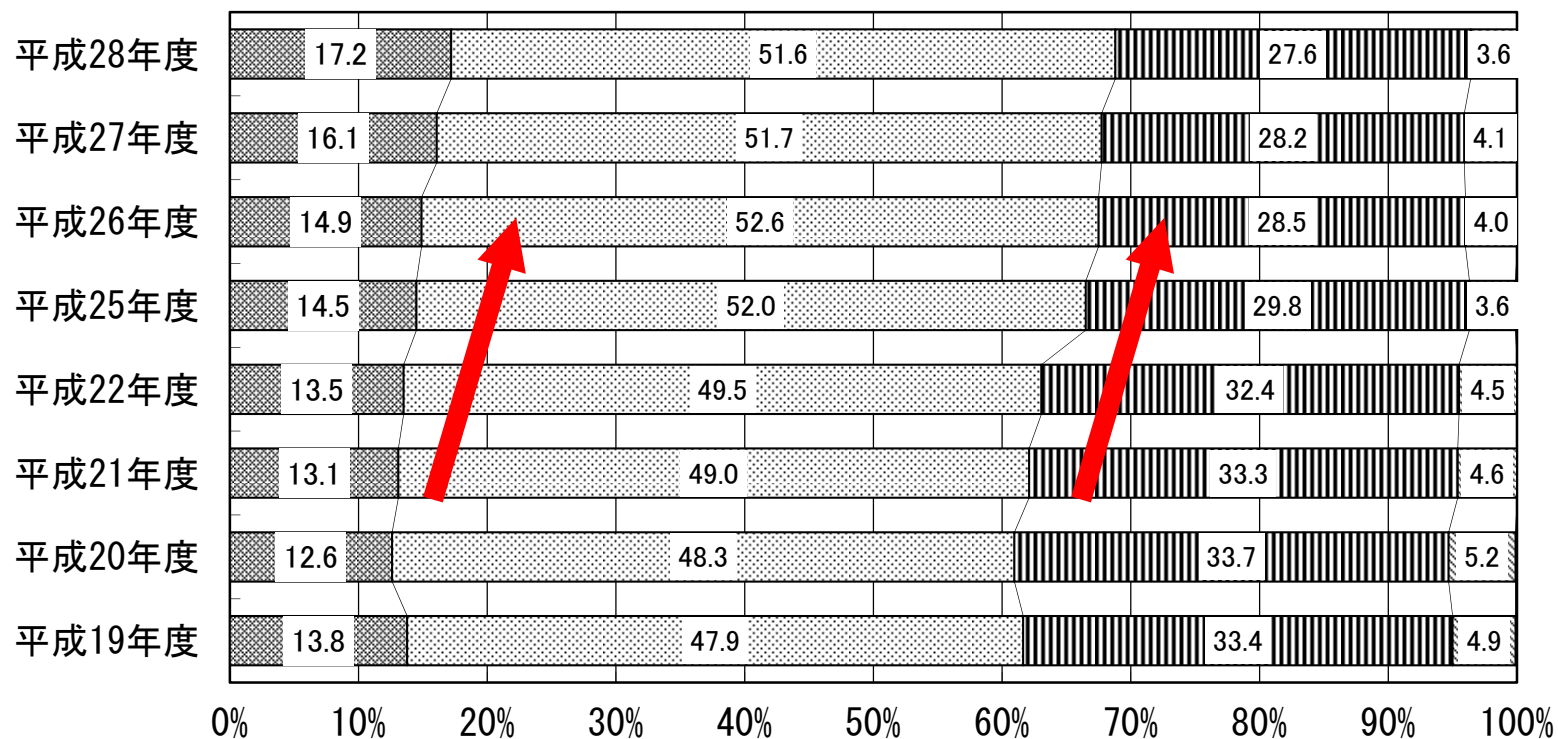
チャレンジする福島の子ども

○ 難しいことでも失敗を恐れず挑戦していると答える子どもの割合が増加している。

難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか

【中学校】
(福島県)

- 1. 当てはまる
- 2. どちらかといえば、当てはまる
- 3. どちらかといえば、当てはまらない
- 4. 当てはまらない
- その他
- 無回答



アクティブ・ラーニングの効用

強み (Strength)

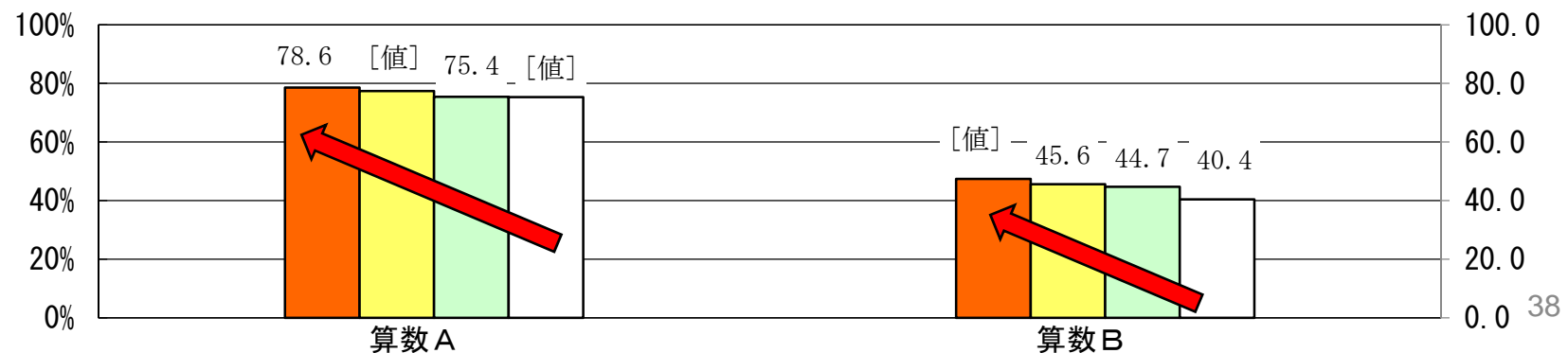
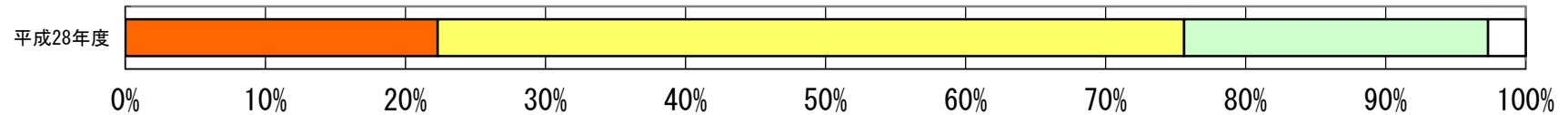
○ アクティブ・ラーニングの視点を重視した授業を行っている学校ほど、いずれの科目でも学力が高い。

児童自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を学ぶ校内研修を行っていますか。

【小学校】（福島県）

（平成28年度全国学力・学習状況調査 学校質問紙）

■ 1. よくしている □ 2. どちらかといえば、している □ 3. あまりしていない □ 4. 全くしていない □ その他、無回答

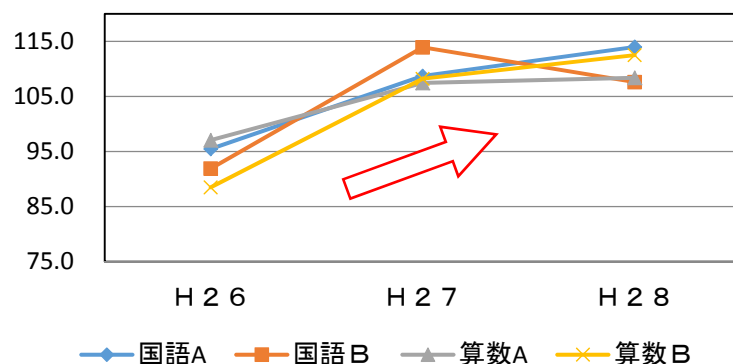


「つなぐ教育」の成果

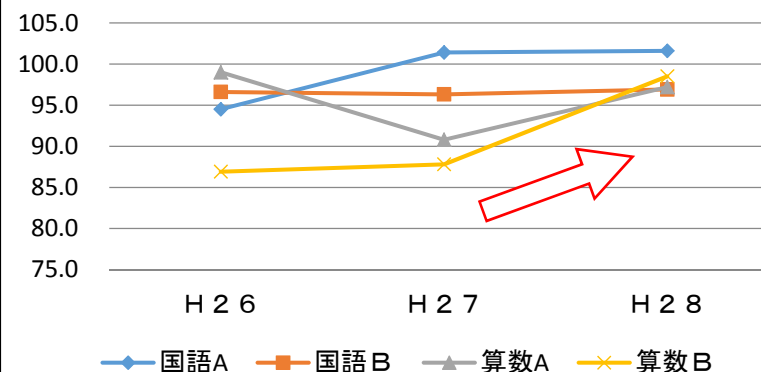
○ 県教育委員会の「つなぐ教育」を実施していた学校では、平成28年度全国学力・学習状況調査の算数・数学科の結果が、小学校で22/33校、中学校で13/14校が前年度より平均正答率が上昇した。

【小学校】

A小学校(2年間継続指定校)

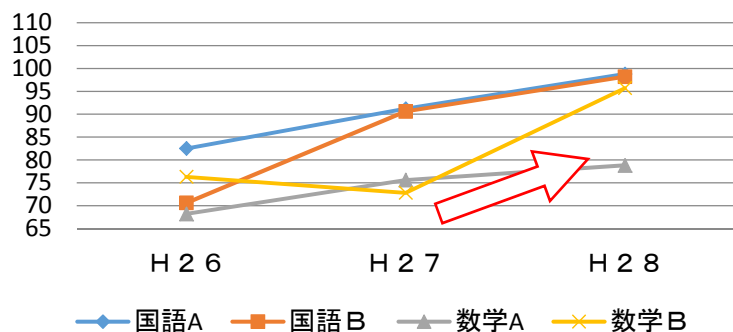


B小学校(H27指定校)

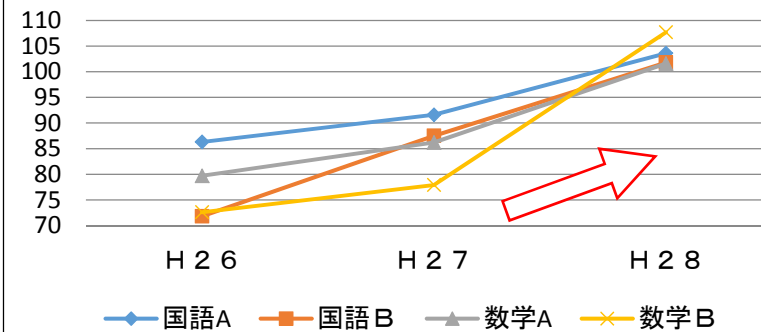


【中学校】

A中学校(2年間継続指定校)



B中学校(H27指定校)



白河市の取組

- 各学校における児童・生徒への教育指導や学習状況の改善等に役立てるために、各科目の細かな分析と質問紙調査の結果及び考察を公表することにより、学校と保護者と地域が共に手を携え、学力向上や学習環境の改善に取り組み、成果が現れた例。
- 市内の各小・中学校が自校の調査結果と考察について公表している。

〈中学3年生の平均正答率〉

	国語A	国語B	数学A	数学B
白河市	77.5	69.4	64.0	45.6
福島県	75.5	65.0	59.0	41.2
全国	75.6	66.5	62.2	44.1

(単位%)

【考察】

「国語A」

- 漢字や言葉に関する問題や旧仮名遣いの言葉を現代仮名遣いの言葉に直す問題がよくできています。学校で言葉について丁寧に取り組ませてきた成果と考えます。
- 集めた情報を整理して文章にまとめることや文章を読んで自分の考えを持つことができる生徒が多く見られました。さらに読んだり書いたりする活動を通して、自分の考えを深める場面を設けるよう指導します。

「国語B」

- 文章を読んで疑問点を指定された字数でまとめることやその疑問を調べる方法を考えることに課題が見られました。文章を書く学習では、読み手を考えたり、構成や字数を考えたりしながらまとめさせるよう指導します。
- 文章から目的に応じて情報を読み取ったり、文章の内容を理解したりする力が身に付いています。それらを活かして文章にまとめ、表現する活動を通して、さらに伸ばすよう指導します。

「数学A」

- 自然数の意味を理解していない生徒が多く見られました。4割強の生徒が0も自然数と考えていました。それぞれの意味をしっかりと捉え直す機会を設けるよう指導します。
- ねじれの位置の問題や体積、対角線など立体図形の問題がよく理解できています。各学校でシミュレーションや実際の立体を用いて正しくイメージできるようにした成果と考えられます。

「数学B」

- 筋道を立てて考え証明する問題に課題が見られました。条件を整理し、筋道を立てて考える活動を増やしていきます。
- 資料をもとに、必要な情報を選んで言葉や式、図、表、グラフに表すことが身に付いています。この学習は学年末に行うため、昨年までは定着が低かった問題です。各学校が学年末の学習内容の定着が図れるよう取り組んだ成果であると考えます。

(出典)「平成28年度全国学力・学習状況調査 強化に関する調査結果及び考察について」白河市HPより

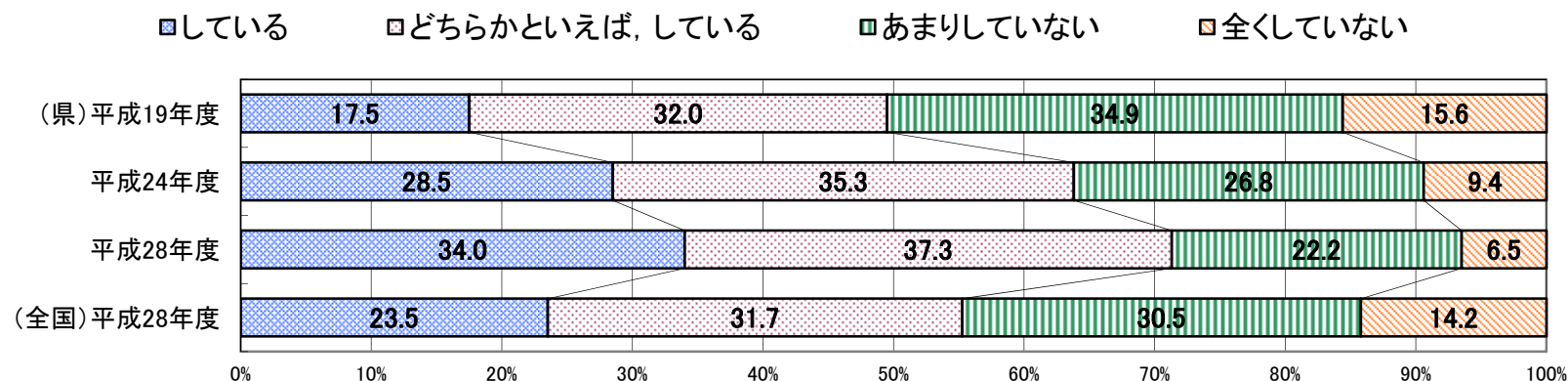
家庭での学習習慣の確立

- 家で、学校の授業の復習をしている児童生徒の割合は増加傾向にあり、全国平均を上回っている。
- 全くしていないと答える児童生徒の割合は、全国平均と比較しても1/2程度。

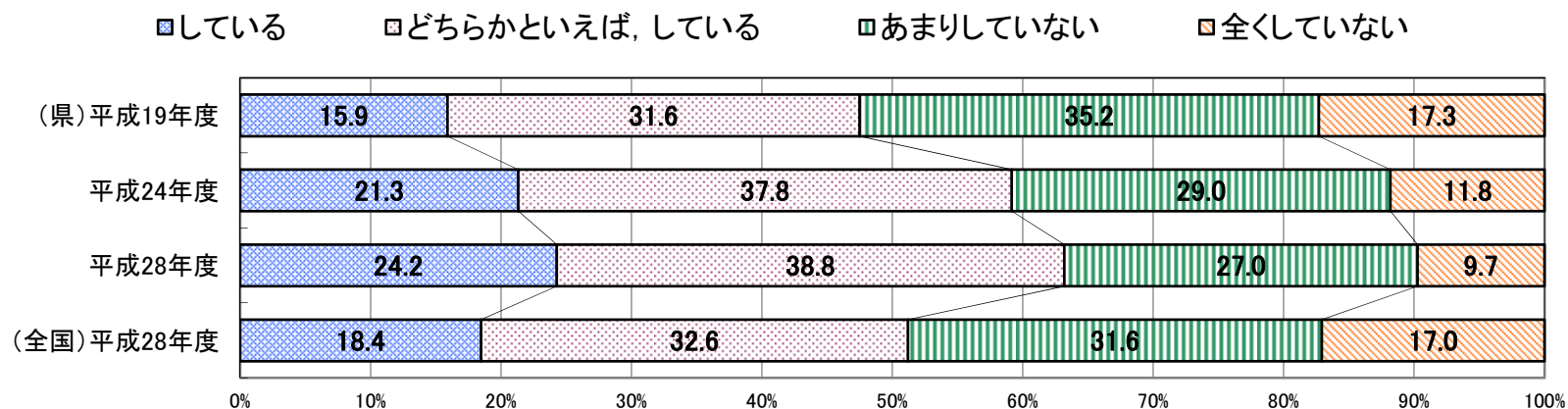
家で、学校の授業の復習をしていますか

(平成28年度全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙)

【小学校】



【中学校】



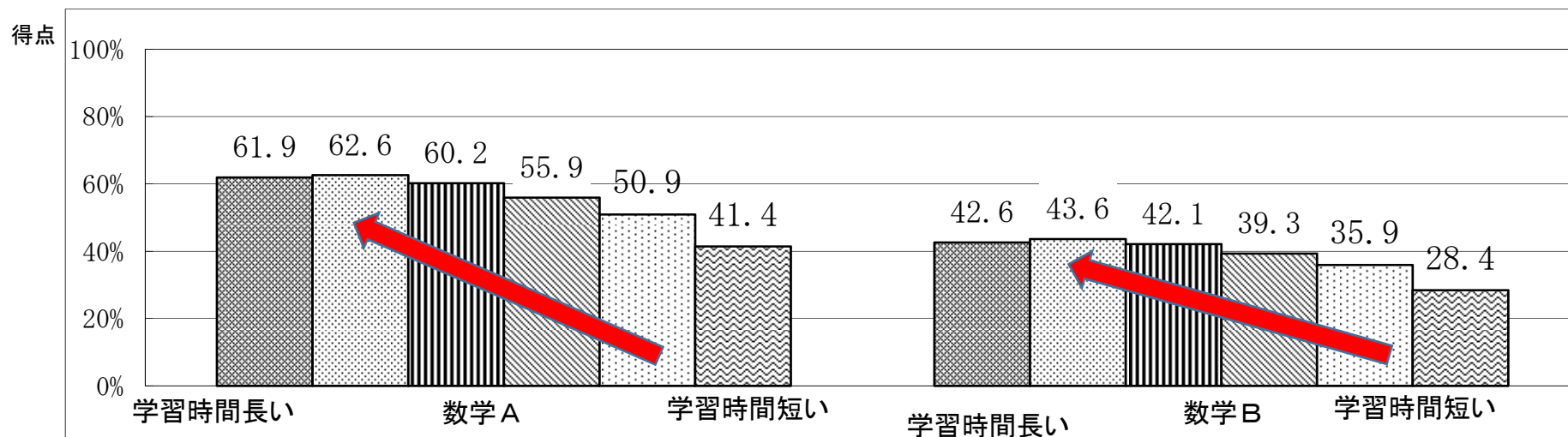
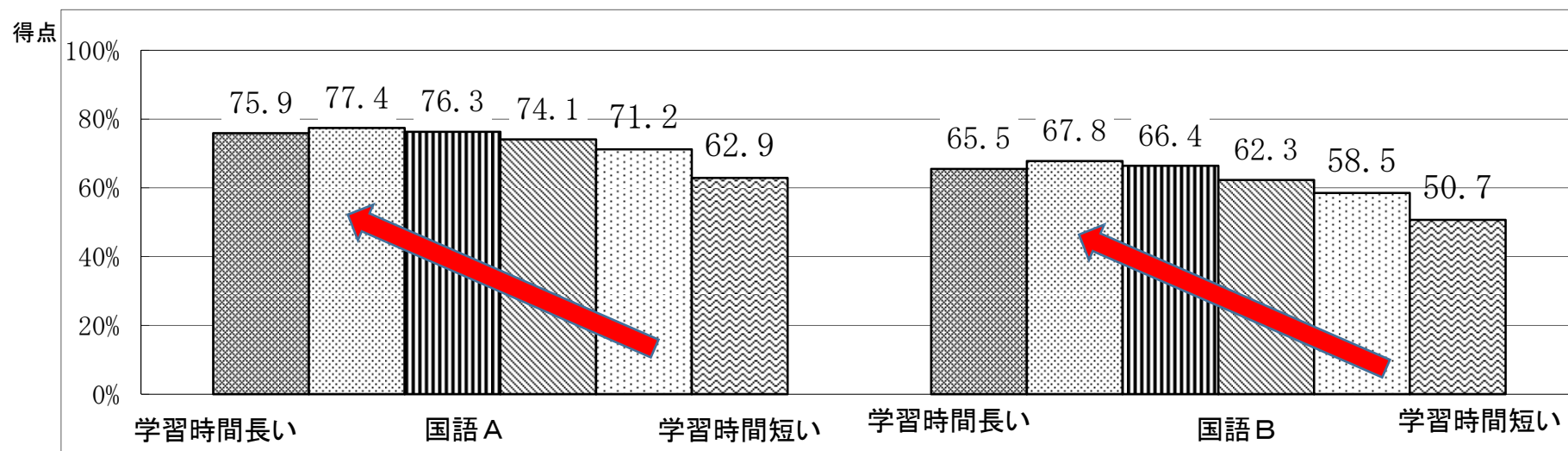
家庭での学習時間と学力のクロス分析

強み (Strength)

○ 家庭での学習時間が長い子どもほど、学力調査の得点が高い傾向にある。

【中学校(福島県)】クロス集計

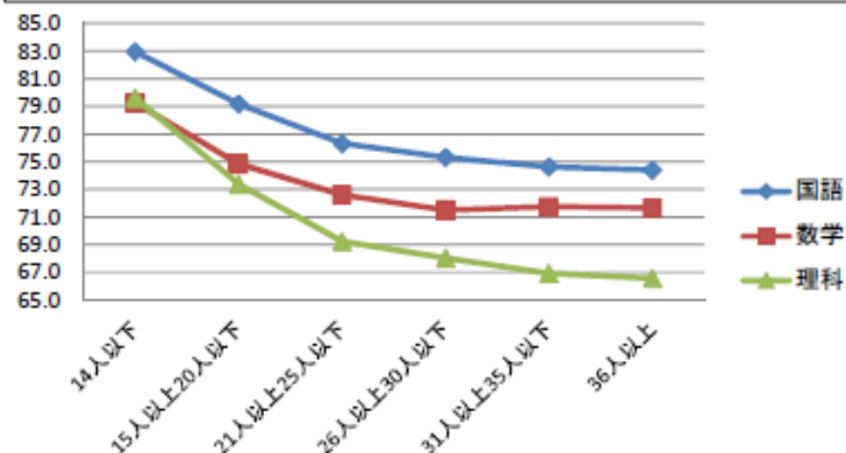
(平成28年度全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙)



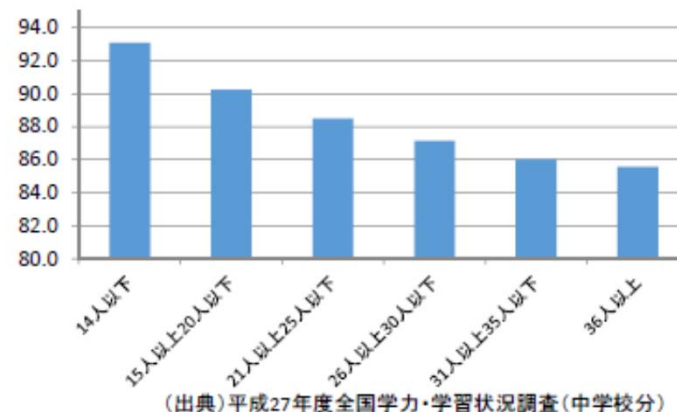
少人数学級の成果

○ 少人数学級の教育的効果は、全国調査により明らかになっている。

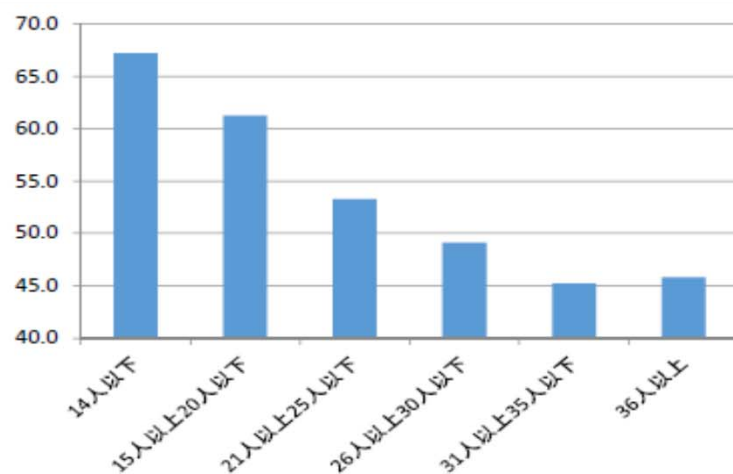
授業内容がよく分かると答えた生徒の割合



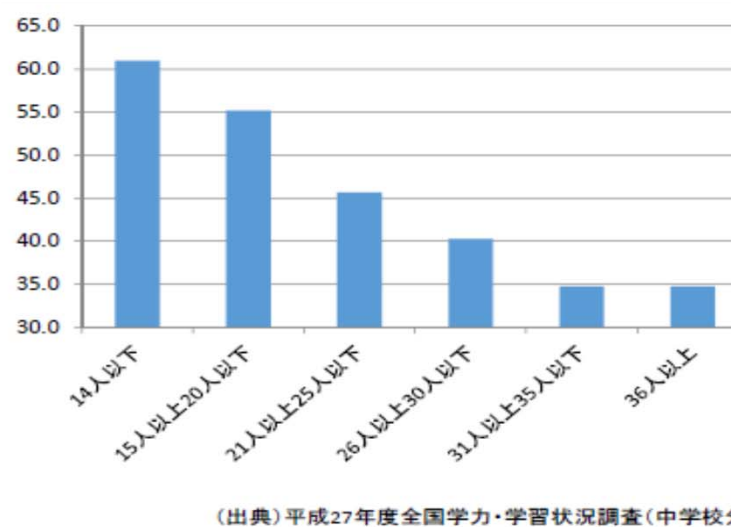
授業で自分の考えを発表する機会が与えられたと考える生徒の割合



授業中の私語が少なく、生徒が落ち着いている学校の割合



生徒が礼儀正しい学校の割合



規範意識・礼儀正しさの高まり

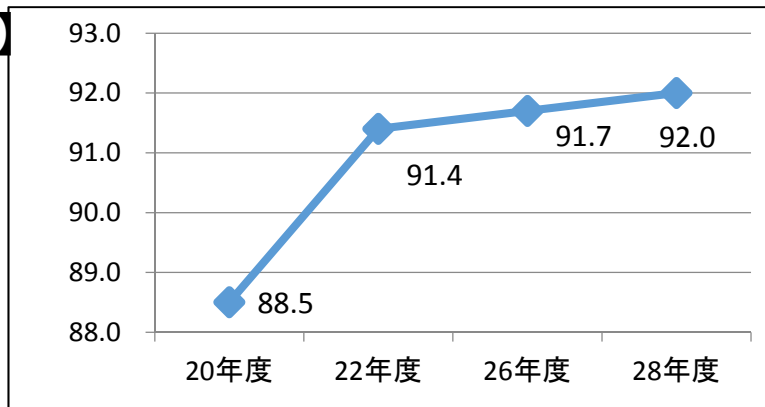
強み (Strength)

○ 児童生徒の規範意識や礼儀正しさなどが高まっている。

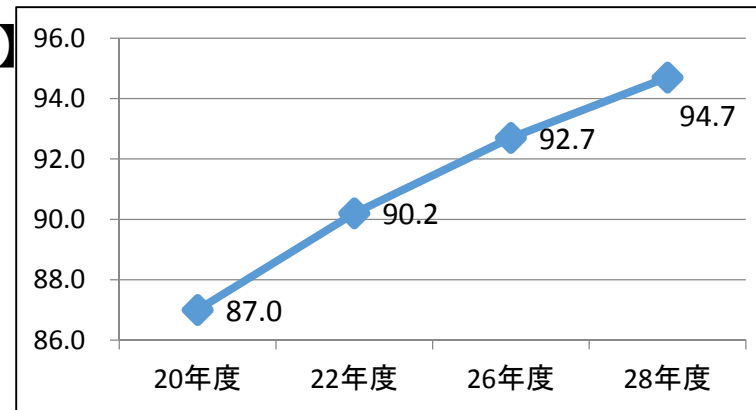
学校のきまりを守っていますか

(福島県)

【小学校】



【中学校】

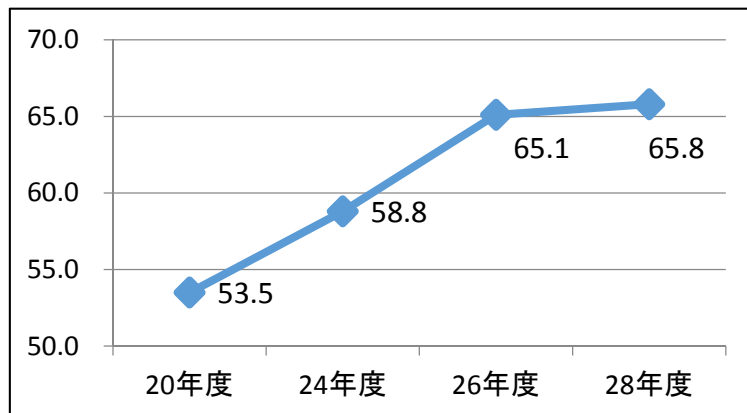


○ 自分で計画を立てて勉強する児童生徒は増加傾向にある。

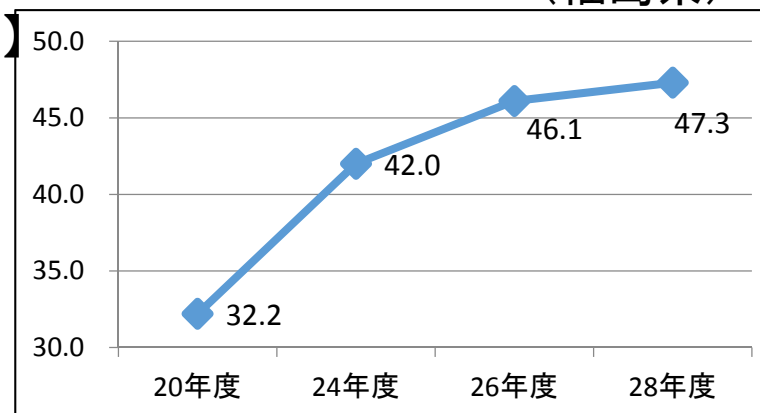
家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか

(福島県)

【小学校】



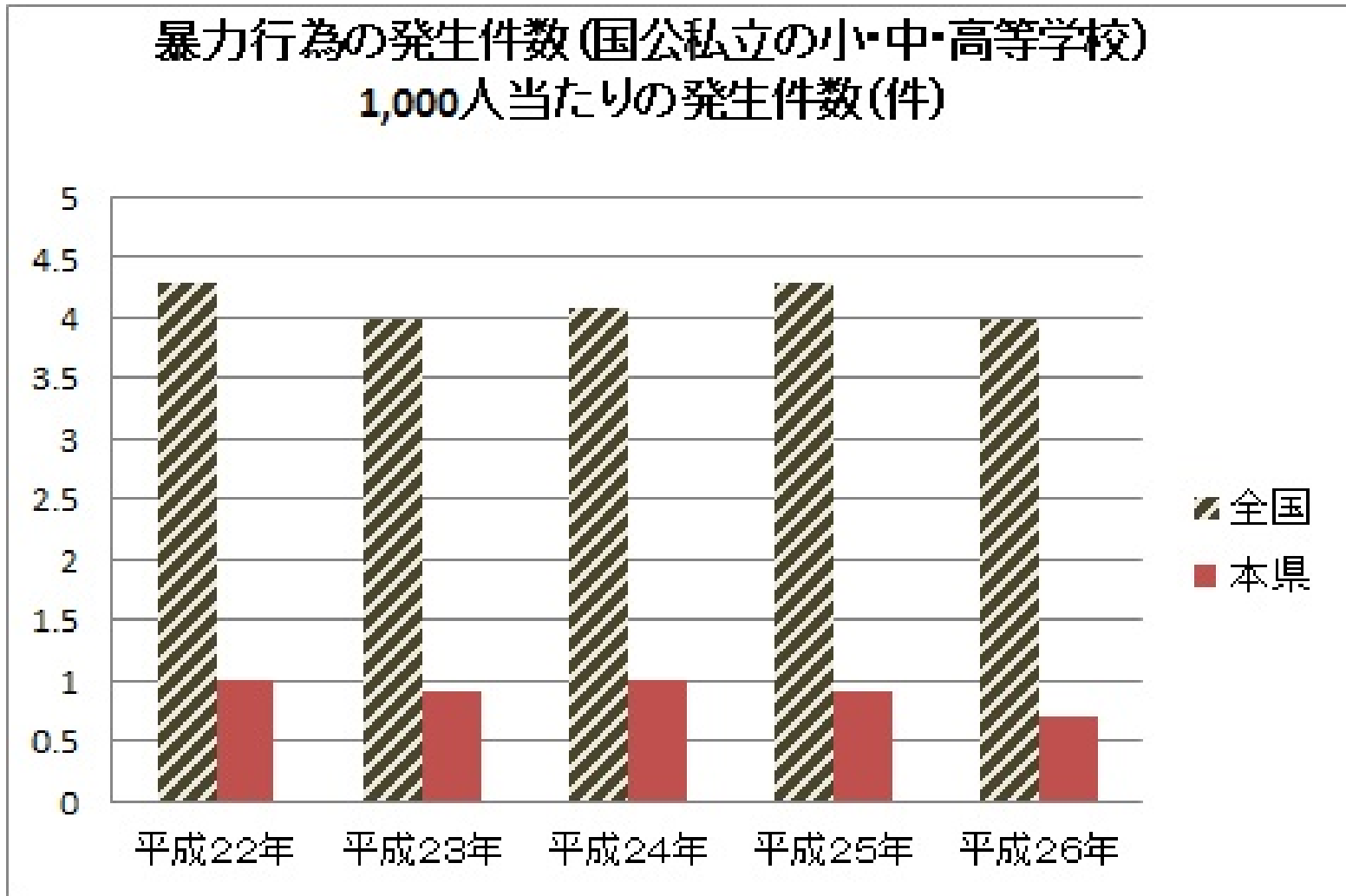
【中学校】



学校内外の暴力行為の件数

強み (Strength)

○ 全国と比較して少なく、近年は減少傾向にある。

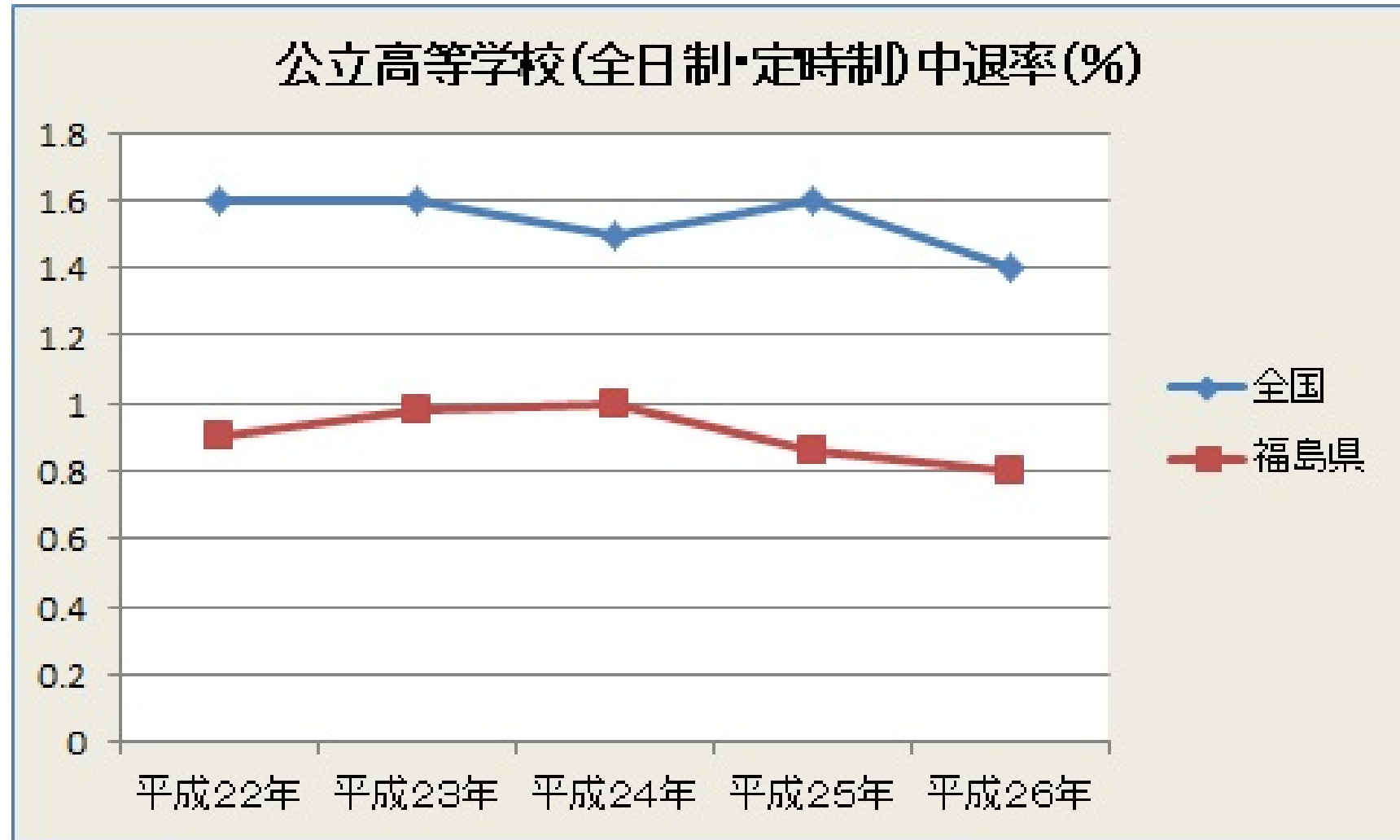


出典 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(文部科学省)

中途退学率

強み (Strength)

○ 高校の中途退学は、全国と比較して少ない傾向にある。



出典 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(文部科学省)

少年犯罪の件数

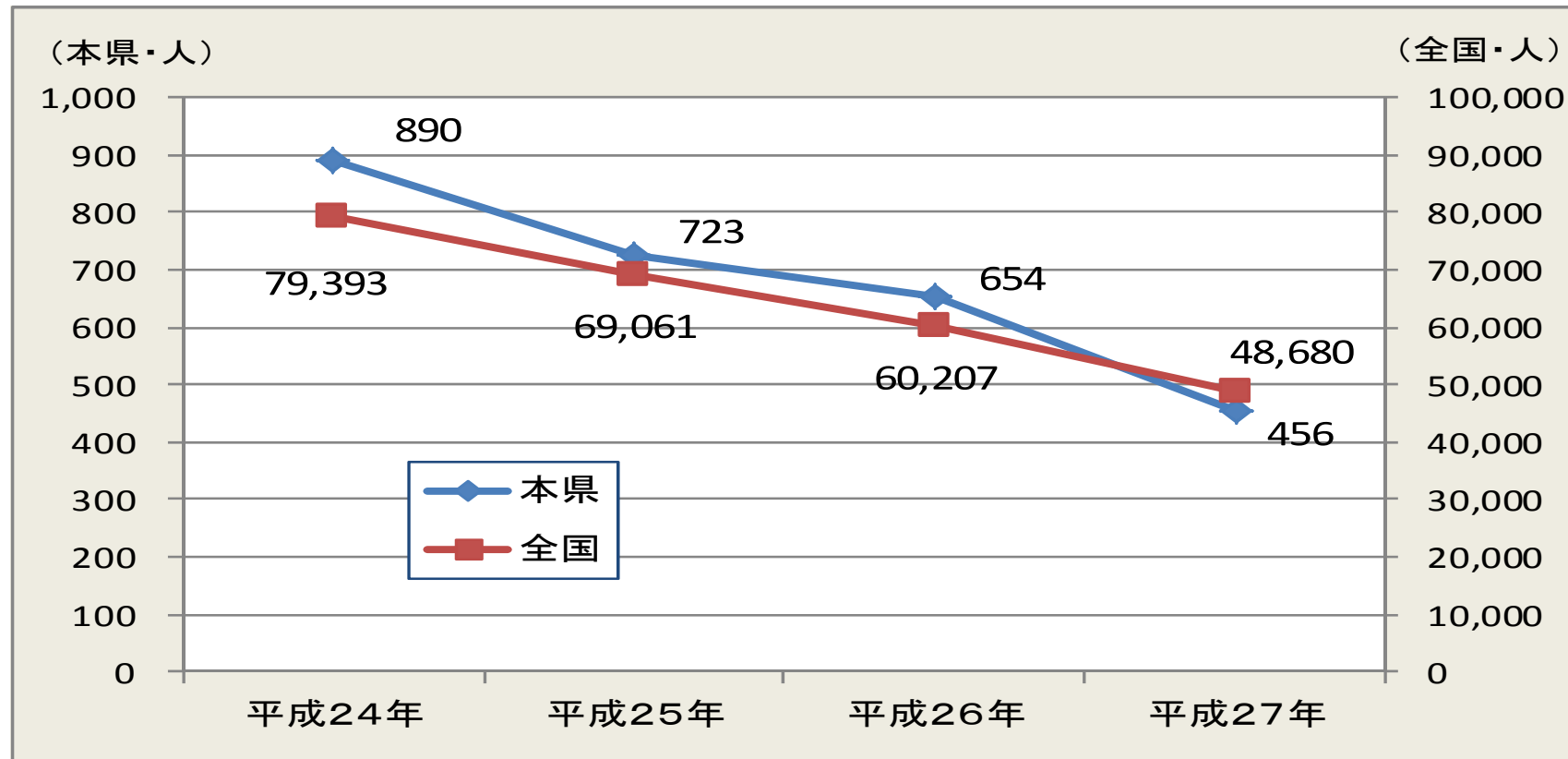
強み (Strength)

○ 少年犯罪の発生数・発生率は、減少傾向にあるとともに、全国より減少幅が大きい。

刑法犯少年の人数の推移

(人)

	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
本県	890	723	654	456
全国	79,393	69,061	60,207	48,680

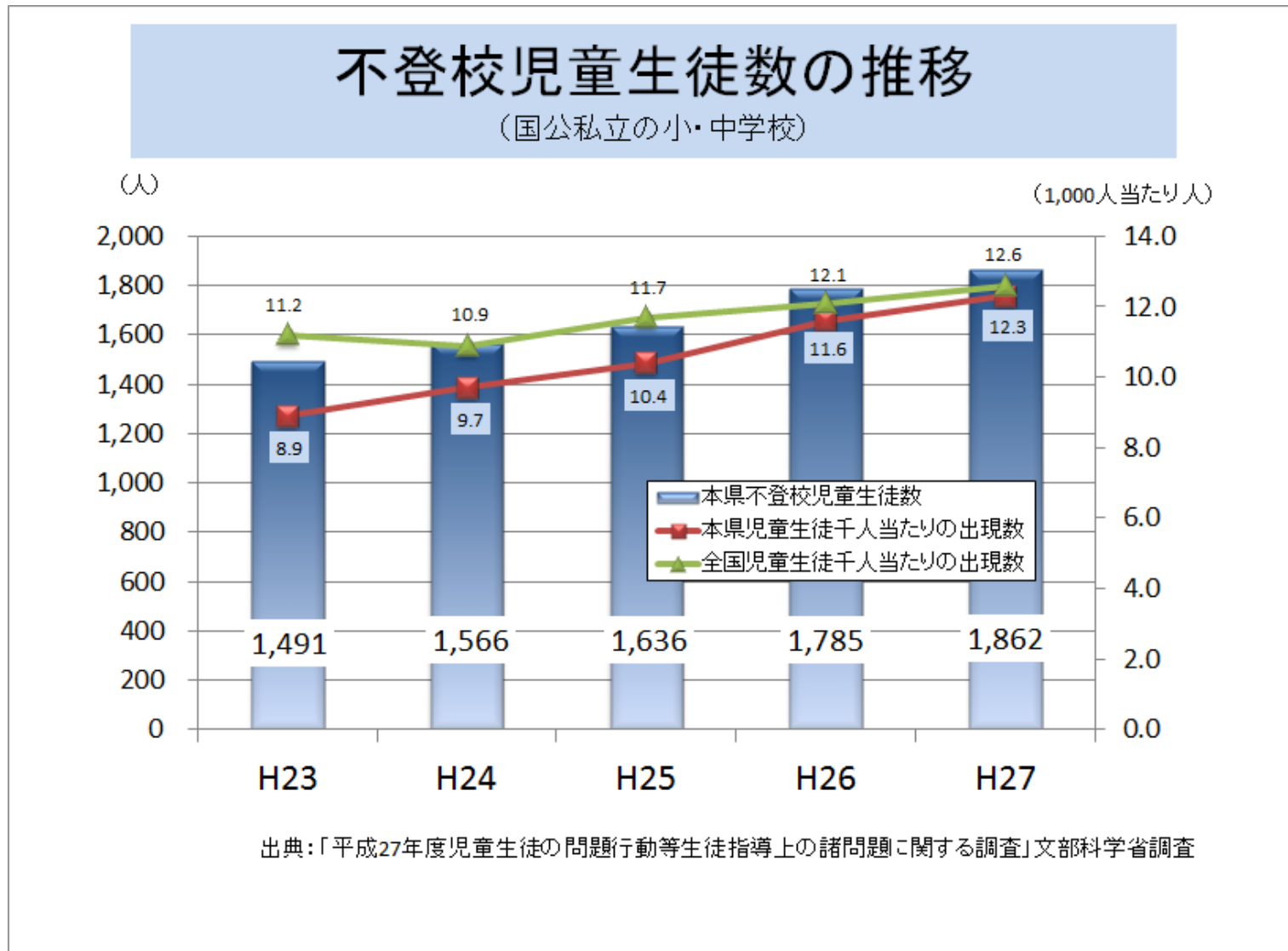


恐れ (*Threat*)

不登校の児童生徒数の推移

恐れ(Threat)

○ 震災前は全国的にも不登校児童生徒数が少ない県であったが、震災後に急増（H23→H27 約2割増）し、全国平均並みの割合に。

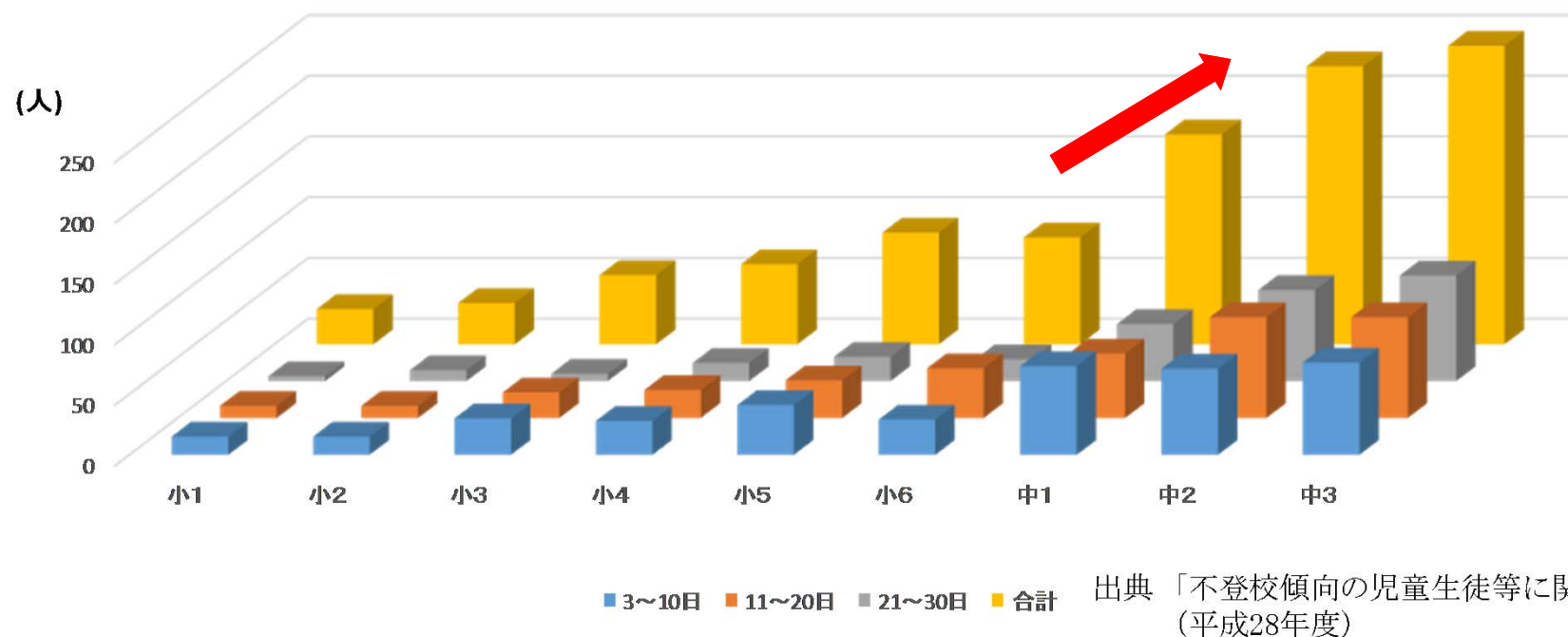


不登校傾向の児童生徒の状況

恐れ(Threat)

- 不登校傾向の児童生徒数は、小6から中1にかけて大きく増加。
- 中1では3～10日の欠席が、中2では11～30日が急増。

学年別、欠席日数別推移(福島県)
(H28.4月～7月)



- 不登校傾向となる主なきっかけは
中1では、友人関係、学業不振など
中2では、病欠、無気力、情緒混乱、生活習慣の乱れなど
- 学業不振などによる数日の欠席が、無気力や生活習慣の乱れにつながり、欠席が長期化する傾向がある。

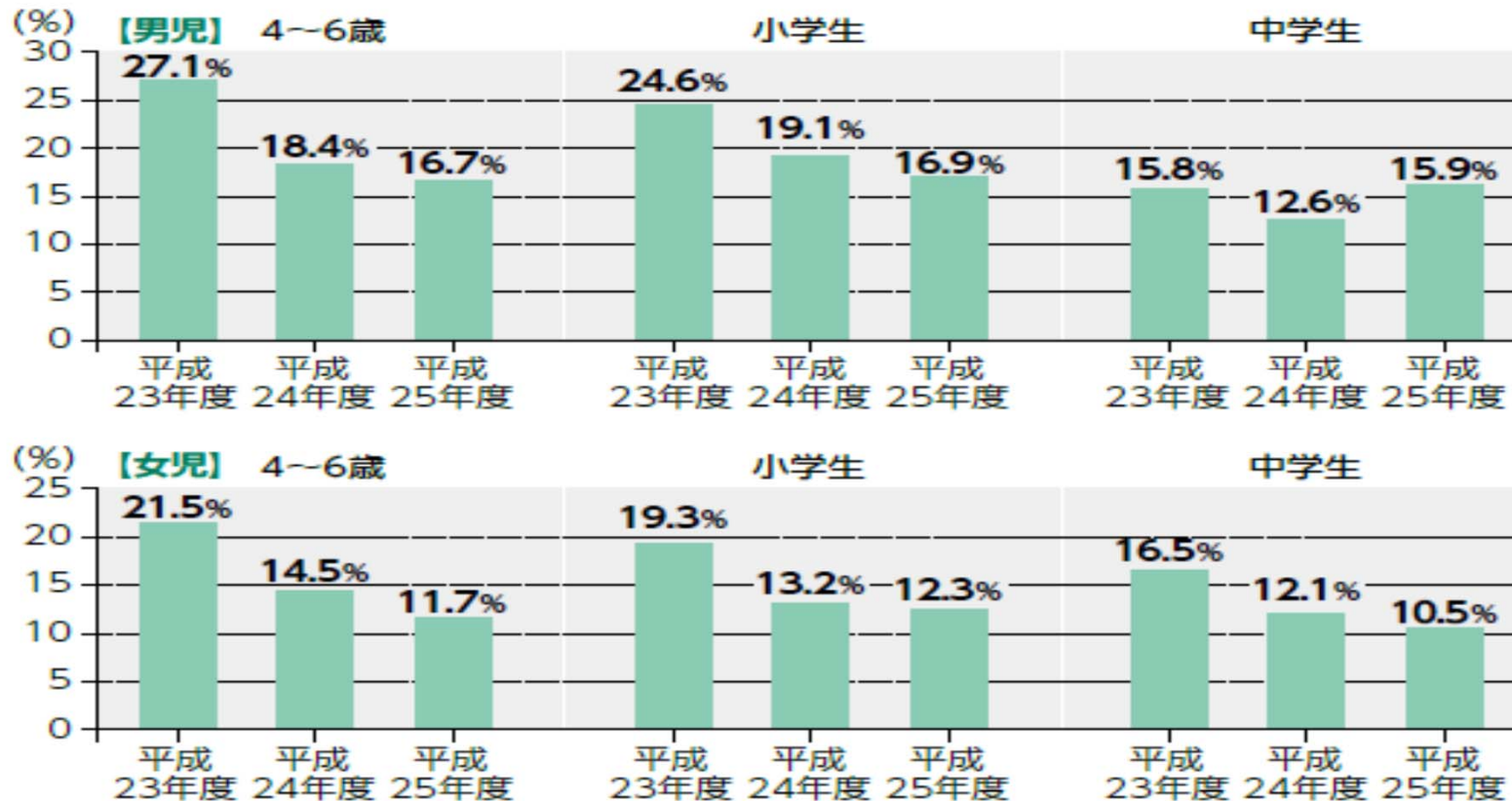
子どもの心の健康度

恐れ(Threat)

○ 震災直後の調査に比べると心のケア(支援)が必要と考えられる子どもの割合は減少傾向だが、被災していない地域の子ども※と比較すると、どの年齢区分でも依然として高い数値を示している。

※本調査における「被災している地域の子ども」の定義は「平成23年時に警戒区域、計画的避難区域、緊急時品準備区域に指定された市町村および特定避難勧奨地点の属する区域に住民登録があった子ども」

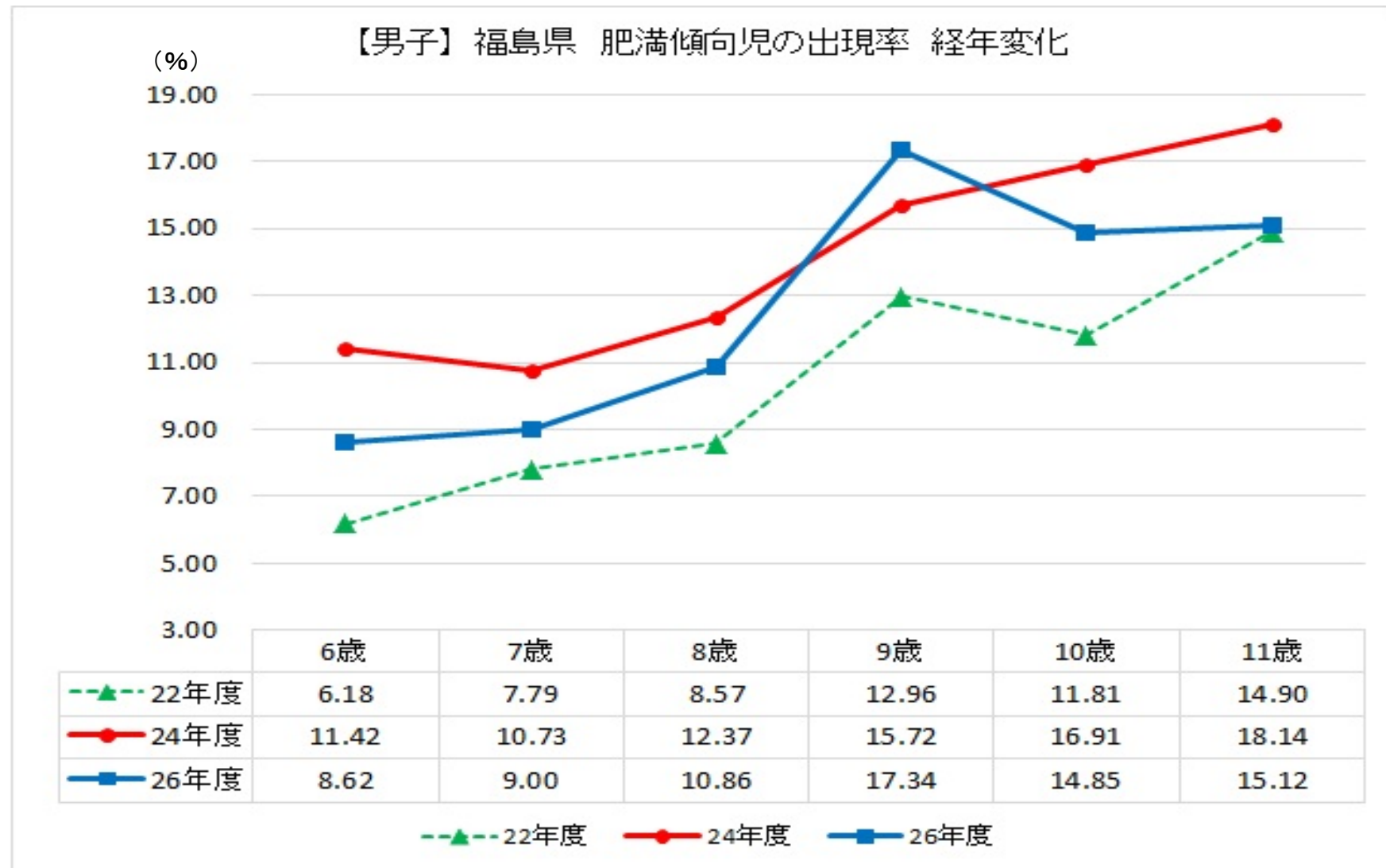
● 支援が必要と考えられる子どもの割合 (男女別)



肥満児童生徒の推移（男子）

恐れ(Threat)

○ 震災後、肥満傾向児の出現率が高くなっているものの、近年は改善も見られる。

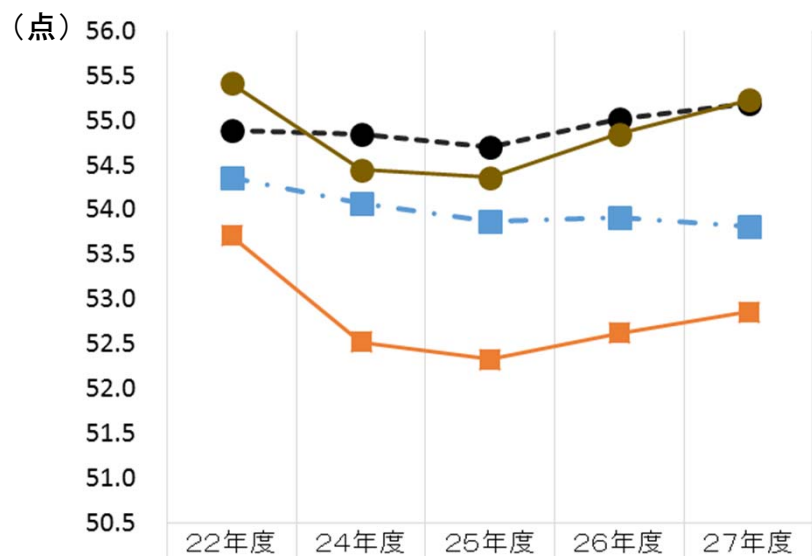


全国体力調査の結果(1)

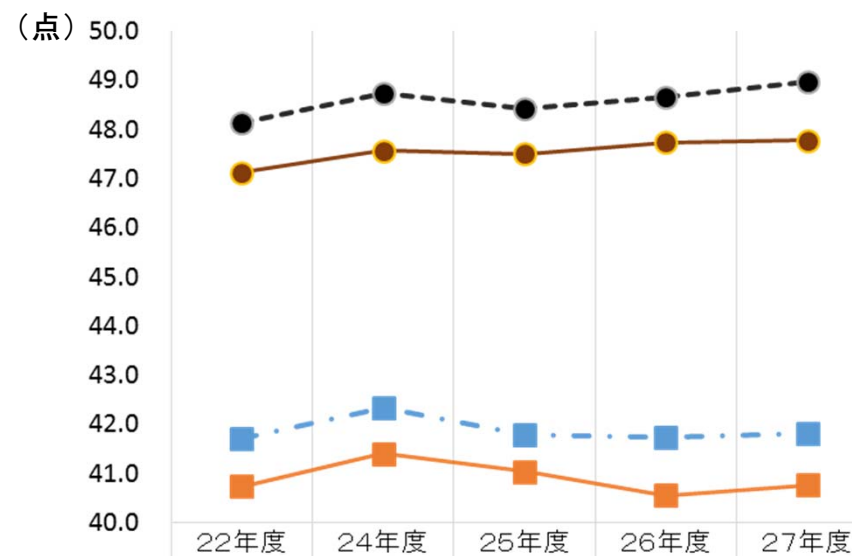
恐れ(Threat)

○小5は男女とも震災後に大きく落ち込んだが、25年度以降は改善傾向である。
中2は震災前から男女とも全国より低い状況が続いている。

体力テスト合計点(小学5年)(点)



体力テスト合計点(中学2年)(点)



* 新体力テスト合計点(満点:8種目×10点=80点)

出典 平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果

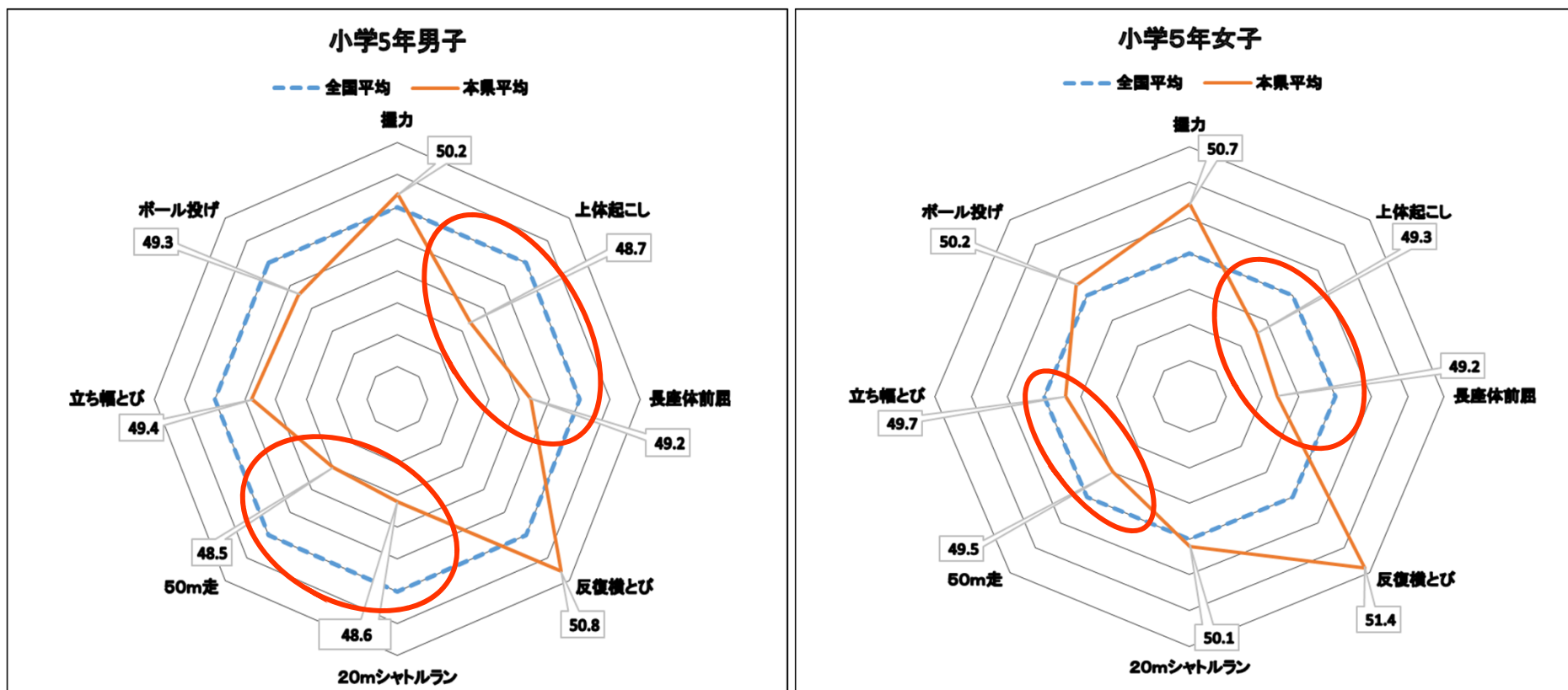
全国体力調査の結果(2)

恐れ(Threat)

○男女とも柔軟性と瞬発力が全国を下回っている。

○ 平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果

* Tスコア(全国平均50)で表示



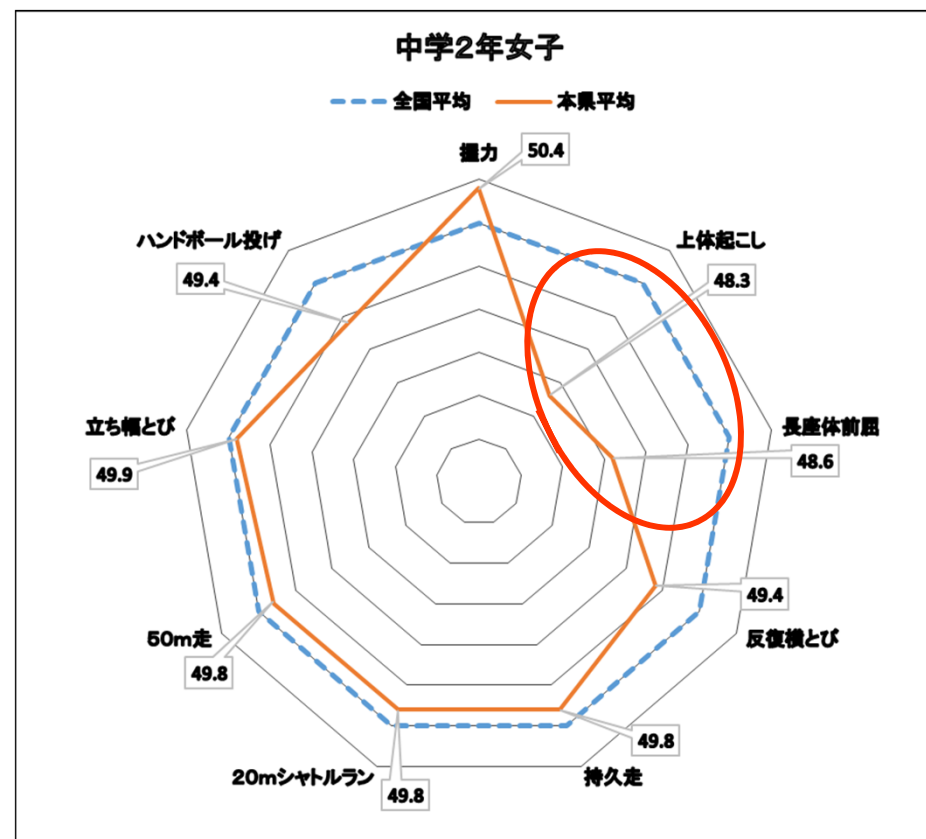
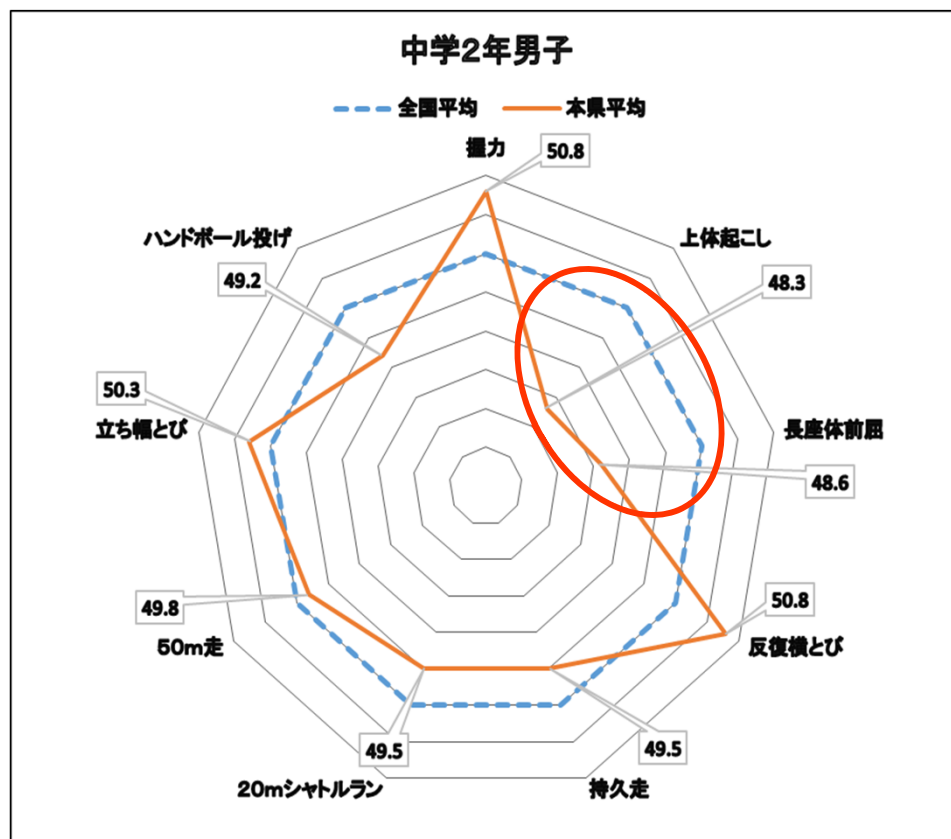
全国体力調査の結果(3)

恐れ(Threat)

○男女とも柔軟性が全国を大きく下回っている。

○平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果

* Tスコア(全国平均50)で表示

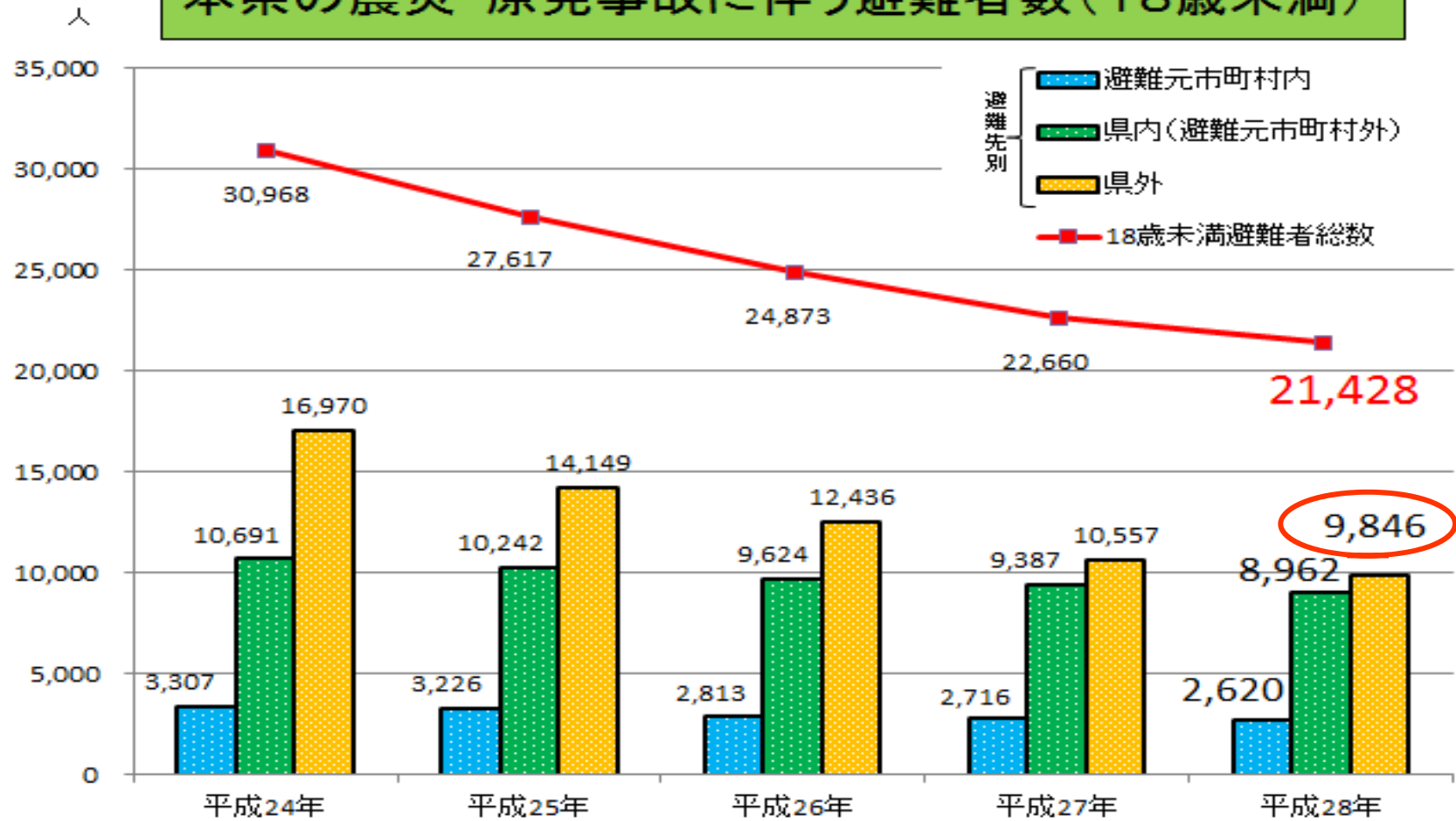


避難している子ども

恐れ(Threat)

○ 震災・原発事故後、本県の子どもの避難者数は減少傾向にあるが、未だに約1万人の子どもが県外に避難している。

本県の震災・原発事故に伴う避難者数(18歳未満)



(平成24年～27年は10月1日現在 平成28年は4月1日現在)

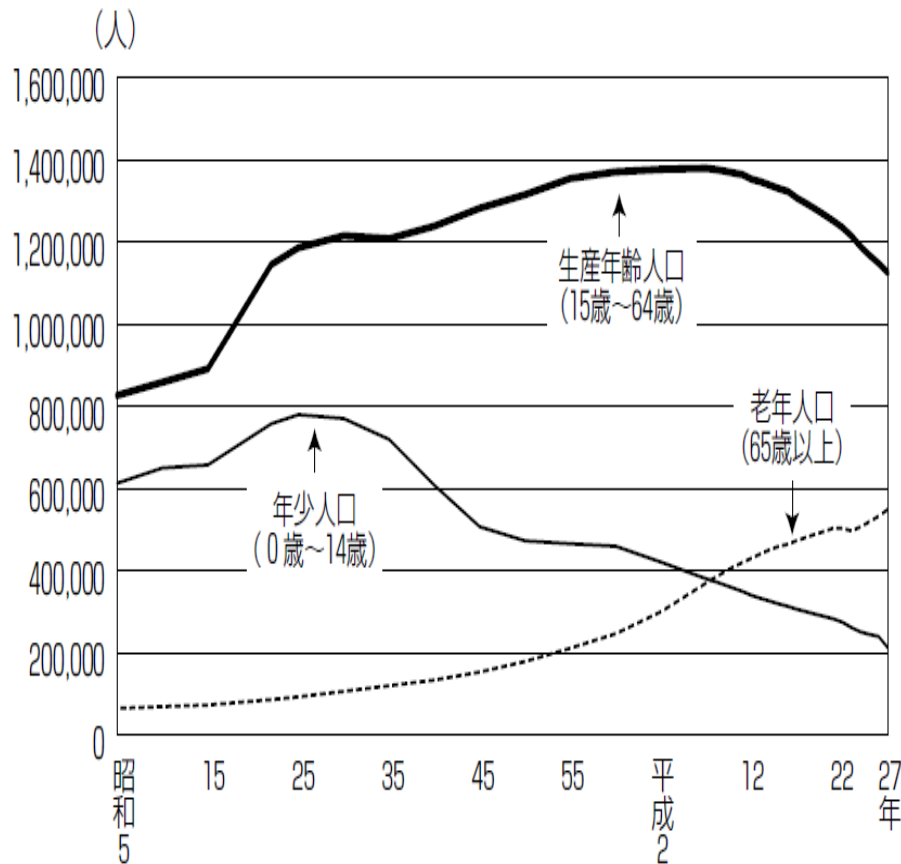
出典：福島県子ども・青少年政策課調べ

年少人口等の減少・人口流出

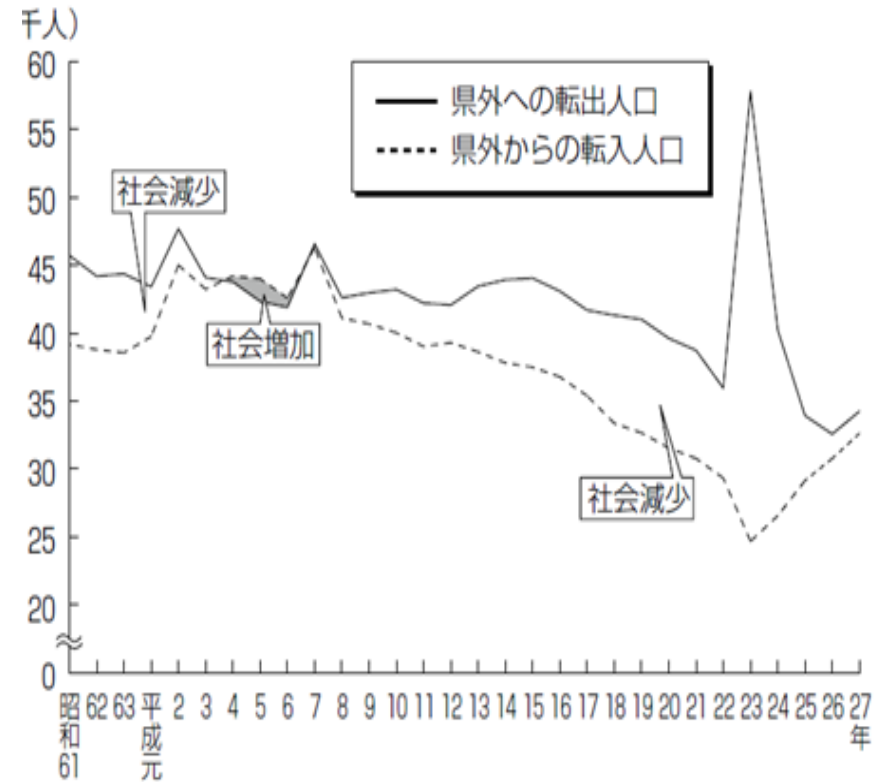
恐れ(Threat)

- 年少人口及び生産年齢人口が減少している。
- 震災・原発事故の影響により、県外への転出人口が一時的に増大したが、近年は県外からの転入人口が増加している。

年齢3区分別人口の推移(昭和5年~平成27年、各年10月1日現在)



社会増減の推移



県勢要覧より

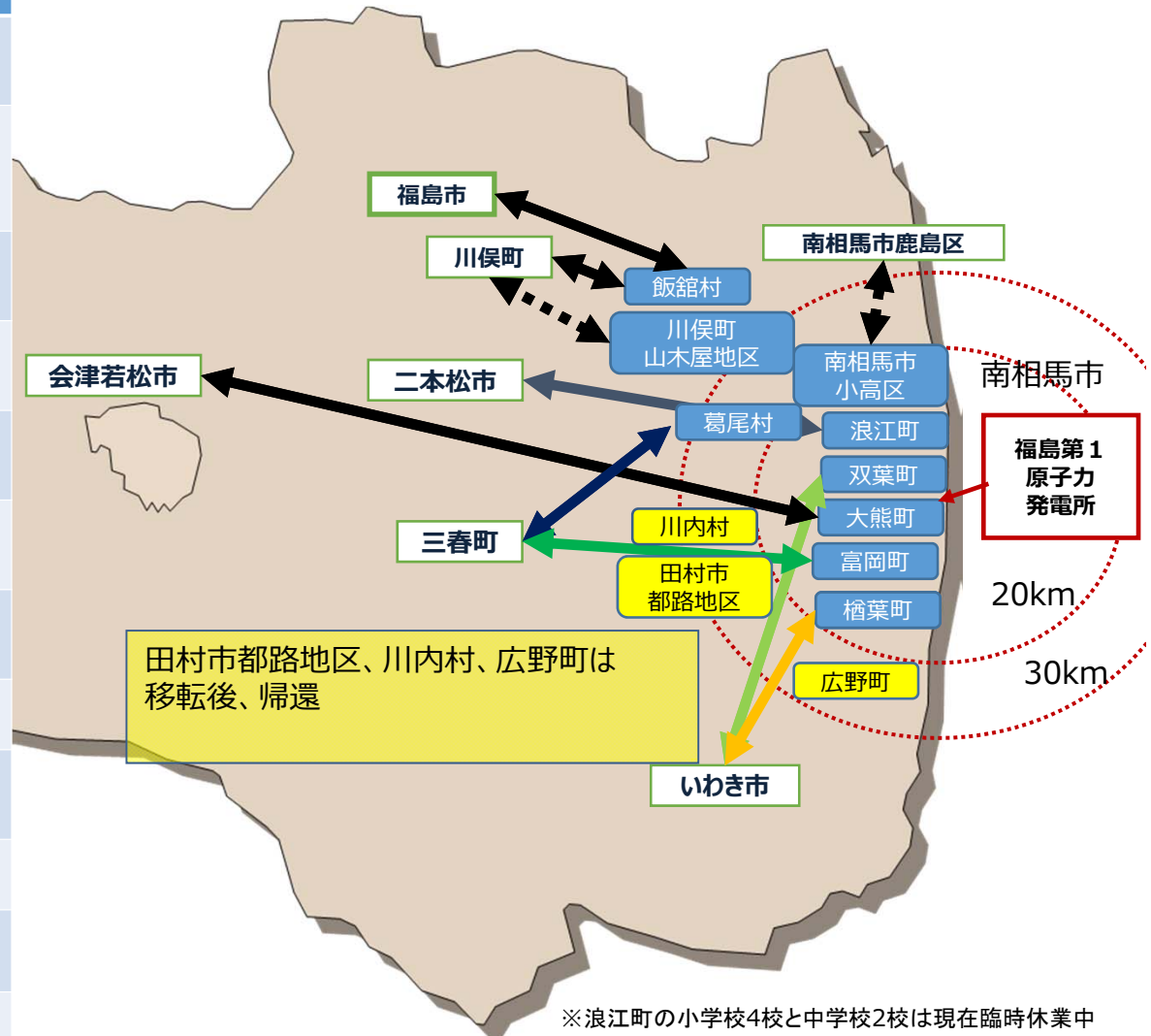
資料：県統計課「福島県の推計人口（福島県現住人口調査年報）」

避難地域12市町村の小・中学校の避難等の状況(1)

恐れ(Threat)

平成28年9月21日現在

震災前 (避難指示解除時期)	学校の現在地
南相馬市小高区 (H28.7.12)	南相馬市鹿島区 → H29.4 学校再開予定
飯館村 (H29.3 末)	福島市(中) 川俣町(小) → H30.4 学校再開予定
浪江町 (H29.3 以降)	二本松市
葛尾村 (H28.6.12)	三春町
双葉町 (未定)	いわき市
大熊町 (未定)	会津若松市
富岡町 (H29.4 以降)	三春町
川内村	<帰還>
楡葉町 (H27.9.5)	いわき市 → H29.4 学校再開予定
広野町	<帰還>
田村市都路地区	<帰還>
川俣町山木屋地区 (H29.3 末)	川俣町 → H30.4 学校再開予定



※避難指示解除時期、学校再開時期については、報道ベース

※浪江町の小学校4校と中学校2校は現在臨時休業中

避難地域12市町村の小・中学校の状況(2)

恐れ (Threat)

平成28年9月21日現在

(%は平成22年5月比)

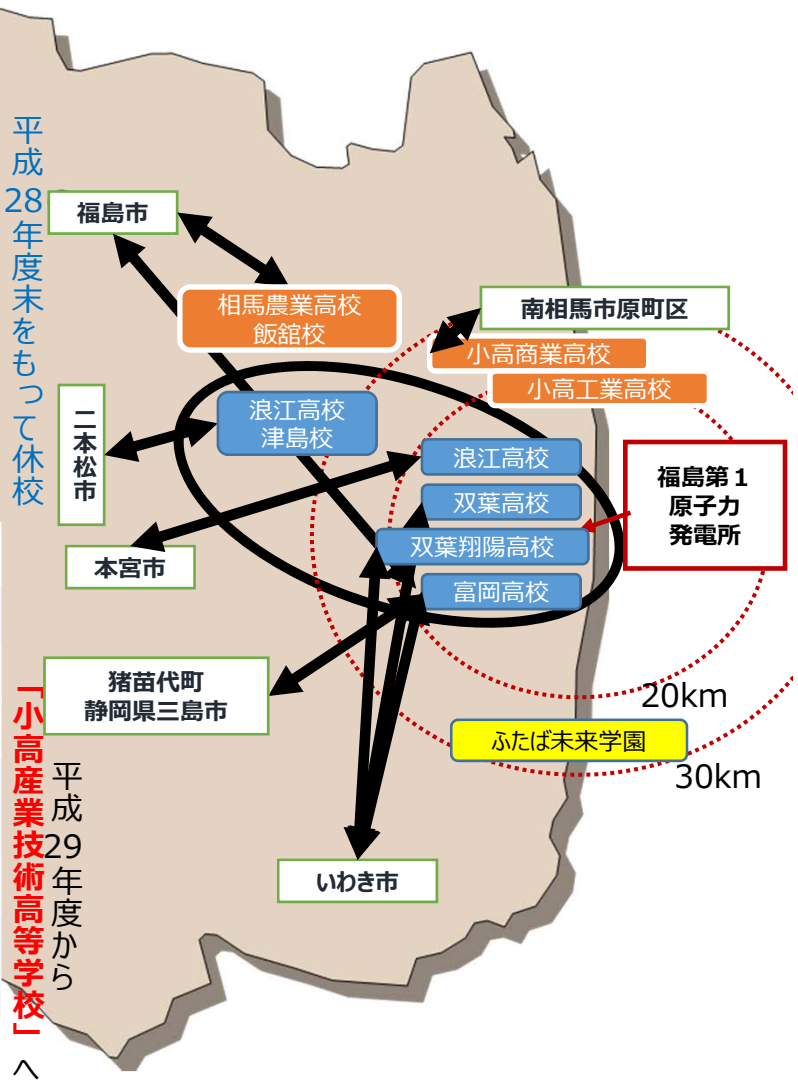
	平成22年5月 【震災前】	平成23年5月 【震災直後】		平成28年5月 【現在】	
南相馬市小高区 4小1中	1,087	103	(9%)	181	(17%)
飯館村 3小1中	531	388	(73%)	196	(37%)
浪江町 6小3中	1,773	0	(0)	28	(2%)
葛尾村 1小1中	112	0	(0)	20	(18%)
双葉町 2小1中	551	0	(0)	28	(5%)
双葉8町村 大熊町 2小1中	1,127	568	(50%)	65	(6%)
富岡町 2小2中	1,487	0	(0)	33	(2%)
川内村(帰還) 1小1中	166	76	(46%)	49	(30%)
楢葉町 2小1中	686	0	(0)	128	(19%)
広野町(帰還) 1小1中	541	0	(0)	211	(39%)
双葉8町村計 17小11中	6,443	644	(10%)	562	(9%)
田村市都路地区(帰還) 2小1中	228	197	(86%)	130	(57%)
川俣町山木屋地区 1小1中	99	89	(90%)	40	(40%)
総計	8,388	1,421	(17%)	1,109	(13%)

(児童生徒数 単位：人)

避難指示区域等内における県立高校の状況 (1)

平成28年9月21日現在

No.	校名	震災後の状況
1	双葉高校	いわき明星大学サテライト(いわき市)
2	浪江高校	本宮高校サテライト(本宮市)
3	浪江高校 津島校	安達高校サテライト(二本松市)
4	富岡高校	福島北高校サテライト (福島市) 猪苗代高校サテライト (耶麻郡猪苗代町) 三島長陵高校サテライト (静岡県)
5	双葉翔陽高校	いわき明星大学サテライト(いわき市)
6	原町高校	平成23年10月 自校で再開
7	相馬農業高校	平成23年11月 自校で再開
8	相馬農業高校 飯舘校	福島明成高校サテライト(福島市)
9	小高商業高校	原町高校サテライト(南相馬市原町区)
10	小高工業高校	南相馬市サッカー場サテライト (南相馬市原町区)



避難指示区域等内における県立高校の状況

恐れ(Threat)

平成28年9月21日現在

- 震災前後の生徒数の推移（高校）

(%は平成22年5月比)

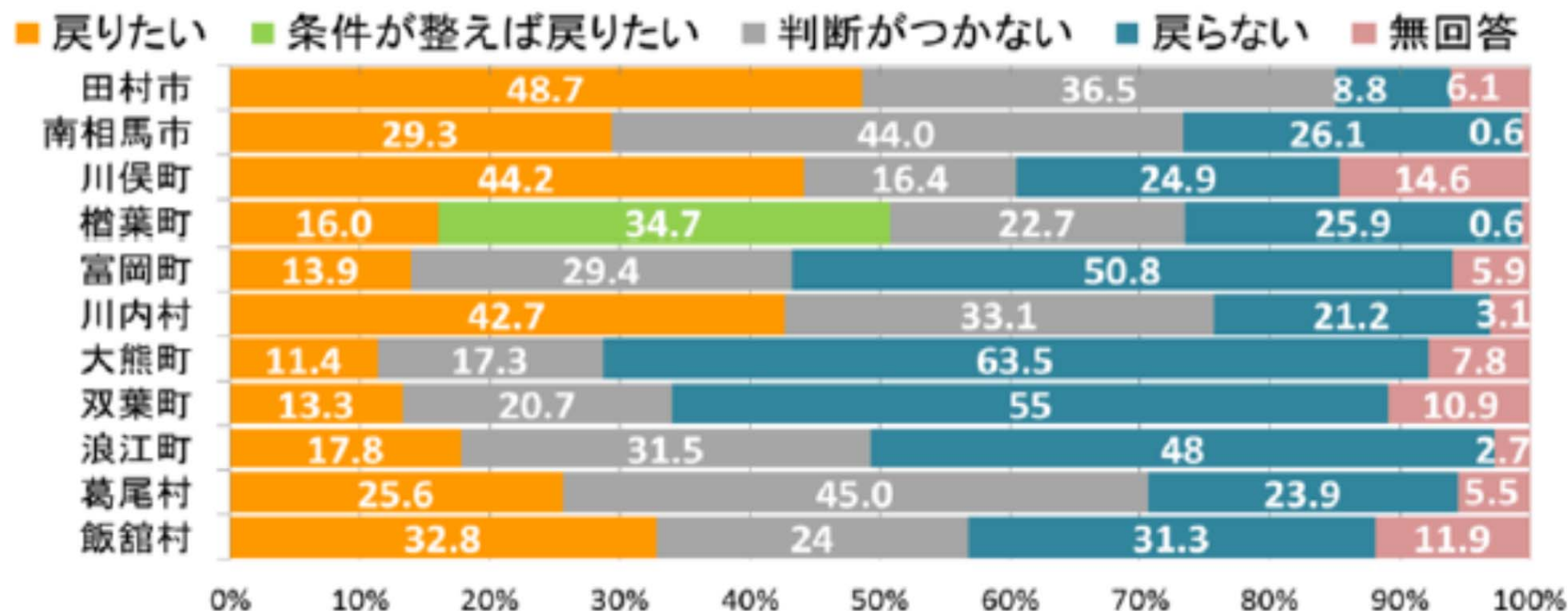
	平成22年5月 【震災前】	平成23年5月 【震災直後】		平成28年5月 【現在】	
双葉高校	469	331	(71%)	11	(2%)
浪江高校	312	285	(91%)	14	(4%)
浪江高校津島校	53	60	(113%)	12	(23%)
富岡高校	326	257	(79%)	62	(19%)
双葉翔陽高校	340	196	(58%)	12	(4%)
ふたば未来学園高校	—	—	(—)	282	(—)
原町高校	708	473	(67%)	465	(66%)
相馬農業高校	331	325	(98%)	229	(69%)
相馬農業高校飯舘校	88	80	(91%)	69	(78%)
小高商業高校	217	191	(88%)	151	(70%)
小高工業高校	588	567	(96%)	329	(56%)
計	3,432	2,765	(81%)	1,636	(48%)

地域コミュニティの再生の課題

恐れ(Threat)

○ 帰還に関して住民の意向が割れており、地域コミュニティの再生が課題。

◆復興庁・県・市町村による住民意向調査の結果(帰還意向)



※調査年度 H27年度(田村市、川俣町、浪江町、富岡町、大熊町、川内村、飯館村、双葉町、楢葉町)、
H25年度(南相馬市、葛尾村)

出典:ふくしま復興のあゆみ(第16版)平成28年6月7日

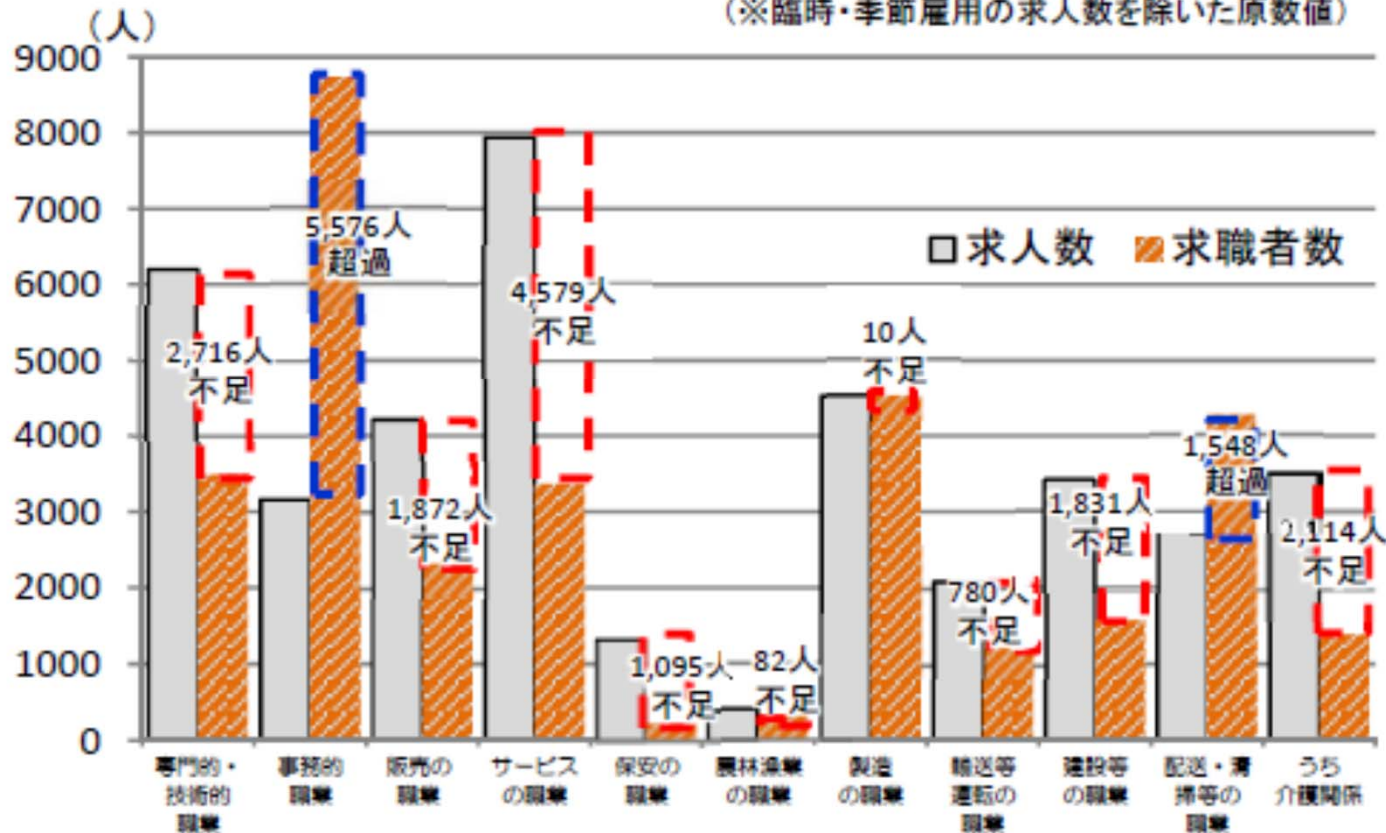
職業別雇用情勢

恐れ(Threat)

- 事務的職業等は求職超過である一方で、専門技術(建築・土木、看護・医療等)、サービス(介護・接客等)は人手不足というミスマッチが起きている。
- 生産年齢人口が減少する中、専門人材等の育成は、経済界の最重要課題のひとつ。

職業別雇用情勢等の状況(平成28年5月)

(※臨時・季節雇用の求人数を除いた原数値)



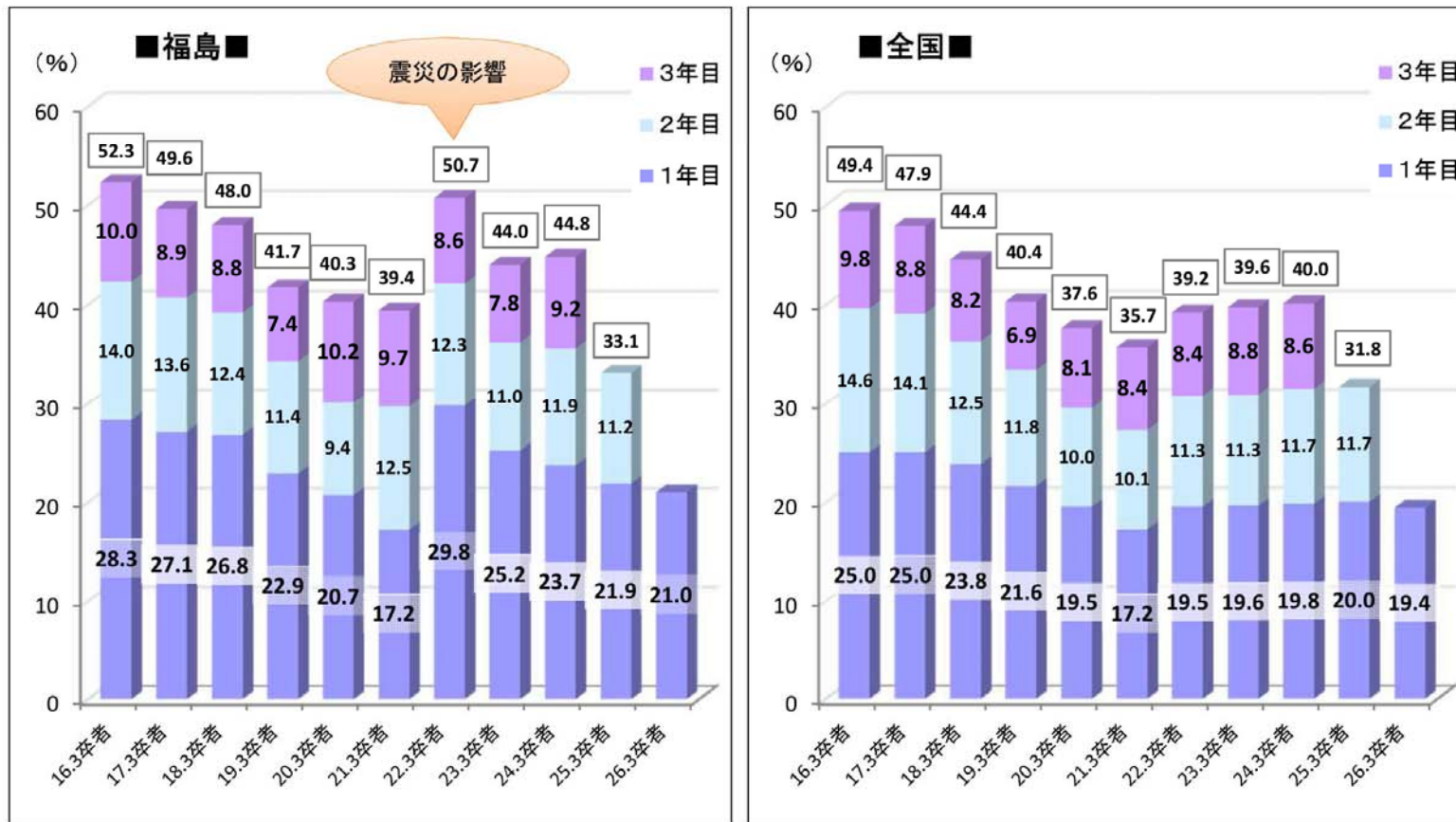
(出典)福島労働局職業安定部「最近の雇用失業情勢について」より作成

高校卒業者の離職率の推移

恐れ(Threat)

- 福島の新規高卒就職者の「3年目までの離職率」は震災以後全国との差が拡大していたが、近年は縮小の動き。
- 平成26年3月卒業者について、「1年目離職率」は全国より1.6ポイント上回っている。

① 離職率の推移 (福島/全国)



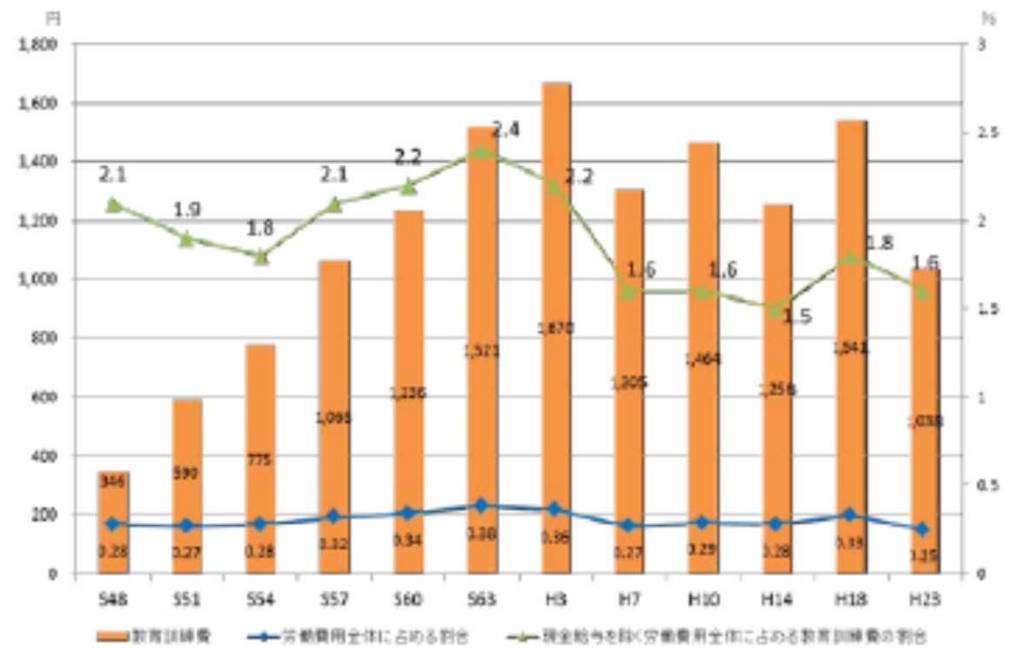
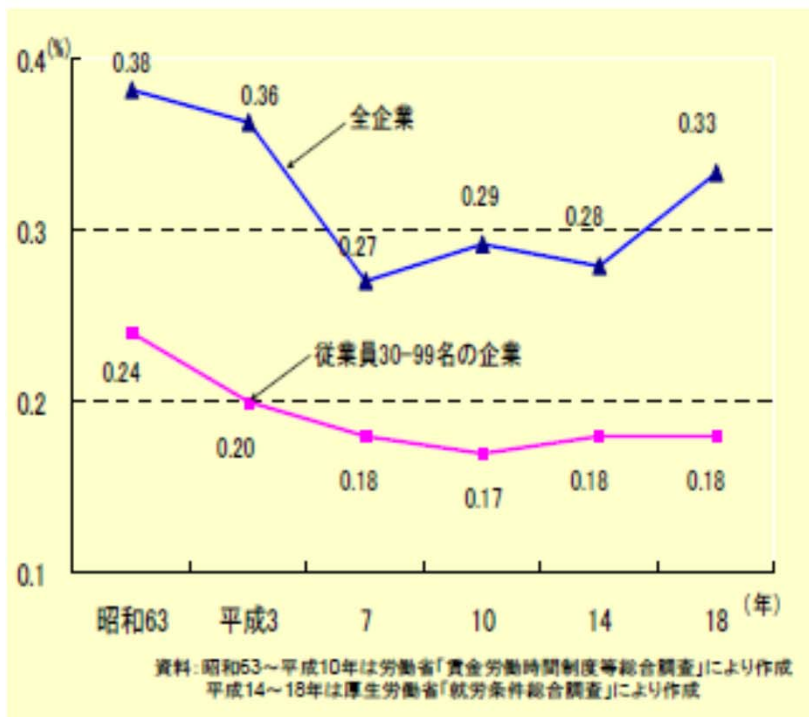
資料出所:厚生労働省職業安定局集計

(出典)福島労働局「『新規高卒就職者』の離職率について」より作成

民間企業における教育訓練費

恐れ(Threat)

- 企業における教育訓練費は低下傾向であり、労働費用に占める教育訓練費用の割合は、特に中小企業で低下傾向。
- 高校等における職業教育の必要性や期待が高まっており、教育環境の充実が必要。



出典: 労働省「労働者福祉施設制度等調査報告」、「賃金労働時間制度等総合調査報告」、厚生労働省「就労条件総合調査報告」(他社調査)
*ここでいう教育訓練費とは、労働者の教育訓練施設に関する費用、訓練修習費に付する手当や謝金、委託訓練に要する費用等の合計額をいう。
- 現金給付以外の労働費用には、退職金等の費用、現物給付の費用、法定福利費、法定外福利費、厚生費、教育訓練費、その他の労働費用が含まれる。

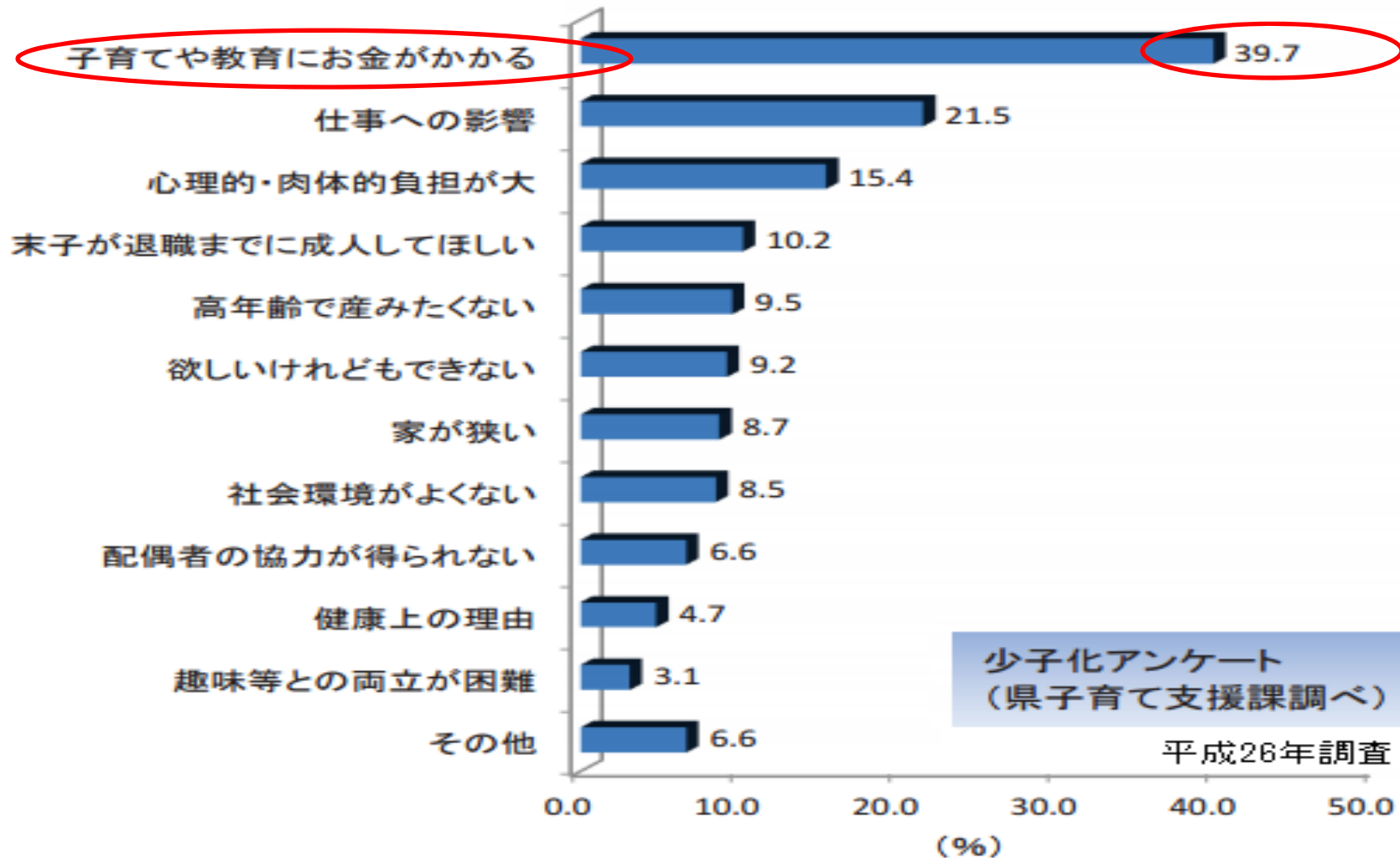
全国調査

少子化の一因（教育費負担）

恐れ(Threat)

○ 理想とする子どもの数を持つことができない理由を両親に聞いたところ、子育てや教育にお金がかかりすぎるのが、最も大きな理由のひとつ。

理想の人数の子どもを持たない理由

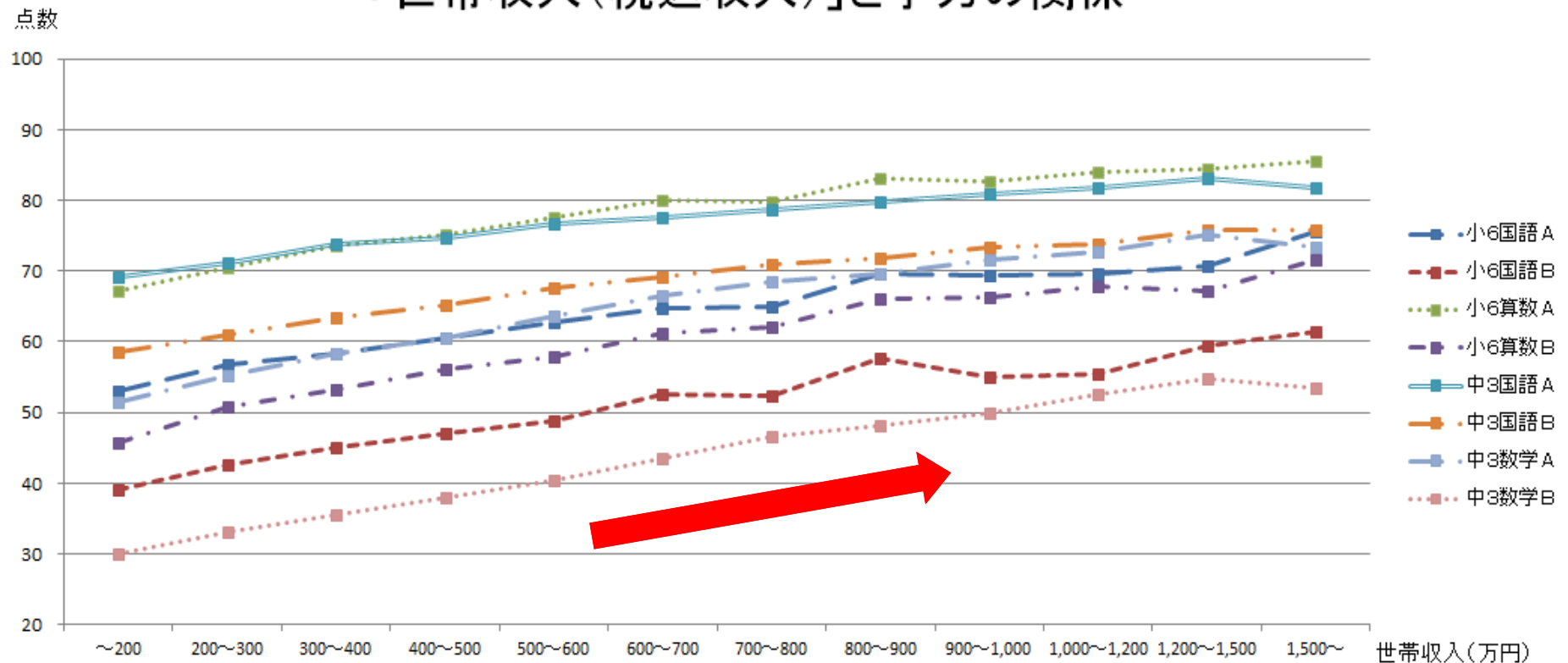


家庭の経済状況等と学力の関係

恐れ(Threat)

- 家庭の経済状況等と、子どもたちの学力に強い相関が認められる。
- 家庭における社会関係資本と、子どもの学力の相関関係は、教育経済学・教育社会学分野の研究で多数実証されている。

「世帯収入(税込収入)」と学力の関係

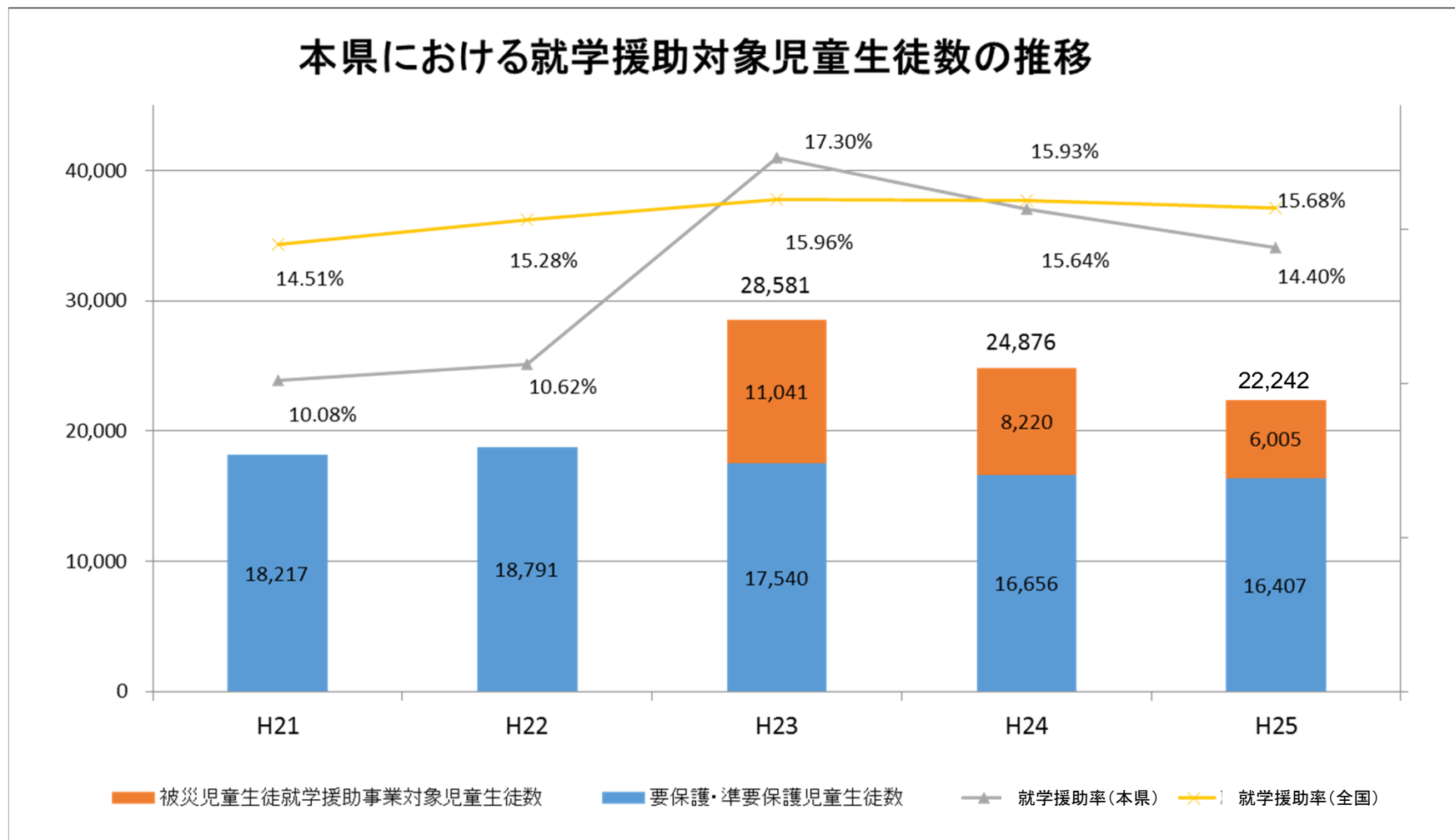


出典:平成25年度全国学力・学習状況調査(きめ細かい調査)の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究(国立大学法人お茶の水女子大学 平成26年3月28日)

就学援助・奨学金等の状況(1)

恐れ(Threat)

○震災後、就学援助対象児童生徒数が増加。減少傾向にはあるが、依然として震災前より高い水準。



出典 「就学援助実施状況等調査」等結果(文部科学省)

就学援助・奨学金等の状況(2)

恐れ(Threat)

○震災後、奨学金貸与者数が増加。現在は震災前と同じ程度の水準。



県教委 調べ

特別支援が必要な子どもの状況

恐れ(Threat)

福島県における特別支援教育の対象の概念図(義務教育段階)

(平成28年5月1日現在)

特別支援学校

視覚障害 知的障害 病弱・身体虚弱
聴覚障害 肢体不自由

0.85% (1,249人)
【全国 0.69%】

小学校・中学校

特別支援学級

視覚障害 肢体不自由 自閉症・情緒障害
聴覚障害 病弱・身体虚弱
知的障害 言語障害

1.96% (2,885人)
【全国 2.00%】

(特別支援学級に在籍する学校教育法施行令第22条の3に該当する者：198人)

通常の学級

知的障害

1.85% (2,724人)

視覚障害

言語障害

通級による指導

0.70% (1,032人)
【全国 0.89%】

聴覚障害

自閉症

肢体不自由

情緒障害

病弱・身体虚弱

学習障害(LD) 注意欠陥多動性障害(ADHD)

3.51%
(5,166人)

【全国 3.58%】

発達障害(LD・ADHD・自閉症・高機能自閉症等)の児童生徒 1.12%程度の在籍率 ※

義務教育段階の全児童生徒数 147,051人

(通常の学級に在籍する学校教育法施行令第22条の3に該当する者：28人)

※ この数値は、「平成28年福島県特別支援教育調べ」において、医師の診断がある児童生徒

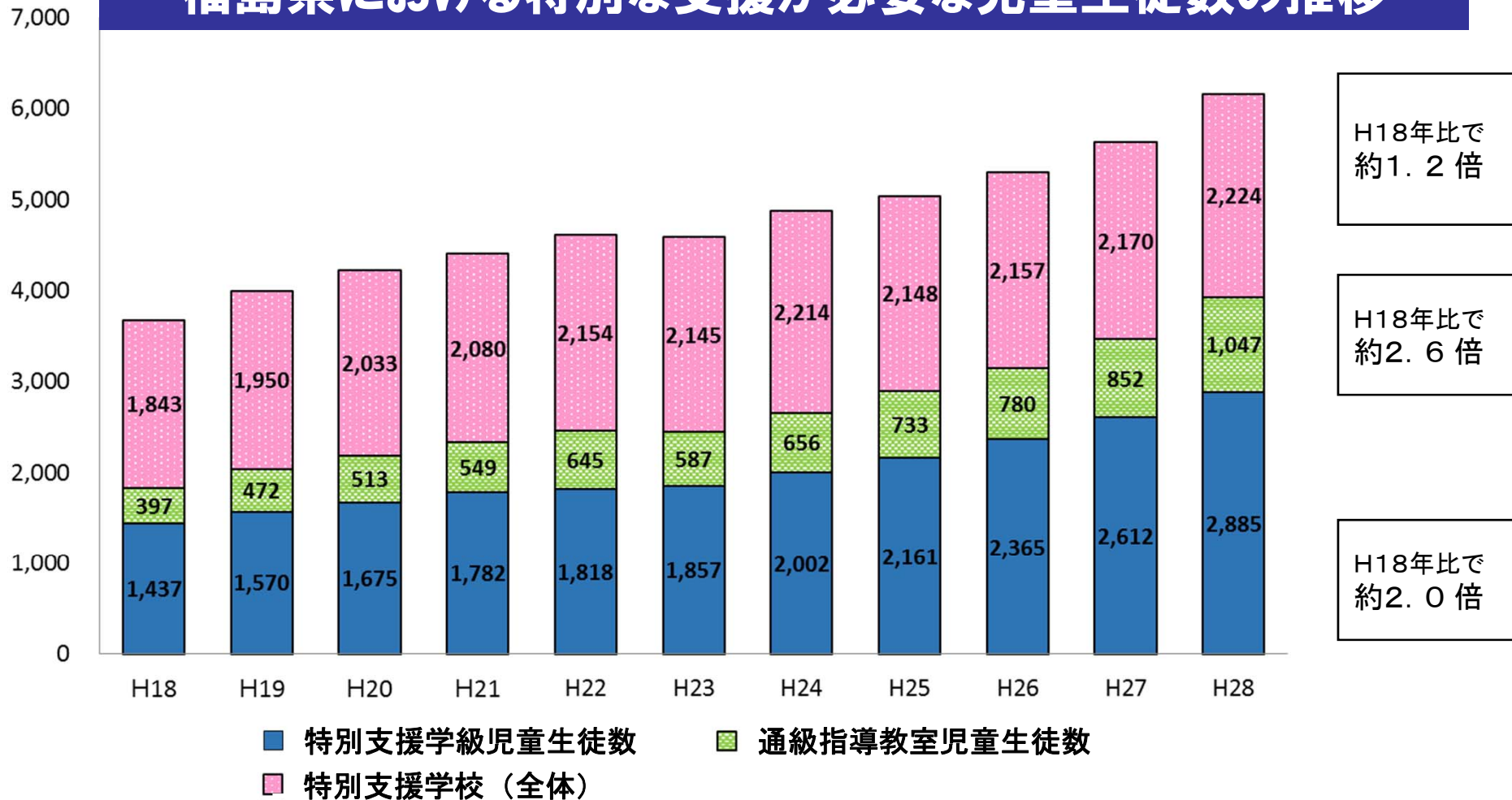
※ (現在、医療機関を受診中の児童生徒を含む)としての回答に基づくものである。

特別支援が必要な子どもの増加

恐れ(Threat)

○ 特別支援学級に在籍する児童生徒の数は、10年間で約2倍に増加している。通級指導教室、特別支援学校の在籍者数も増加している。教育環境の充実が大きな課題。

福島県における特別な支援が必要な児童生徒数の推移



H18年比で
約1.2倍

H18年比で
約2.6倍

H18年比で
約2.0倍

※ ここでいう、特別な支援が必要な子どもとは、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室に在籍する児童生徒をさす。

スマートフォン・ネットモラル（1）

恐れ(Threat)

- 本県小学生の5割以上、中学生の7割以上がスマートフォン・携帯を所持している。
- コミュニティサイト等利用による子どもの性被害は増加傾向にある。

本県児童生徒のスマホ・携帯の所持率
(単位:% ()内は全国)

	小学6年生	中学3年生
H25	37.8(44.1)	62.3(68.5)
H26	46.3(53.7)	70.6(76.5)
H27	51.0(58.0)	72.7(78.6)
H28	53.5(61.1)	75.1(81.2)

※出典:文科省「学校における教育の情報化の実態等調査」

コミュニティサイト等利用による
少年の性被害(単位:人)

	人数
H25	14
H26	24
H27	32

※出典:福島県警察「少年の非行」

スマートフォン・ネットモラル（2）

恐れ(Threat)

○ 本県教員の情報モラルに関する指導力は、全校種で全国36位と低い。

情報モラルなどを指導する能力 (平成27年度調査 単位:%)

情報モラルなどを指導する能力を4段階評価し、「わりにできる」または「ややできる」と回答した教員の割合

	小学校	中学校	高校	全校種
全国	82.5	76.0	79.7	78.9
本県	83.2	74.3	71.1	75.9
順位	24位	31位	42位	36位

※出典:文科省「学校における教育の情報化の実態等調査」

機会 (*Opportunity*)

ふたば未来学園高校での実践（1）

機会 (Opportunity)

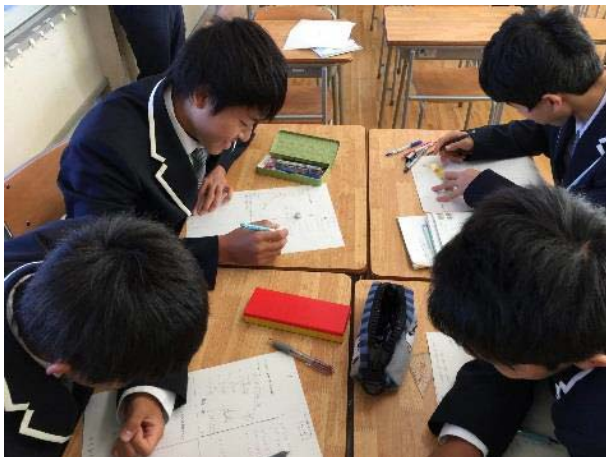
○アクティブ・ラーニング、未来創造学などを推進。



一年次の生徒達は、7名のグループに分かれ、町役場、商店、東京電力等を訪ね、復興に向けて地域が抱えている課題を調査し、その課題を演劇の台本にまとめて表現した。演劇制作のポイントは、「立場や考え方の違いによる難しい課題をそのまま表現すること、そして「全国や世界の人に福島の課題を理解してもらえる、共感してもらえる部分を見つけ出し、広げていく表現をする」ことである。



生徒たちは悩みぬきながら表現を創り上げた。多面的に復興の課題を見つめ、自らの言葉で語ることは、2、3年次で生徒自ら復興のプロジェクトを企画・実施していく学習の土台となる。探究学習でのプロジェクト・ベースド・ラーニングやアクティブ・ラーニングにより身に付けたスキルをもとに、各教科においても、担当教員がアクティブ・ラーニングにチャレンジし、様々な試みがなされている。



学習の定着率は、「講義」は5%であるのに対し、「他の人に教える」のは90%であることを踏まえてワールドカフェの手法を導入した数学の授業。



英語の授業でも即興演劇で実践力を育成している。



国語では、アクティブな思考の働きを授業で育成しつつ、定期考査でも思考の流れが追える問題を出題している。

ふたば未来学園高校での実践（2）

機会 (Opportunity)

○ ルーブリックという新たな手法により、身につけるべき能力を明確化。

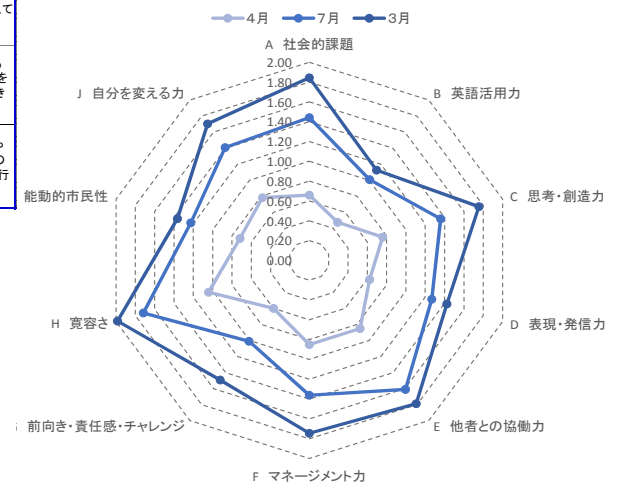
福島県立ふたば未来学園高等学校 人材育成要件・ルーブリック(7 July 2015 Ver.)

学力概念	No	資質・能力・態度(まとめと)	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
知識 Knowledge "What we know"	A	社会的課題に関する知識・理解 一般常識や基礎学力をつけながら、世界・社会の状況の変化やその課題を理解するための知識を身につける。	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	地域の復興に向けた課題や、目の前の課題についての基礎的な知識を得る。	環境・エネルギー問題など持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題について基礎的な知識を得る。	社会の課題について、習得した知識を深堀し、周辺情報や関連情報を集め理解する。	社会の課題について、目の前の課題と関係する知識を俯瞰してつなげ、人に説明できるレベルまで理解する。
	B	英語活用力 英語を使ってのコミュニケーションができるようになる。	英語でコミュニケーションをとろうとする関心・意欲・態度を持ち、自分のことについて英語で簡単に伝えられる。	自分の興味関心のあることや、地域について英語で説明できる。	地域や研究内容について、原稿を元に英語でスピーチし、簡単な質疑応答ができる。(CEFR B1レベル)	地域や研究内容について、即興で英語でスピーチし、意見交換ができる。(CEFR B2レベル)	地域や研究内容について、ストーリー、データ、事例などを交えながら英語で説得力を持って主張し、議論できる。(CEFR C1レベル)
技能(スキル・コンピテンシー) Skills "How we use what we know"	C	思考・創造力 物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、スケールの大きな考え方ができる。	与えられた情報を整理できる。	目の前にある課題やその解決のための内容を論理的に掘り下げることができる。	メディアを活用して情報を集め、情報を分析・評価・活用しながら課題を発見したり設定できる。	現実と理想の差を踏まえながら、広い視野・大きなスケールで既知の事実について批判的に考えることができる。	未知のことについても粘り強く考え、自分の考えや常識にとらわれずに創造的に考え、 新たなアイデアを生み出せる。
	D	表現・発信力 どのような場でも話すことなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる。	自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。	突然指名されたときでも慌てず、集団の前で、自分の意見や考えを相手に伝えるように表現することができる。	ICTを活用したり、データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考えながら分かりやすく伝えることができる。	多様な人々へ、 熱量とストーリーを伴って 人に落ちる形で 説得力ある発信 を行い、共感を獲得することができる。
	E	他者との協働力 異文化・異なる感覚の人・異年齢等を乗り越え、仲間と協力・協働しながら互いに高めあえる行動が取れる。	集団や他者の中で、決められたことや指示されたこと一人で行い取り組むことができる。	集団や他者の中で、自分の役割を見つけ、個性を活かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる。	集団や他者の中で、互いに良しに共感し、新たなものを取り入れながら、共通の目標に向かって活動を進めることができる。	集団や他者の中で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を作ることができる。ICTを活用して協働を促進することができる。	文化や国境を越えて 、社会を変革する行動にうつし、互いに高めあえる 同志としての関係をつくれる。
	F	マネジメント力 自分や組織での取り組みを計画性を持って進めることができる。	指示を受けながら作業を実施できる。	指示を待たず、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	全体のよって必要な作業を見出し、自分の作業に優先順位をつけて、複数の課題に同時に対応することができる。	作業の難がかりや、全体スケジュールを意図し、チームやメンバーで作業を適切に役割分担できる。	今後のスケジュールやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。
人格(キャラクター・センス) Character "How we engage in the world"	G	前向き・責任感・チャレンジ 自分を意味ある存在として考え自信を持ち、課題解決のために自分の役割を見つけ、全力で取り組み、決してあきらめず進捗できる。	自分を意味ある存在として考え、物事をポジティブに捉えることができる。	自分に自信を持ち、目の前の課題を自分のこととして好意的に捉えて、主体的に取り組める。	集団や他者の中で、自分の役割を身につけることができ、すぐに解決方法が分からなくても考え続けることができる。	困難にぶつかっても自分の責任を果たす努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても逃げずに 自分の責任を果たし、失敗してもその失敗を糧とできる。
	H	寛容さ 異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとするができる。	集団や他者の中で、他者を気づかえる。	集団や他者の中で、相手の立場や考えを想像し、共感できる。	集団や他者に対して、思いやりをもって行動し、周囲の幸せを考えることができる。	考えの違う他者に対して、ユーモアを持って接するなど、他者との違いを楽しめる。社会や環境の変化を前向きに捉えられる。	考えの違う他者の 意見や存在を 、自分や社会をより良くしていくための重要なものと 考え受け入れられる。
	I	能動的市民性 社会を支える当事者としての意識を持ち、地域や国内外の未来を真剣に考えることができる。	所属する集団の一員としての自覚を持つ。	社会の一員としての自覚を持ち、社会の抱える問題に目を向けようとする。	社会をより良くしようと、社会の主体としての意識を持ち、社会がより良くなるための考えを持つことができる。	社会に貢献しようとする意欲と自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼそうとする。	社会・未来を良くしようとする 意欲 を持ち、自分自身の意見を他者に 真剣に 語るができる。
自らを振り返り変えていく力(メタ認知) Metacognition "How we reflect and learn"	J	自分を変える力 自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動に繋げることができる。	自分を向上させるために、自分自身で目標を立てることができる。	自分を向上させるために、自分の目標と現実の差を見つめることができる。	自分の目標に近づき方策を考え自ら行動することができる。	自分の目標の達成のための行動を、常に自分自身で見直して反省しながら、学び続け、次の行動につなげて取り組むことができる。	社会の中での自分の役割や意識を俯瞰して考え、自分の目標と関連づけて大局的に行動できる。



年度当初に、全職員で「本校で育てたい生徒の姿」について意見交換し、そのために必要な「育成したい能力」を分析し、福島県双葉郡教育復興ビジョンやOECDキーコンピテンシー等の内容を踏まえ、21世紀に求められる資質能力の育成を目指して、ルーブリックを作成した。

ルーブリック調査(125名平均値)



生徒たちは半年に1回、ルーブリックの各資質・能力について自己評価を実施した。3月の調査においては各生徒が自己評価を記入した後、生徒たちが相互に自己評価結果を見せ合い自身の評価の修正を行うピア・レビューを行った。これによって、ルーブリックにも盛り込まれているメタ認知力を高めることも目指している。

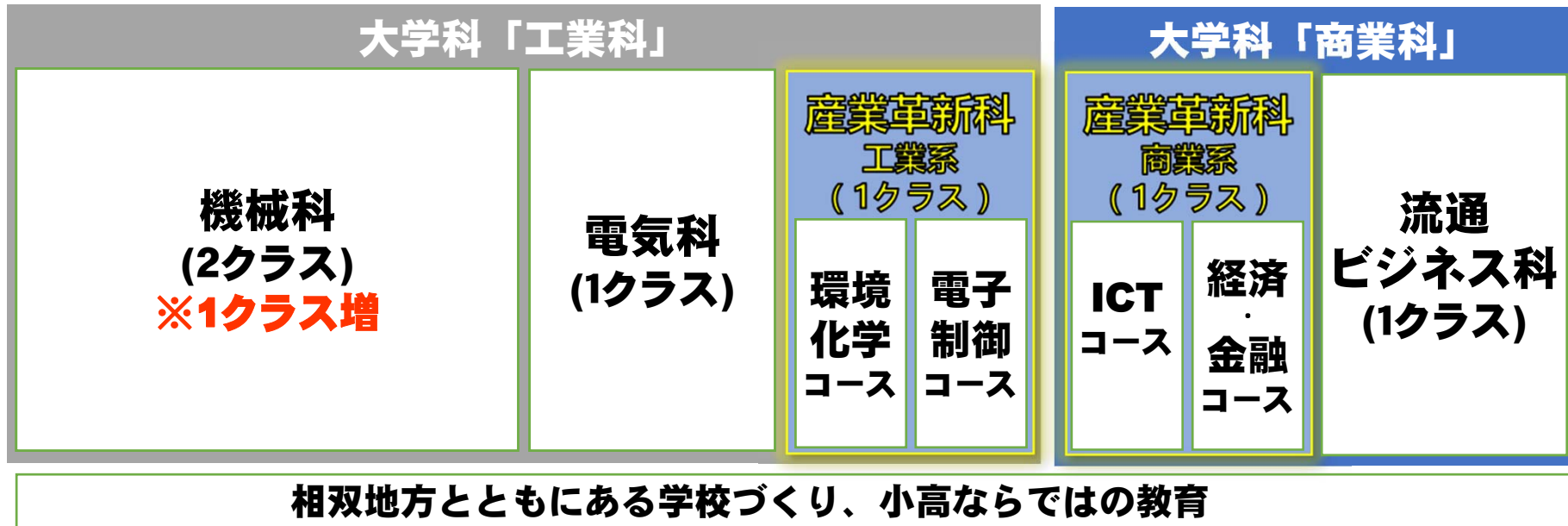
全10項目すべてにおいて成長の様子が見られるが、A社会的課題、C思考・創造力、E他者との協働力、Fマネジメント力、H寛容さ、J自分を変える力について成長幅が大きい。年度当初、全教員が「育成したい能力」として共通認識を強く持った「寛容さ、他者を大切に思う心」に沿う形で表出しており、本校生徒に対峙してきた教員の姿勢が如実に表れているともみることができる。

小高産業技術高校 開校へ

機会 (Opportunity)

○ イノベーション・コースト構想に貢献できる人材の育成 (平成29年4月開校)

- 機械科 1クラスの増設
- 産業革新科 2クラスの新設



各コースの説明

- ◇ 環境化学コース(20名) … 土壌、水質検査分析について学ぶ
- ◇ 電子制御コース(20名) … ロボット工学について学ぶ
- ◇ ICTコース(20名) … 情報(コンピュータ)通信技術について学ぶ
- ◇ 経済・金融コース(20名) … 経済や金融について深く学ぶ

- 双葉郡の復興や持続可能な地域づくりに貢献し、全国や世界で活躍できる人材を育成
- 子どもたちの実践的な学びで地域を活性化し、復興につなげる
- ふるさと創造学の実践

「福島県双葉郡教育復興ビジョン」は、双葉郡8町村の教育長を中心にまとめられました。文部科学省や復興庁、福島県教育委員会、福島大学等の協力のもと協議会を立ち上げ、学校や地域と協働してビジョン具現化を進めています。

背景

震災・原発事故から復興し、夢・希望・笑顔のある未来をつくる

多様で不確実な社会では、変化に対応し課題を解決する力が必要

子どもたちの意欲を大切に、その期待に応える

双葉郡教育復興ビジョン(2013年7月31日策定)

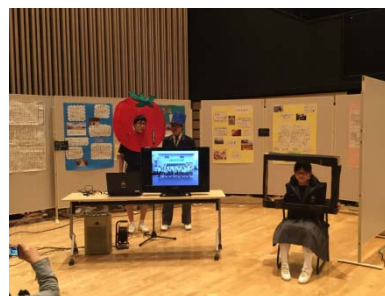
“双葉郡ならではの”魅力的な教育を推進し、未来を切り拓く力を育成

教育や学校を中心とした子どもたちの交流・地域との絆づくり

多様な主体と連携して、教育と地域復興の相乗効果を創出

ふるさと創造学サミット 平成27年12月12日

「ふるさと創造学」は、アクティブ・ラーニングを通し、子供たち一人ひとりの、そして地域の未来につながる学びを進める双葉郡の教育活動。サミットは、その取組成果を子供たちが互いに共有し地域へ発信する場です。2年目を迎えた今年は、郡内6つの高校も参加して町村ごとのブースに分かれ、ポスターセッション形式での展示・発表に挑戦しました。



発表内容に合わせた仮装、来場者に意見を求めたり感想を書いてもらったりする参加型、映像を駆使したプレゼンなど、どの学校も工夫を凝らした展示・発表でした。(郡山市立中央公民館にて)

学校再開と学校魅力化

- 避難指示等により避難している学校、避難指示解除等に伴い帰還して再開している学校では、ふるさとに根ざした特色ある教育実践を展開している。
- 県教育委員会としても「学校再開支援チーム」にてその活動を支援。

【避難している学校】

浪江町「ふるさとなみえ科」

○町への愛着が薄れないようにとの思いから、平成24年度から総合的な学習の時間を活用して「ふるさとなみえ科」を立ち上げ、浪江町の伝統文化を学ぶ機会を設けたもの。

○地域の食文化「かぼちゃまんじゅ」や伝統文化「三匹獅子」を避難先の二本松のものと比較して調べたり、浪江への思いを「なみえっ子カルタ」にまとめて「まるごとなみえミュージアム」に展示したりすることにより、子どもの目線で「ふるさと浪江」のよさを学ぶ機会を充実させている。



復興なみえ十日市祭

(浪江小学校のホームページより引用)

【帰還した学校】

川内村「復興子ども教室」

○川内村の将来を担う子どもたちが、自ら考え、判断し、行動する力を育むとともに、川内村の復興や社会に貢献できる人間として成長してくれることを願って、平成25年度から引き続き実施しているもの。

○村長や長崎大学の学生を特別講師に招いた授業や、長崎・神戸訪問による調査活動を行い、復興への思いを確かなものにしていこうとしている。

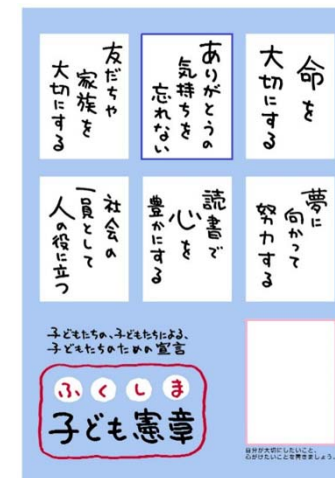
○「第1回 川内の郷かえるマラソン～復興から創生への折り返し～」は、児童から村長に対する提案により実現されたもの。

(川内小学校のホームページより引用)

ぼくの夢は、元保原小学校跡地に水族館を作る事です。震災前に毎週いっしょに行っていた大好きな相馬の海の魚を集めて相馬の魚の大きなコーナーを作りたいです。震災前、ぼくは、相馬で釣ったり、あみですくったりした魚を三十種類以上育てていました。ぼくは相馬の魚に詳しい水族館の館長になりたいです。絶対になりたい。そして、いつかきっと相馬の漁も前みたいにさかんになって、放射能の心配もなくなってぼくとお父さんとどんどん魚を集めて、水そうを魚でいっぱいにする「相馬の海水族館」それがぼくの夢です。

(「めざすは、ぼくの水族館！」平成24年度ふくしま子ども夢宣言より)

再オープンでにぎわうアクアマリン
『ふくしま道徳教育資料集第Ⅰ集』
「きぼうの水族館」より



たくましく育つ子どもたち(中学生)

機会(Opportunity)
～自然災害に立ち向かう～

ふと昔の海を思い出し、やはり海は美しいなと思った。私は海を嫌いにはなれないんだな、とも思った。時々、前の家があった所に行くことがある。海を嫌っていた母が、「窓から見える海、きれいだったのにね。」とつぶやいた。

悲しみは時間の流れが解決するという。私は、解決するきっかけの一つは思い出だと思う。私の、海が好きだという気持ちを取り戻してくれたのは、確かに私の思い出の中にあつた海なのである。思い出すことを避けていては、海はいつまでも恐怖のままだ。そっと目を閉じてみてほしい。そうすれば、どこかで海を美しいと感じる自分に出会える。そして、きっとまた、海を好きになる。

(平成24年度「モラル・エッセイ・コンテスト」より)

仮設住宅で踊る子どもたち
浪江町請戸の安波祭
「田植え踊り」
平成27年度子どもがふみだす
ふくしま復興応援体験事業
請戸芸能保存会



震災以降、差別に関する残念なニュースは多かったが、それ以上に心が温かくなる話の方が多かった。大変な時だからこそ、助け合うことが大切であることを、ぼくはこの震災を通して学んだ。たくさんの人に支えられて、ぼくたちは生きている。そのことを忘れなければ、人を傷つける言葉や相手を考えない言動をとることはないと思う。

(平成23年度第31回全国中学生人権作文コンテスト)生徒作文より)

震災を踏まえて作成された『ふくしま道徳教育資料集』第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ集に収められた人権に関する生徒作文



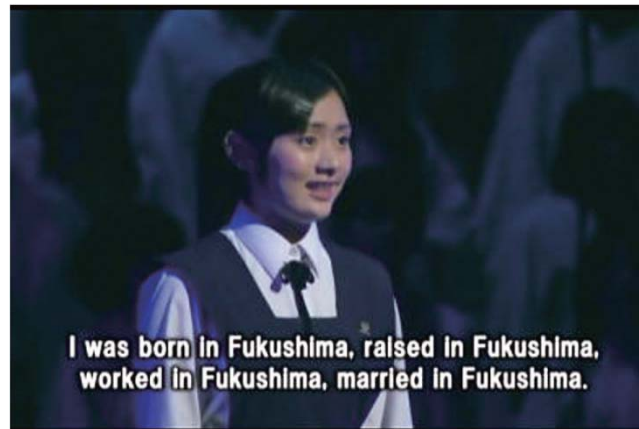
たくましく育つ子どもたち(高校生)

機会(Opportunity)
～人生に立ち向かう～

福島に生まれて、福島で育って、福島で働いて、
福島で結婚して、福島で子どもを産んで、
福島で子どもを育てて、福島で孫を見て、
福島でひ孫を見て、福島で最後を過ごす。
それが私の夢なのです。
あなたが福島を大好きになれば幸せです。

(構成劇「ふくしまからのメッセージ」第35回全国高等学校総合文化祭『ふくしま総文』より)

『ふくしま総文』
総合開会式
平成23年8月4日
津風雅堂にて
會



- 「私は、福島でヘアの産業プロとして地域を支え、共に歩み、少しでも復興に役に立ち、ご支援いただいた全国の皆様に恩返しができるよう頑張ります。」
（「理容2015メッセージ全国大会」平成27年10月優勝者 半谷竜磨さん
（震災当時 浪江高校に在籍））

- 「故郷の復興を実現するため、ふたば未来学園高校での学習を通して、地域の未来についてしっかりとしたビジョンを持ちたい。」
（平成27年度ふたば未来学園高等学校入学 日下雄太さん）

- 「一年生の故郷への思いは先輩にも負けない。私たちが故郷の未来を開拓する。」
（平成28年度ふたば未来学園高等学校入学 遠藤 瞭さん）

- 「朝の散歩のときにすれ違う、今春、高校生になった女の子から手紙をいただきました。それには、『毎朝、あいさつをしてくれて本当にありがとうございます。あいさつをしてくれると“今日も頑張ろう”と気を入れることができました。』とありました。
（平成28年4月『あいさつ役立ち 生徒からの贈り物』いわき市在住の女性
「福島民報 みんなのひろば」より）
平成28年度5月26日 学校教育審議会資料
「県立高等学校改革計画と県立高等学校の現状及び課題」より

人のために生きていたいと思っている子ども

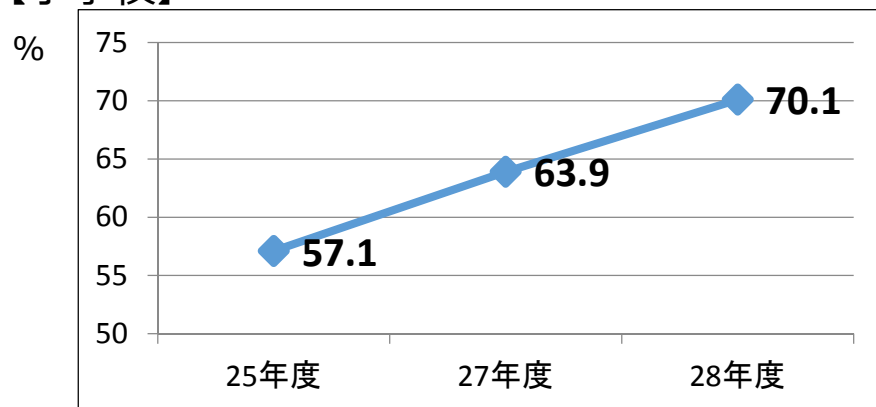
機会 (Opportunity)

○ 震災後、「身の回りで起こっている出来事などに関心を持ち」、「人が困っているときは、進んで手をさしのべる」など人のためになりたいと思っている子どもが増加した。

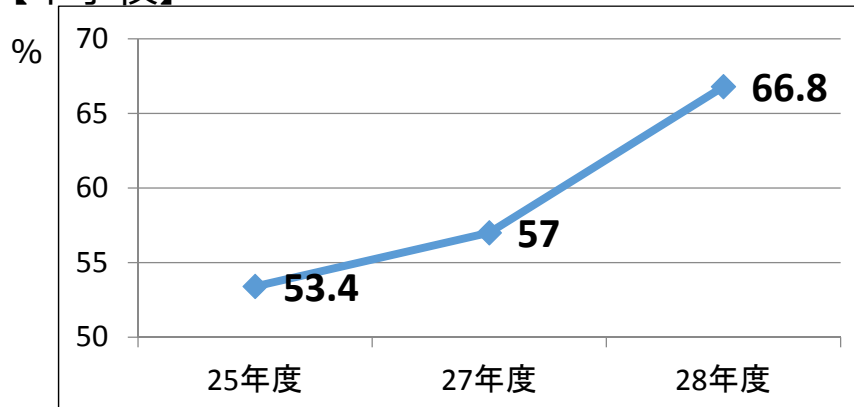
地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか。

全国学力・学習状況調査
児童生徒質問紙経年変化

【小学校】

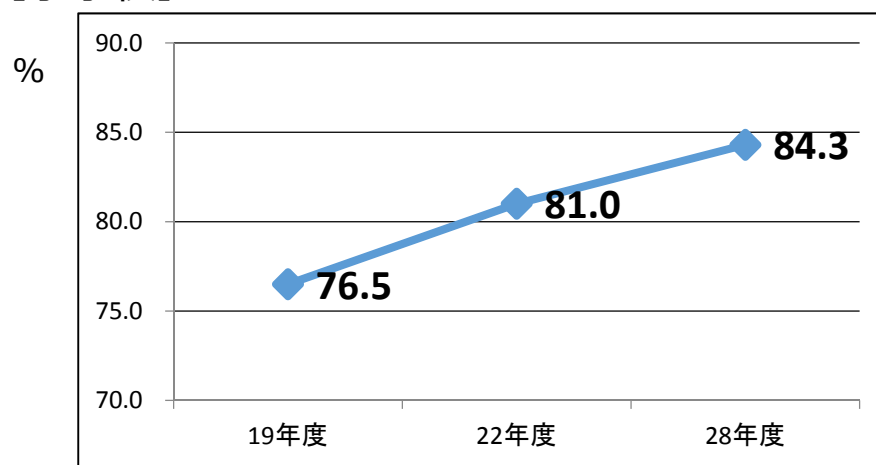


【中学校】

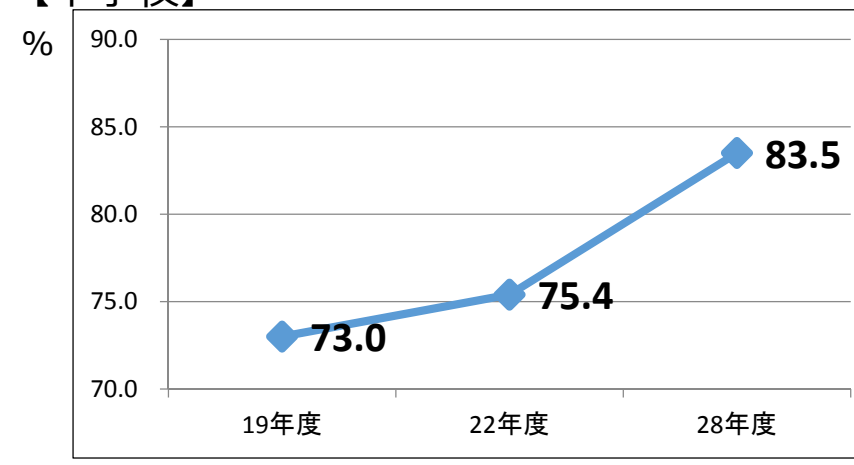


人が困っているときは、進んで助けていますか。

【小学校】



【中学校】



「自分にはよいところがある」と思う子ども

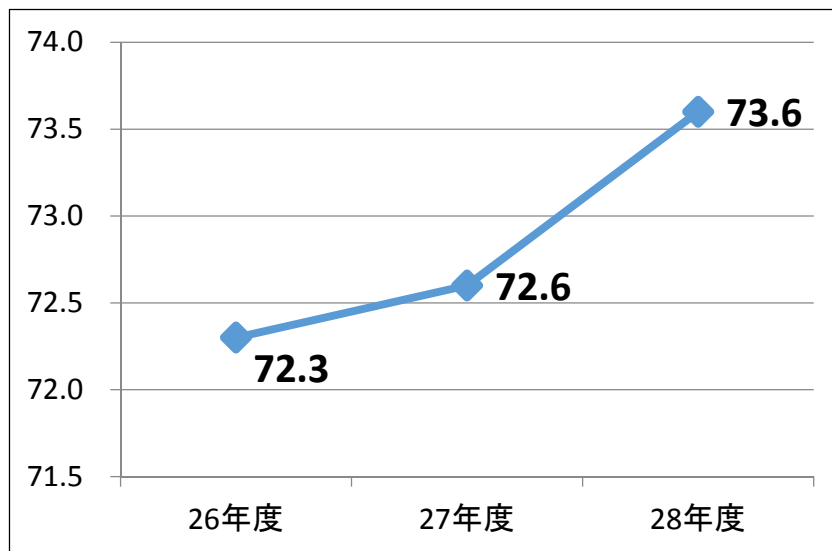
機会 (Opportunity)

○ 自分にはよいところがあると考えている児童生徒が増えてきた。

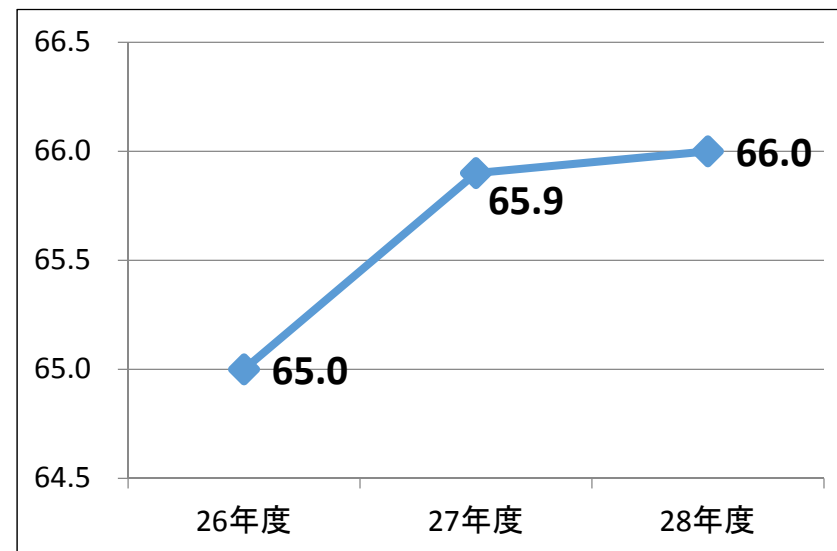
自分には、よいところがあると思いますか。

全国学力・学習状況調査
児童生徒質問紙経年変化

【小学校】



【中学校】



国際的な研究開発環境の整備

機会 (Opportunity)

○ イノベーションコースト構想や再生可能エネルギー、ロボットや廃炉技術の研究拠点の整備などが進み、国際的な研究開発環境や新たな産業が創出されている。

イノベーション・コースト構想

震災、原発事故によって失われた浜通りの産業・雇用を回復するため、廃炉やロボット技術に関連する研究開発、エネルギー関連産業の集積、先端技術を活用した農林水産業の再生、未来を担う人材の育成強化などを通じて新たな産業・雇用を創出し、住民が安心して帰還し、働けるよう、浜通りの再生に取り組んでいます。

イノベーション・コースト構想推進会議

原子力災害現地対策本部長を座長とし、知事、地元市町村長、有識者等で構成されるイノベーション・コースト構想推進会議(平成26年12月設置)において、イノベーション・コースト構想の実現に向け、関係者が一丸となって各プロジェクトを推進していきます。

ロボットテストフィールド

国内外の研究者等が集い、ロボットの基礎的・基盤的な研究を行う。
 場所 南相馬市、浪江町
 <進捗状況等>
 詳細 設計 着工 完成
 H28～: 設計等

国際産学官共同利用施設(ロボット)

国内外の研究者等が集い、ロボットの基礎的・基盤的な研究を行う。
 場所 南相馬市
 <進捗状況等>
 詳細 設計 着工 完成
 H28～: 設計等

大熊分析・研究センター(放射性物質分析・研究施設)

燃料デブリ等の性状把握、処理技術開発を行う。
 場所 大熊町
 開所 平成29年度内の一部運用開始予定
 <進捗状況等>
 詳細 設計 着工 完成
 H28年度～: 建設工事等
 H29年度: 一部運用開始予定

廃炉国際共同研究センター(国際共同研究棟)

国内外の大学、研究機関、企業等が集結し、廃炉研究と人材育成を行う。
 場所 富岡町
 開所 平成29年4月開所予定
 <進捗状況等>
 詳細 設計 着工 完成
 H28.4～: 建設工事等
 H29.4: 開所予定

福島県産学官共同研究センター(モックアップセンター)

原子炉格納容器の調査・補修用ロボット等の開発・実証実験を行う。
 場所 楢葉町
 開所 平成28年4月全面運用開始

その他の主なプロジェクト

- 情報発信(アーカイブ)拠点
- 国際産学官共同研究施設(放射線の知識を必要とした多様な研究分野)
- 大学教育拠点
- 農林水産分野プロジェクト(農業用ロボットの開発・実証、CLTの推進、水産研究拠点など)
- 技術者研究拠点
- エネルギー関連産業プロジェクト(スマートコミュニティ形成、水素によるエネルギー貯蔵・効率的利用)

再生可能エネルギーの推進

<再生可能エネルギー導入目標>
 2015年度(累計) 26.6%
 2030年 100%
 2040年 100%
 2050年 100%

CO2フリー水素の活用等に向けた四者連携

再生可能エネルギーを活用し製造段階で二酸化炭素(CO2)を排出しない「緑水素」CO2フリー水素の活用に向けた研究開発の強化、福島県内企業等との連携促進のほか、人材育成・交流などに取り組んでいます。

産業技術総合研究所 福島再生可能エネルギー研究所

2040年頃には、県内エネルギー需要の100%相当量を再生可能エネルギーで生み出すことを目標に再生可能エネルギーの導入拡大を進めるとともに、拠点整備等を通じて製造産業の集積・育成を図ります。
 再生可能エネルギー関連企業による製品・部品等の展示や取引関係会、各種セミナー等からなる展示会を10月19日、20日に開催予定。
 H28.10.19-20 開催予定!

浮体式洋上風力発電実証研究事業

浮体式洋上風力発電システムの安全性、信頼性、経済性を検証。研究開発等の拠点を形成し、風力発電関連産業の集積を目指す。
 場所 福島県沖
 [第一期] 2メガワット風車
 平成29年11月11日より運転開始
 [第二期] 7メガワット風車
 平成27年12月26日より運転開始
 5メガワット風車
 平成28年7月に設置予定

スマートコミュニティ構想の推進

復興まちづくりにおいて、太陽光、風力等の再生可能エネルギーやLNGによる発電供給などの分散型エネルギーを効率的に利用する仕組みを活用。
 場所 新地町、楢葉町、相馬市、浪江町

沿岸部大規模太陽光発電事業

場所 南相馬市
 出力 70メガワット
 稼働 平成30年運用開始予定

地熱土湯温泉16号 温泉バイナリー発電所

福島県
 出力 400キロワット
 稼働 稼働中

グリーン発電会 木質バイオマス発電所

会津若松市
 出力 5.7メガワット
 稼働 稼働中

郡山市引高原風力発電所

郡山市
 出力 65.98メガワット
 稼働 稼働中

小名浜太陽光プロジェクト

いわき市
 出力 18.4メガワット
 稼働 稼働中

大熊町ふるさと再興メガソーラー

大熊町
 出力 1.89メガワット
 稼働 稼働中